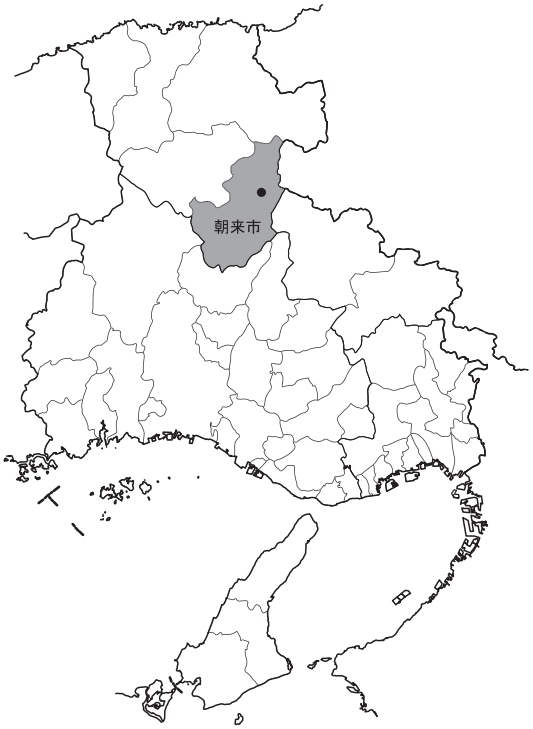
兵庫県文化財調査報告　第464冊

朝 来 市

喜 多 垣 遺 跡

－ 道路改良事業　一般県道檜倉山東線に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書 Ⅲ －



平成26年(2014)年3月

兵庫県教育委員会

遺跡の位置および周辺の航空写真

国土地理院 写真

調査箇所遠景（南から）

調査箇所遠景（南から）

調査区遠景（北東から）

調査区遠景（南から）

調査区北半部（真上から－上が西）

調査区南半部（真上から－上が西）

調査区北半部全景（南から）

調査区全景（北から）

調査区南部の遺構および土層断面 (北から)

調査区中央部東壁土層断面（西から）

調査区北部クロボク層土層断面（南から）

①P 26（北から）

②P 43（北西から）

③P 57（東から）

④P 47（西から）

⑤P 62（南から）

⑥P 62（東から）

⑦P 55（西から）

⑧P 59（南から）

出土土器（奈良時代）

出土土器（平安時代）

例　言・凡　例

1．　本書は朝来市山東町喜多垣に所在する、喜多垣遺跡の発掘調査報告書である。

2．　本発掘調査は、県道バイパス事業（一般県道檜倉山東線）に伴うもので、兵庫県但馬県民局養父土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、兵庫県立博物館が実施した。

　また、出土品整理・調査報告書作成作業は、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が実施した。

3．　喜多垣遺跡の発掘調査のうち、確認調査は平成23（2011）年の５月と12月の２度にわたって実施し、５月に確認調査を実施した部分の本発掘調査は平成24（2012）年度に実施した。発掘調査期間・担当者および兵庫県が設定した遺跡調査番号は以下のとおりである。

　確認調査　　平成23年５月16日～平成23年５月17日　（約55㎡）（遺跡調査番号：2011180）

　　実施機関：兵庫県立考古博物館　埋蔵文化財調査部

　　担当者：調査第２課　別府洋二・山上雅弘

　確認調査　　平成23年12月９日　（４㎡）（遺跡調査番号：2011281）

　　実施機関：兵庫県立考古博物館　埋蔵文化財調査部

　　担当者：企画調整課　上田健太郎

　本発掘調査　　平成24年７月３日～平成24年８月17日　（833㎡）（遺跡調査番号：2012001）

　　実施機関：公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター　埋蔵文化財調査部

　　担当者：調査第１課　長濱誠司、調査第２課　岸本一宏

4．　発掘調査にあたっては、長野建設株式会社に工事委託して実施し、現場代理人の安積茂年氏には大変お世話になった。また、調査区の空中写真測量は株式会社オーシスマップに委託して実施した。

5．　出土品整理（報告書作成）事業は平成25（2013）年度に実施した。実施期間・機関は以下のとおりである。

　平成25（2013）年４月１日～平成26（2014）年３月31日

　公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター　埋蔵文化財調査部

6．　本書に使用した写真のうち、遺構については調査員が撮影したものを、遺物写真については株式会社クレアチオに委託して撮影したものを使用した。

7．　遺構出土炭化材の放射性炭素年代測定は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。

8．　本書の執筆は、公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部の岸本一宏・長濱誠司がおこない、編集は、公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部非常勤嘱託員の池田悦子の協力を得て岸本がおこなった。

9．　本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。

10.　発掘調査・報告書作成にあたり、地元自治会をはじめ東畠孝輔氏・井藤桂太郎氏、朝来市教育委員会の田畑　基・中島雄二氏のご協力・ご教示を得た。記して感謝の意を表します。

本 文 目 次

第１章　はじめに
第１節　遺跡をとりまく環境
１．地理的環境 …… 1
２．歴史的環境 …… 2
第２節　調査の経緯・経過
１．発掘調査 …… 7
２．出土品整理 …… 8
第２章　調査結果
第１節　調査区の概要 …… 9
第２節　検出遺構 …… 10
１．北部調査区の土層と遺構 …… 11
２．中央部調査区の土層と遺構 …… 13
３．南部調査区の土層と遺構 …… 17
第３節　出土遺物 …… 19
１．遺構出土遺物 …… 20
２．包含層出土遺物 …… 26
３．出土金属製品・石製品 …… 32
第３章　総　括
第１節　篠窯跡生産須恵器について …… 33
第２節　押坂神社について …… 36
第３節　総　括 …… 38

巻頭写真図版目次

巻頭写真図版１　遺跡の位置および周辺の航空写真
巻頭写真図版２上　調査箇所遠景（南上空から）
下　調査箇所遠景（東上空から）
巻頭写真図版３上　調査区遠景（北東上空から）
下　調査区遠景（南上空から）
巻頭写真図版４上　調査区北半部（真上から－上が西）
下　調査区南半部（真上から－上が西）
巻頭写真図版５上　調査区北半部（南から）
下　調査区全景（北から）
巻頭写真図版６上　調査区南部の遺構および土層断面（北から）
中　調査区中央部東壁土層断面（西から）
巻頭写真図版６下　調査区北部クロボク層土層断面（南から）
巻頭写真図版７①　Ｐ26（北から）
②　Ｐ43（北西から）
③　Ｐ57（東から）
④　Ｐ47（西から）
⑤　Ｐ62（南から）
⑥　Ｐ62（東から）
⑦　Ｐ55（西から）
⑧　Ｐ59（南から）
巻頭写真図版８上　出土土器（奈良時代）
下　出土土器（平安時代）

挿 図 目 次

第１図　周辺の古墳時代～中世の遺跡 …… 3
第２図　篠窯出土土器と山東町出土篠窯製土器類 …… 34
第３図　山東町域を中心とした喜多垣遺跡関連の神社と遺跡 …… 37
第４図　検出遺構変遷図 …… 39

表 目 次

第１表　周辺の古墳時代～中世の遺跡名表 …… 4
第２表　ＳＫ７出土古銭一覧表 …… 21

図 版 目 次

図版１　喜多垣遺跡位置図
図版２　喜多垣遺跡調査区全体図
図版３　調査区南部の遺構・掘立柱建物跡
図版４　調査区南部西側壁土層断面図
図版５　調査区中央部の遺構
図版６　ＳＫ７と出土遺物
図版７　調査区北部の遺構
図版８　調査区北部東斜面部下層遺構
図版９　調査区中央部・北部土層断面図
図版10　土壙・柱穴出土土器
図版11　柱穴・調査区南部包含層出土土器
図版12　調査区中央部包含層出土土器
図版13　調査区北部包含層出土土器
図版14　出土金属器・石製品

写 真 図 版 目 次

写真図版１上　調査区北半部（南から）
下　調査区全景（北から）
写真図版２上　調査区北部全景（北から）
下　調査区中央部全景（北から）
写真図版３上　調査区南部掘立柱建物跡（南から）
下　調査区南部北端柱穴群全景（東から）
写真図版４上　調査区南部西側壁土層断面（北から）
中　調査区北部南側トレンチ土層断面（南から）
下　調査区北部北側トレンチ土層断面（南から）
写真図版５上　調査区北部東側段状遺構（北から）
下　調査区北部東側段状遺構（南東から）
写真図版６①　ＳＫ７（西から）
②　ＳＫ７完掘状況（西から）
③　ＳＫ７銭貨出土状況（西から）
④　ＳＫ７銭貨出土状況（南から）
⑤　ＳＫ７礫出土状況（南から）
⑥　土器Ｂ出土状況（南から）
⑦　土器Ｃ出土位置（南から）
⑧　土器Ｃ出土状況（南から）
写真図版７①　Ｐ12土器出土状況（南東から）
②　Ｐ54土器出土状況（西から）
③　Ｐ70土器出土状況（南から）

写真図版７④　Ｐ33土器出土状況（北から）
⑤　Ｐ47土器出土状況（西から）
⑥　Ｐ62土器出土状況（北から）
⑦　Ｐ59土器出土状況（北西から）
⑧　Ｐ74礎石出土状況（東から）
写真図版８①　調査地遠景（南から）
②　調査前全景（南から）
③　調査前全景（北から）
④　機械掘削状況（南から）
⑤　人力掘削状況（南から）
⑥　遺構掘削状況（東から）
⑦　地元説明会開催状況（北から）
⑧　押坂神社（南から）
写真図版９上　土壙出土土器（１）・柱穴出土土器（１）
下　柱穴出土土器（２）
写真図版10　土壙出土土器（２）・柱穴出土土器（３）
写真図版11上　柱穴出土土器（４）、南部・中央部包含層出土土器（１）
下　南部・中央部包含層出土土器（２）
写真図版12　柱穴出土土器（５）、南部・中央部・北部包含層出土土器
写真図版13上　南部・中央部包含層出土土器（３）
下　南部・中央部包含層出土土器（４）
写真図版14上　中央部包含層等土土器
下　北部包含層出土土器（１）
写真図版15上　北部包含層出土土器（２）
下　出土金属器
写真図版16　北部･中央部間水路出土石製品
写真図版17上　ＳＫ７出土土器
下　ＳＫ７出土黒色小礫
写真図版18　ＳＫ７出土古銭

第１章　はじめに

第１節　遺跡をとりまく環境

１．地理的環境

喜多垣遺跡は、朝来市東部で朝来市山東町域中央部の「山東盆地」南西縁辺に位置する。

朝来市は旧朝来郡の４町が平成17（2005）年に合併して誕生したが、朝来町以外は旧町の呼称名をそのまま残している。遺跡が存在する朝来市は、東側の一部が京都府と境を接し、兵庫県北部の旧「但馬国」の南東部にあたり、同様に南は「播磨国」、東は「丹波国」と境を接している。

朝来市のほぼ中央部には但馬最大の河川である円山川が北流し、和田山町中心部でその方向を北西に大きく変えるが、その流域に小盆地や谷部が存在している。

朝来市内東部に位置する山東町の中心部分をなす山東盆地は、東西に長く西部が南方に短くひろがった横向きの「Ｌ」字に近い形状を呈するが、その中の西部では三保川、与布土川が北流し、東部では柴川、粟鹿川が西流している。これらの河川は山東盆地北西部で磯辺川と合流し、与布川の名称で円山川屈曲部につながる。また、盆地の南西端では、西側の迫間から山間を流れる小河川の迫間川が北東方向に流れ、喜多垣を通って溝黒で与布土川に合流している。

朝来市は古代山陰道と「但馬道」と称される道路の合流地点であるが、現在は京都府から国道９号線が朝来市内の山東町・和田山町を通り、国道427号線が丹波市から遠阪峠を越えて山東町で国道９号線と合流する。また、姫路市につながる国道312号線は和田山町で国道９号線と合流し、但馬最大の河川である円山川も国道312号線に沿って北流し、和田山町中心部で北西方向に流れを変え日本海に注ぐ。

古代山陰道は国道427号線とほぼ並行して丹波から遠阪峠を越え、同様に国道312号線と並行する「但馬道」と和田山町中心部付近で山陰道と合流するようである。

一方、山東町南西部では、山東町喜多垣から迫間を抜けて和田山町竹田へとつながる東西方向の道路がある。この部分は、北側に存在する標高464ｍの金梨山を中心とした山塊と、南側の標高756ｍの朝来山を中心とした山塊の挟間にある地溝帯のような地形となっていて、道路の最高所の標高は200ｍに満たない。なお、この峠付近には横穴式石室の古墳が数多く築造されていることから、少なくとも古墳時代後期には街道として成立していた可能性が高い。

このように、朝来市内でも和田山町・山東町域は古代からの主要道路の接点が存在し、また、円山川も含めて陸運・舟運の要衝の地であったことが容易に判断できる。

円山川は、朝来市和田山町中心部での流れの方向が変わる地点で山東町側から流れ込む与布土川と合流する。その与布土川も山東町北西部でいくつかの小河川と合流しているが、それら小河川の流域は盆地状地形を呈している。山東盆地の南北にのびる平地部分の西端を北流するのが与布土川で、標高962ｍの粟鹿山の懐にその源を発している。一方、三保川は山東盆地西部の平地東端を北流するが、「Ｌ」字形を呈する山東盆地の屈曲部において、東西に長い平地部分の南端を西流してきた粟鹿川と合流して盆地を北西方向に横断する。この粟鹿川も盆地北部において、東西に長い平地部分の北端を西流してきた柴川と合流する。さらに前述の磯部川と合流し、盆地北西端で与布土川と合流し、さらに和田山盆地で円山川と合流する。

さて、喜多垣遺跡が存在する丘陵の山麓は、西側の山頂から約25mの落差をもった急傾斜で下がったのち、迫間川までの間がゆるやかな扇状地状の台地となっている。今回調査を実施したのはその山裾部分にあたり、調査前の標高は140 ～ 142mである。

喜多垣遺跡の調査区内の表土を除去した面では岩盤が風化した土壌が大半であった。ただし、調査区の各部分においてその様相は少し異なっていて、北部では耕土直下で岩盤に近い花崗岩盤風化土となっていたが、南部では花崗岩盤風化土が腐植土とまじりあいながら幾重にも堆積しており、北部の東側では純粋に近い花崗岩盤風化土の直上でクロボク層が認められた。中央部ではクロボク層の下も風化土の二次堆積層となっていて、礫を多く含んだ部分も認められた。なお、北部においては深い遺構を掘削すると、遺構内下部に軟質の花崗岩盤層が現われたことから、丘陵の根幹をなすのは花崗岩盤であるが、北部を除いた調査区内では、数次にわたって堆積した厚い岩盤風化土で覆われていたことが判明した。岩盤層は橙色から赤褐色を呈する軟質のもので、山東盆地周囲の山塊でよく見られるものである。

この岩盤は、主に古第三紀に形成された山陰帯に属する花崗岩で、分布する主な岩体の地域により、当該地域のものは和田山花崗岩（Ｇｗ）と呼ばれ、和田山町を中心として東西約18km、南北約８kmの長円形をした岩帯であり、生野層群に対して接触変成を与えているものであるといわれる。和田山花崗岩は、塊状で淡紅色を呈し、主に細粒～中粒の黒雲母花崗岩からなるとされているものである。

なお、生野層群は山陰帯の火山岩類で、兵庫県北部日本海側を中心に分布し、約１億年前の白亜紀末期～古第三紀にわたる火山活動によって形成された流紋岩および安山岩質の火山岩・火山砕屑岩で、舞鶴帯以南に分布するものを生野層群と呼称されている。

２．歴史的環境

山東盆地内および盆地に面した丘陵部には多数の集落跡・古墳などが存在しているが、西側の平野部に面した東西丘陵端や盆地中の小丘陵上には多数の前半期古墳が集中的に存在している。特に、盆地の屈曲部に位置する柿坪遺跡の南東側に存在する山塊には尾根を埋め尽くすように多数の古墳が密集して存在している。また、山東盆地西部では、西側の丘陵から平野部に向かって多数の尾根がのびており、その尾根上にも多数の前半期古墳が存在している。それらのうち、南部の小丘陵上に存在するのが喜多垣遺跡で、現在確認できる総数は58基で構成されている。

喜多垣遺跡が存在する朝来市山東町周辺には、各時代にわたって数多くの遺跡が存在しており、それらについては北近畿豊岡自動車道関連の各報告書において述べられているため、以下では本古墳群に直接関連する古墳時代および直後の奈良時代に限った周辺の歴史的環境について述べることとする。

周辺の古墳時代遺跡

古墳時代の集落跡は柿坪遺跡（106）や山東盆地内東部に位置する粟鹿遺跡で前期以降大規模なものが営まれており、加都遺跡（36）も中期以降の大規模な集落である。また、宮ノ本遺跡群（44）では古墳時代前期の竪穴住居跡２棟が検出され、和田山町筒江中山遺跡（34）でも前期の竪穴住居跡が検出されている。一方、和田山町筒江大垣（浦石）遺跡（31）では前期初頭頃の粘土採掘壙が調査されている。柿坪遺跡では古墳時代中期の大型掘立柱建物跡が複数棟検出されており、但馬最大の古墳時代集落である。初期須恵器も多数出土していることから、首長居館と推定されている。なお、永徳遺跡（105）では古墳時代後期の竪穴住居跡が検出されている。

第１図　周辺の古墳時代～中世の遺跡

第１表　周辺の古墳時代～中世の遺跡名表

1	宮ノ谷古墳群	36	加都遺跡（宮ヶ田地区）	71	春の木田古墳群	106	柿坪遺跡
2	寺山古墳群	37	長者谷古墳群	72	くねり谷古墳	107	柿坪中山古墳群
3	東南山古墳群	38	比治向山古墳群	73	くねり谷古墳群	108	越田段古墳群
4	城ノ越古墳群	39	イノオク古墳群	74	久田和１号墳	109	越田四辻遺跡
5	大月向山古墳群	40	法興寺跡	75	久田和２号墳	110	越田塚脇遺跡
6	大将軍古墳群	41	上エ山古墳群	76	岡崎古墳	111	越田塚脇古墳
7	北大工山古墳群	42	西山古墳群	77	池の谷古墳群	112	椎ノ木古墳群
8	大工山古墳群	43	恵谷遺跡	78	ブロ山田古墳	113	越谷古墳群
9	矢谷古墳群	44	宮ノ本遺跡群	79	水谷古墳	114	南越谷古墳群
10	押坂古墳群	45	城ノ山裏古墳群	80	江谷古墳群	115	恋谷遺跡
11	又木谷古墳群	46	城ノ山古墳	81	石部神社古墳	116	三保尾荒地古墳
12	**喜多垣遺跡**	47	池田古墳	82	空山古墳	117	三保東山古墳
13	喜多垣古墳群	48	観音山古墳群	83	新堂見尾古墳群	118	堀所古墳群
14	打田２号墳	49	寺谷古墳	84	上竹散布地	119	山根畑中古墳群
15	森向山古墳群	50	林垣古墳群	85	ハス子古墳群	120	山根古墳群
16	打田古墳	51	秋葉山古墳群	86	大師山古墳群	121	三保向山古墳群
17	池ノ端古墳群	52	寺内オタケ山古墳	87	楽音寺北山１号墳	122	三保遺跡
18	迫間古墳群	53	岡田窯跡群	88	梶原遺跡	123	与布土氏館跡
19	加都王塚古墳	54	更杵古墳	89	和賀散布地	124	馬場散布地Ａ
20	加都車塚古墳	55	大盛山古墳群	90	若水古墳（Ａ 11 号）	125	芝花散布地Ｂ
21	但馬道	56	小丸山古墳	91	若水古墳群	126	城ノ越遺跡
22	加都神社裏古墳群	57	柳原１号墳	92	切戸山古墳群	127	梅ヶ作遺跡
23	上山古墳	58	門在古墳群	93	五反田１号墳	128	北山遺跡
24	連願寺古墳	59	柳原２号墳	94	五反田遺跡Ｂ	129	楽音寺散布地
25	城ヤブ古墳群	60	岡田２号墳	95	馬場散布地Ｂ	130	筒江大垣遺跡
26	城ヤブ１号墳	61	長塚古墳	96	持谷古墳	131	竹田城下町関連遺跡
27	筒江古墳群	62	冑塚古墳	97	越田宮之前遺跡	132	大林寺跡
28	長尾古墳群	63	岡田１号墳	98	馬場古墳群	133	竹田城下町
29	大月北山古墳群	64	野村１号墳	99	柿坪向山古墳群	134	加都遺跡（桜地区）
30	茶すり山古墳	65	西地古墳群	100	和賀向山古墳群	135	加都遺跡（焼御堂・岡ノ森地区）
31	筒江大垣遺跡	66	東河寺遺跡	101	芝花古墳群	136	室尾中世墓跡
32	筒江梶原古墳群	67	堂山古墳	102	芝花散布地Ａ	137	室尾寺跡
33	筒江中山古墳群	68	小川古墳群	103	芝ヶ端古墳	138	鞠散布地
34	筒江中山Ⅱ遺跡	69	宮丸山古墳群	104	芝ヶ端遺跡	139	陳東氏館跡
35	中山遺跡	70	宮古墳群	105	永徳遺跡		

墳墓では古墳時代前期初頭の小規模墳が若水古墳群（91）で発見されているが、盟主墳である若水古墳（90）は長径約 40 m、高さ約５mの円形墳墓で、長大な棺のなかに銅鏡２点が副葬されていた。鏡のひとつは２世紀後半に中国で製作された飛禽鏡で、古墳の築造時期も大きくは降らないものと推察される。新堂見尾１号墳（83）の第１主体部は石室系石棺で、重圏文鏡や剣・鉇が副葬され、円山川西岸に位置する和田山町向山２号墳でも同構造の第２主体部に、破砕された内行花文鏡が置かれていた。出土土器と鏡の型式から、ともに古墳時代前期の前半に相次いで築造されたものと考えられる。

古墳時代前期後半には和田山町城ノ山古墳（46）が築造され、長大な木棺内に三角縁神獣鏡をはじめ６面の鏡、石釧、石製合子、鉄刀、鉄斧などが副葬されていた。馬場 19 号墳（98）でも木棺内に方格規矩文鏡、東南山３号墳（３）の第３主体部木棺内に石釧が副葬されており、築造時期が近いものと思われる。なお、東南山２号墳第２主体部木棺内には珠文鏡が副葬されていた。また、和田山町秋葉山２号墳（51）はこの時期に、円山川西岸に接した丘陵上に位置する梅田東古墳群の 10 ～ 14 号墳はこの時期まで築造され、向山・市条寺古墳群や柿坪中山古墳群（107）ではこれ以降も古墳築造は続いている。なお、芝花 26 ～ 28・73・74 号墳（101）もこの頃に築造されている。

古墳時代前期末～中期初頭には但馬最大の前方後円墳で、推定長 135 mの和田山町池田古墳（47）が築造され、埋葬施設には蓋石に彫刻のある長持形石棺が納められていたことが想定されている。和田山町筒江中山 23 号墳（33）もこの頃の築造と想定され、内行花文鏡が副葬されていた。なお、山東盆地東端に位置する方谷５号墳もこの時期である。

古墳時代中期中葉には最大径 90 mの大円墳で、多量の武器・武具が副葬された茶すり山古墳（30）が築造されており、円山川西岸の和田山町梅田古墳群が造墓を開始し、鏡や琴柱形石製品が出土した梅田１号墳をはじめ、持谷古墳（96）が築造されている。なお、梅田古墳群北側に存在する独立丘陵や粟鹿神社経塚が存在する円形マウンドも古墳時代中期の円墳である可能性が高い。

中期後半には旧朝来町桑市に所在する船宮古墳が築造されている。90 mの前方後円墳で、須恵質の埴輪が出土している。内部主体は竪穴式石室と想定され、和田山町加都車塚古墳（20）も内部主体が竪穴式石室のようであり、中期後半の所産の可能性が高い。この時期の小規模墳では馬場 17 号墳（98）や向山５・６・11 号墳および大月北山古墳群（29）、筒江中山 24 号墳（33）がある。

中期末～後期初頭には和田山町岡田古墳群が築造されるが、規模は小さくなり、盟主墳である長塚古墳（61）は全長 70 mの前方後円墳であり、胄塚古墳（62）や岡田２号墳（60）は径 30 m前後の円墳である。埴輪を樹立した小規模墳では森向山古墳群（15）、芝ヶ端古墳（103）、和賀向山１号墳（100）があり、和賀向山１号墳は竪穴系横口式石室の可能性が高く、養父市観音塚古墳とも時期的にほぼ同じである。小規模な若水Ｃ３号墳（91）や鏡が出土した梅田３号墳のような木棺直葬墳および筒江中山 26 号墳（33）の竪穴式石室墳もこの時期であり、山東盆地南東端の櫛名谷古墳群もこの時期を中心としているようであるが詳細は不明である。

山東盆地内の古墳以外の遺跡には、柿坪遺跡や粟鹿遺跡などのほかに、越田四辻遺跡（109）や越田塚脇遺跡（110）などがある。これらは柿坪遺跡の首長を支えた有力者の集落であった可能性があり、その奥津城が周辺に存在する古墳であったのかもしれない。

その後、６世紀中葉以降の築造と思われる和田山町加都王塚古墳（19）はやや規模が大きく、横穴式石室の可能性が高いが、山東盆地東端の方谷１～４号墳のような木棺直葬墳も築造されている。

そして、これ以降横穴式石室を埋葬施設とする古墳群が数多く築造されるようになる。しかし、山東盆地では南西部や南東部の地域に限られ、南西部では越田塚脇古墳（111）、三保尾荒地古墳（116）、三保東山古墳（117）、三保向山古墳群（121）や打田古墳（16）、打田２号墳（14）など少数が存在しているのみで、盆地内では前半期古墳に比べてその数が激減している。その一方で、盆地よりも西側の迫間の地に池ノ端古墳群（17）や迫間古墳群（18）において多数の横穴式石室墳が築造されていることから、南西側から山東盆地に入る街道が整備されたかにみえる。

また、加都遺跡の南東部において城ヤブ古墳群（25）が築造され、政治の中心が柿坪遺跡から加都遺跡に移ったかにみえるが、筒江古墳群（27）や長尾古墳群（28）の存在から、山東盆地に入る西からのルートも依然として存続していたようである。加都遺跡の北東には白鳳時代と考えられる法興寺跡（40）が存在し、加都遺跡の地名は「河津」につながる可能性があり、加都遺跡で古墳時代中期後半から後期の建物跡が集中する部分の字名が「宮ケ田（みやけだ）」であることや、その北側の市御堂の地名から「市」の存在を想定できることから、円山川東岸のこのあたりに河の津や市があり、ミヤケが置かれていた可能性（岸本 2012）があろう。それは、古墳時代中期後半から後期以降に栄えた可能性があり、古墳時代中期中葉に遡ることも十分考えられよう。なお、時期は異なるが、但馬道（21）やそこから東にのびる枝道の存在も、古代山陰道との関係も含めて交通の要衝として重要な意味をもっていたことであろう。

山東盆地内の東端部に近い北側丘陵部には大同寺古墳群など横穴式でも新しい時期の古墳群があり、山東盆地の北西端から和田山盆地へ抜ける狭隘部には江谷古墳群（80）や水谷古墳（79）などの横穴式石室墳が出現しており、古代山陰道の推定路沿いに所在する点で、官道との関連で興味深い。

一方、古墳時代中期末～後期初頭に岡田古墳群が存在した岡田盆地内では、全長59ｍの前方後円墳で内部主体が横穴式石室と推定される小丸山古墳（56）をはじめ、盆地入り口にあたる南西部の山裾に柳原１・２号墳（57･59）などが存在し、盆地奥部である東部に宮古墳群（70）や春の木田古墳群（71）、池の谷古墳群（77）などの横穴式石室を内部主体とする古墳群や古墳が数多く築造され、盆地内の勢力が依然として強かったことを示しており、東河寺遺跡（66）が古墳時代集落跡としての可能性があり、有力者の勢力範囲として注意すべき地域となっている。

周辺の奈良～平安時代遺跡

喜多垣遺跡の近隣に所在する遺跡のうち奈良～平安時代の集落跡では、山東盆地対岸の恋谷遺跡（115）で土壙・溝などが検出されており、越田宮ノ前遺跡（97）で井戸などが検出されている。盆地中央部に位置する柿坪遺跡（106）では奈良時代～中世の遺構も検出されている。山東盆地西側山間地の梅ヶ作遺跡（127）では建物跡、梶原遺跡（88）では奈良時代の柱穴が検出されている。和田山盆地の小支谷で茶すり山古墳の下に所在する筒江大垣遺跡（130）では飛鳥～平安時代の建物跡のほか、奈良～平安時代の墨書土器、緑釉・灰釉陶器、黒色土器に加え、篠窯の須恵器も出土している。また、平安時代末には建物跡や井戸・墓があり、遺跡は16世紀後半まで続いている。和田山盆地の加都遺跡（宮ヶ田地区）（36）では奈良～平安時代までの建物跡や土壙があり､桜地区（134）では建物跡や土壙のほか屋敷墓も発見されている。また、前述の但馬道（21）は奈良～平安時代に存続した。

奈良時代の墓では、五反田Ｂ遺跡（94）で石組みのものが検出されている。

和田山盆地に所在する法興寺跡（40）は奈良時代の寺院で、礎石等が残っており、飛鳥～白鳳時代と平安時代の遺構面が検出され、素弁八葉の蓮華文軒丸瓦が出土している。

奈良時代の散布地には、鞠散布地（138）があり、奈良～平安時代の三保遺跡（122）では墨書土器が検出されている。奈良時代～中世までの散布地には馬場散布地Ｂ（95）や上竹散布地（84）のほか、和賀散布地（89）がある。芝花散布地Ｂ（125）は平安時代～中世の須恵器・土師器・陶器が認められ、楽音寺散布地（129）も平安時代～中世の散布地であるが、瓦経が発見されている。

平安時代以降の集落跡では、森向山遺跡（15）で平安時代～中世の土器･白磁･青磁･鉄製品等が出土し、芝ヶ端遺跡（104）は平安時代末の墓と建物跡、中世（15世紀）の溝、谷部が検出されている。城ノ越遺跡（126）も平安時代～中世の集落跡で墓も検出されている。加都遺跡の桜地区（134）では平安時代～中世の建物跡や土壙、屋敷墓が調査されている。和田山盆地北側の宮ノ本遺跡（44）では、城ノ下地区で平安時代のピット、岡ノ段地区や細田地区でも平安時代の建物跡や柱穴が検出され、東河寺遺跡（66）では９世紀代の建物跡が発見されている。

城跡以外の中世遺跡には、散布地の馬場散布地Ａ（124）や北山遺跡（128）があり、加都遺跡の焼御堂･岡ノ森地区（135）では中世の建物跡や溝が検出されている。中世墓には長尾中世墓群（28）があり、土壙墓や区画溝、石組遺構が検出されている。室尾中世墓跡（136）では集石や五輪塔があり、室尾寺（137）との関係が推定されている。大林寺跡（132）は平安時代～中世の寺院跡で、僧坊跡が発見され、鰐口には嘉慶２（1388）年の銘がある。中世館跡には与布土氏館跡（123）や陳東氏館跡（139）があり、竹田城下町は（133）で、対岸には城下町関連遺跡の寺院跡（131）が存在している。

岸本一宏 2012「交通と伝達①湊・駅」『古墳時代の考古学』５　時代を支えた生産と技術　同成社

第２節　調査の経緯・経過

１．発掘調査

調査の経緯

兵庫県但馬県民局養父土木事務所による、道路改良事業－一般県道檜倉山東線－（県道檜倉山東線バイパス事業－発掘調査当時）のバイパス道路新設工事のうち、北端より朝来市山東町柊木集落北端西側までの部分については調査当時すでに完成していたが、柊木～喜多垣～与布土間は一部着工となっていた。また、文化財調査についても喜多垣集落西側の本遺跡は本発掘調査が未着手の状況であった。

朝来市山東町柊木～喜多垣集落の西側山塊には宮ノ谷古墳群をはじめ寺山古墳群など数多くの古墳群や今回調査した喜多垣遺跡が存在しており、平成22（2010）年度には宮ノ谷古墳群56～58号墳、平成15（2003）年度には宮ノ谷古墳群１・２・７・９・49～54号墳、その前年度には寺山古墳群17・18号墳について、県道檜倉山東線の道路改良事業にともなって、兵庫県立考古博物館が本発掘調査を実施した。

工事予定範囲のうち文化財調査が未着手であった部分のうち、喜多垣集落の西側丘陵崖下から集落部分にかけて存在する喜多垣遺跡のうち、今回の調査箇所にあたる部分については、平成23（2011）年５月と12月に県立考古博物館が確認調査を実施した。その結果、喜多垣集落西側の丘陵崖下と集落の間の平坦面において中世の柱穴等を確認し、中世の遺構面である黒褐色細砂層から13～15世紀前後の土器も出土した。

この結果をもとに養父土木事務所と協議した結果、道路工事により掘削をおこなう部分について、記録保存を前提とした本発掘調査を実施することとなった。なお、本発掘調査を実施した部分は、畑地および栗・柿などの果樹園となっていた部分の３筆分のほぼ全体に加えて、南西側の畑地の一部を含んでおり、調査面積は工事により掘削される丘陵山麓部の833㎡となった。

調査の方法

本発掘調査区は南北に細長い形状で、調査前の地形や調査区の形状および検出した遺構の時期等によって、北部・中央部・南部に大きく分けることができる。北部調査区は栗などの果樹が植えられていた最も高い部分、南部調査区は畑として耕作されていた部分で、中央部調査区は北部と南部の間で、調査前は最も低い部分である。その標高は、北部調査区で140.4m前後、南部調査区は139.8m前後、そして中央部調査区は138.7m前後であった。

調査の結果、遺構面は中央部調査区と南部調査区が標高138.0m～138.8mで南に高く緩い傾斜をもった同一平面で連続し、中央部調査区北端から北部調査区の中央部にかけて傾斜面となり、北部調査区北半のうち西半が最も高い平面で、北部調査区東半は東に下る急斜面となっている。本発掘調査を実施した面積は、833㎡である。

調査は、耕土および堆積土のうちの遺物包含層上面までバックホーにより掘削し、掘削土は調査区北側の道路用地内に集積した。中央部調査区と南部調査区の遺物包含層はその上面がそれぞれ平安時代と中世末～近世初頭の遺構面（上層遺構面）でもあることから、平安時代・中世末～近世初頭の遺構の検出および遺構掘削をおこなった後、遺物包含層を人力により掘削し、同時に包含層中に含まれていた遺物の回収に努めた。遺物包含層の下面は飛鳥～奈良時代の遺構面（下層遺構面）となっており、多数

の柱穴などを検出した。包含層掘削の後、人力により表面を精査して遺構検出を実施し、柱穴などの検出遺構の掘削を人力によりおこなった。また、北部調査区の北半西部では耕土・床土状の堆積土の直下が地山岩盤風化層にあたり、その面で近世と推定される柱穴等を多数検出した。

なお、人力による掘削土もベルトコンベアにより機械掘削土と同様の調査区北側に集積した。

検出・掘削した遺構については、調査区全体の平板実測および調査区壁面の土層断面実測をおこない、個別遺構の埋土土層断面図作成や、遺物出土状況および個別遺構の平面･断面の写真撮影をおこなった。広範囲の写真については足場を設置して撮影した。また、調査区全体については空中写真測量を株式会社オーシスマップに委託して実施した。

なお、調査の過程において遺構内に遺物が残存している段階で、発掘調査進行上の適期である、平成24（2012）年８月11日（土曜日）に地元住民を対象とした説明会を実施した結果、約60名の方々が見学に来られた。

地元説明会開催後には、遺構内の遺物の取り上げと、柱穴掘形の完掘をおこない、写真撮影および土層断面の実測図作成をおこなった後、調査を終了した。

２．出土品整理

出土品整理事業は平成25（2013）年度に実施した。

平成24（2012）年度以降、兵庫県立考古博物館の埋蔵文化財調査部門が公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部に移ったため、その機関で実施したが、実施場所は兵庫県立考古博物館であった。

作業内容・担当者は以下のとおりである。

なお、調査区北部の土壙から出土した炭化材について、放射性炭素年代測定（ＡＭＳ測定）を、パリノ・サーヴェイに委託して実施した。

平成25（2013）年度　　実施機関：公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター
埋蔵文化財調査部　整理保存課

作業内容：水洗、ネーミング、接合・補強、復元、金属器保存処理、分析鑑定、実測・拓本、
遺物写真撮影、写真整理、図面補正、トレース、レイアウト、報告書印刷

作業担当職員：長濱誠司・深江英憲（作業進行管理）、岡本一秀（金属器保存処理）
岸本一宏・長濱誠司（作業指示・編集・原稿執筆）、

作業担当非常勤嘱託員：荻野麻衣・藤池かづさ・吉村あけみ・上田沙耶香（接合・補強、復元）
池田悦子（実測・拓本、写真整理、図面補正、トレース、レイアウト）
古谷章子（デジタルデータ図の編集）
桂　昭子・梶原奈津子（金属器保存処理）

第２章　調査結果

第１節　調査区の概要

喜多垣遺跡の位置は山東盆地の南西部で、和田山盆地との境にある山塊の東端部分にあたり、比高差約20mの丘陵直下である。この付近の地形は丘陵直下から東部にかけて徐々に低くなってはいるが、やや小高い台地状を呈しており、現集落の範囲とほぼ合致する。特に現集落の南半分は、台地状の地形が東に大きく張り出している。喜多垣遺跡の範囲は明確にはなっていないが、現集落の南半分の南北約90m、東西約100mの平面長方形に近い、やや小高い部分にひろがっている可能性があろう。

今回、県道改良事業にともなって実施した喜多垣遺跡の本発掘調査区は、南北に細長い形状を示し、北端から南端までの総延長は84.0mである。調査区の幅は最大14.5mで、幅9.0 ～ 12.0mの部分が多く、調査面積は833㎡である。

調査前の調査区は、北部が最も高く、中央部が最も低くなって、南部はまた高くなっていたことから、垂直面の高低差による形状から、調査区を便宜上北部･中央部･南部の３地区に分けて呼称した。

北部調査区は西側の丘陵直下で、その西側斜面は、特に非常に急峻なものになっている。北部は西側の丘陵をかなり削平し、東方に盛土をおこなうことにより最大幅18mの平坦面を造成しており、南北長は最大41mで、北部調査区はこの平坦面の東端を除いた部分で、現況の標高は140.0m前後である。平坦面の東端と北端は高い石垣により護岸しており、石垣下の面はほぼ平坦な畑地になっており、平坦面東端と北端の石垣の高さは約３mであった。調査前のこの平坦面北部には栗を中心とした果樹が植えられており、南部には雑草が繁茂していた。この平坦面に至るには東側に南からの傾斜道があり、傾斜道の西側は石垣が存在し、北部平坦面の南半部は南側に若干傾斜していたが、平坦面南端も石垣が構築されていた。また、北部平坦面西端の最も山側に入った部分には、かつて貯水タンクが存在していたようである。なお、北部の南東端は家の敷地となっていて、かなりの削平がおこなわれていたことが想定されたため、調査区から除外した。

中央部調査区は調査区北部の南側の一段低くなった、現標高138.7m前後の平坦面である。今回の調査区内の調査前の現況では最も低い部分にあたり、雑草が生えていた。中央部調査区の西側調査区外は丘陵の傾斜面がやや緩くなっており、幅約16mの畑地が造成されていたが、調査区に近い部分には古びた小屋が建っていた。また、小屋の山側には長方形の小さな池が掘られており、そこから畑地の北東隅方向へ、畑地と斜面の境に浅い溝が掘られていた。畑地の北東隅の溝から流れてきた水は、そのまま斜面を伝って中央部調査区に流れ落ちて、北部調査区との境にある溝に流れ込むようになっていたが、調査時に畑地から流れ込む水量はわずかであった。

なお、中央部調査区では遺構面が上下２面あり、非常に多くの柱穴や土壙を検出した。

南部調査区は中央部調査区から続く同一平坦部の南端と、その西側の一段高くなった畑地の北東部分である。畑地の現況標高は139.8m前後で、東側との比高差は約1.1mで、畑地東端の法面には雑草が繁茂していた。また、南部調査区の北西隅部分にはさらに一段高い畑地も道路用地に含まれていたが、高低差の関係から崩落の恐れがあったため、調査範囲から除外した。なお、南部調査区の北東端と中央部調査区の南東端との境は明確にはしなかった。

南部調査区で検出した柱穴・土壙は数少なかったが、掘立柱建物跡の一部が確認できた。

第２節　検出遺構

本発掘調査の結果、各調査区のほぼ全域にわたって柱穴・土壙等を検出した。北部調査区では、北西部の最も高い平坦面およびその東側斜面下で検出したが、南側の斜面では遺構は検出されなかった。中央部調査区では遺構が集中しており、南部調査区では集中部分も認められたが、概して疎らであった。中央部および南部調査区で検出した遺構は上下２面で認められ、その時期は飛鳥～奈良時代と平安時代中頃～末のものが大半を占め、中世末～近世初頭の遺構も存在したがその数は少なかった。

北部調査区西半の平坦部で検出した遺構には多数の柱穴のほかに土壙や溝があり、柱穴からの出土遺物はほぼ皆無であったが、土壙・溝からは近世の陶磁器・瓦の破片が出土したことから、柱穴も含めて近世の時期と推定している。

北部調査区東半では急斜面に黒褐色の「クロボク」層が厚く堆積しており、その層から奈良時代～平安時代末頃の土器などが出土した。その層の下面には山側を深く掘り込んで平坦面を構築した段状遺構が存在しており、平坦面の山側は弧状の細い溝により区画し、平坦面には柱穴が存在した。この遺構の時期は不明であるが、平安時代末頃の可能性がある。

中央部調査区から南部調査区にかけては上下２面にわたって遺構面が認められたが、南部調査区で検出した柱穴は数が少なく、中央部調査区では非常に多くの柱穴を検出した。柱穴以外には土壙や溝状の遺構も検出したが、柱穴以外の遺構の数はきわめて少ない。また、近世以降の溜め井戸と思われる円形の土壙もいくつか存在した。中央部・南部両調査区で検出した遺構の大半が奈良時代～平安時代のもので、それに少量の中世末～近世初頭の柱穴や土壙といった遺構がある。

南部調査区の上下２面で検出した遺構のうち、上面では整地層上に平安時代の掘立柱建物跡のほかに少数の柱穴を検出したことから、この時期の遺構面と思われる。この掘立柱建物跡の柱穴からは緑釉陶器が出土した。一方、中央部調査区の上面で検出した遺構は中世末～近世初頭のものが大半である。また、南部調査区の下層遺構は飛鳥～奈良時代のものであるのに対し、中央部調査区では飛鳥時代～平安時代のものを同一面で検出した。検出した遺構は柱穴と土壙であるが、それらの埋土からは完形品や完形に近い須恵器が出土しているものがある。ただし、多くの柱穴が存在するにもかかわらず、建物跡として組み合うものを確認できたのは南部調査区の平安時代の１棟に限られ、中央部調査区の建物跡については多数の柱穴の存在から建物跡が存在していたことは間違いないものの、それらを抽出することはできなかった。なお、掘立柱建物跡から出土した緑釉陶器や、包含層から出土した須恵器稜埦や製塩土器、転用硯の可能性がある須恵器があり、一般の集落ではあまり使用しない遺物が出土している。

一方、中央部調査区の中世末～近世初頭の遺構は少量の柱穴と土壙に限られる。飛鳥～平安時代の遺構面より約30 ～ 60㎝上で検出したものが多く、「クロボク」の二次堆積層の上面でもある。柱穴内には陶器の破片が残っていたものや、古銭・黒色小礫が出土した土壙がある。本時代においても建物跡を抽出できなかったことから、今後の課題となっている。

なお、柱穴内から弥生時代末頃の土器も混入出土していることから、その時代にはすでにこの付近で人々が生活していたことがうかがえる。

１．北部調査区の土層と遺構

概　要（図版７・８、巻頭写真図版４・５、写真図版１・２・５）

北部調査区では大きく三つの地形に分けることができる。それらは、北西部の標高140.1 ～ 140.2mの最も高い部分と、その南側の斜面地、それから東部の斜面およびその下の平坦部である。

北西部の最も高い部分は、長さ約22m、幅約７ｍの平面長方形を呈し、上面は平坦でほぼ水平である。この部分は耕土および床土直下に花崗岩の風化層が認められ、特に西端付近では軟質花崗岩盤の上面のように固く締まっていた。柱穴や土壙はこの面で検出したが、いずれも近世以降の時期の遺構であり、奈良～平安時代や中世末～近世初頭にはこの部分にまで開発はおよんでいなかったようである。

一方、東側斜面部では、調査時に、確認調査において遺構が検出されたクロボク層上面まで機械により深く掘り込んだ結果、水平幅３～４ｍで、比高差２ｍ程度の斜面地形であることが判明した。調査前はこの部分と東側斜面部分が同一面で続いていたことから、少なくとも果樹の畑地に造成した際には、東端で２ｍ以上の盛土をおこなったことがわかる。この盛土層からは備前焼甕（113）や（88）の擂鉢といった中世～近世初頭の陶器が出土している。

クロボク層には遺物を含んでおり、中央部調査区や南部調査区のようにクロボク層の下面にも遺構が存在している可能性があったことから、２箇所に東西方向のトレンチを設定して掘削をおこなった。その結果、黒褐色系の土層の下に黄褐色系で水平に近い面が認められたことから、その面までクロボク層の掘削をおこなった。その結果、クロボク層下面の黄褐色系の層を面とした遺構群が検出された。その遺構群は、柱穴群を溝で区画したもので、建物跡の可能性が考えられたが、掘立柱建物跡として組み合う位置に柱穴が認められなかった。この遺構群の時期は、上面を覆っていたクロボク層に奈良～平安時代の遺物を含んでいたことから、少なくとも平安時代のなかにおさまるものと思われる。

層　序（図版９、巻頭写真図版６、写真図版４）

東斜面部に設定したトレンチの断面によるクロボク層以下の土層堆積状況は、南側トレンチでは黒褐色を呈するクロボク層が第１～第５層に分かれて堆積しており、その下層の第６層および第７層は明黄褐色の花崗岩風化土であった。第７層の下層はまた黒褐色の第８層で、その下の第９層は黄褐色系の層となっていた。さらにその下層の第10層はふたたび黒褐色、その下の第11層は黄褐色系の土層といったようにクロボク層と花崗岩風化土の繰り返し堆積であった。ところが、第12・13層はやや濁った黄褐色の土層が連続していた。第13層から下は壁などの崩落の危険があったことと、遺物が出土しなくなったことから、掘削を中止した。なお、斜面下の溝で囲まれた柱穴群は第９層の上面で検出したもので、第９層の上面まで面的に掘削した結果である。

北側トレンチでは、第１～第９層までが黒褐色や黒色を呈するクロボク層で、第10層は花崗岩風化土であった。以下、南側トレンチの状況と同じように、第16層までクロボクと花崗岩風化土の繰り返し堆積が認められた。

クロボク層から出土した遺物には土器類のほか、角釘（Ｆ１・Ｆ２）や刀子状鉄器（Ｆ４）があり、土器類では緑釉陶器（100）のほか、奈良時代の須恵器（94 ～ 99）や土師器（102）、平安時代の須恵器（101・104・112）や土師器（103・108）および、奈良～平安時代で時期分離が難しい土師器（105 ～ 107・109・110）など、数多く出土している。

土　壙

北部調査区では攪乱壙や小規模のものも含めて17基の土壙を検出したが、遺物が出土したのはＳＫ２・５・６の３基に限られる。

ＳＫ２　（図版７、写真図版１・２）

調査区中央北寄りの西端付近で検出した。平面形は隅丸方形に近く、南北1.25ｍ、東西1.10 ～ 1.20ｍの規模である。検出面からの深さは44㎝で、底面は丸みがあり、皿形に近い。

本土壙の南半部埋土から肥前系染付皿の破片（１）が出土した。本土壙の機能は不明であるが、出土遺物が示す、19世紀前半頃の遺構と判断している。

ＳＫ５　（図版７、写真図版１・２）

北部調査区中央部の西端で検出した南北に長い土壙である。土壙の西部は調査区外にひろがっていることから、全容は不明であるが、南北規模1.4ｍの長円形を呈するものと思われる。確認できた東西幅は最大45㎝である。検出面からの深さは７㎝と浅い。

本土壙の埋土上面から椀と思われる磁器片（５）と土師器炮烙の小片（３）が出土しており、どちらも近世以降のものであることから、本土壙の時期も同時期と考えている。あるいは、（２）の時期が示す19世紀前半に近いかもしれない。

ＳＫ６　（図版７、写真図版１・２）

本調査区中央部南寄りの西端で検出した。土壙としたが、平面形状および周囲の遺構の状況から、溝の可能性が高いと思われる。本遺構の西側は調査区外にひろがっていることから、全容を知ることができなかった。ただし、長さは南北約5.6ｍであることを確認した。本土壙の検出面からの深さは29㎝である。

本土壙の埋土から肥前系の磁器皿（４）が出土しており、土壙の時期も19世紀中頃の可能性が高いと判断している。

柱　穴　（図版７・８、巻頭写真図版５、写真図版１・２・５・７）

総数56基検出した柱穴のうち、出土遺物が図示できたＰ01とＰ74について述べる。

Ｐ01　調査区北東端付近に位置し、浅い落ち込みの内部で検出した。掘形平面は隅丸方形に近く、一辺43 ～ 45㎝である。柱痕平面は径20㎝の円形で、検出面から柱穴底までの深さは57㎝と深い。柱痕から近世頃と思われる土師器皿の小片（47）が出土している。

Ｐ74　（写真図版７－⑧）　調査区南東部斜面下の下層面で検出した、溝で囲まれた柱穴群の南部に位置する。柱痕は径22㎝の平面円形で、掘形平面は径38㎝の円形である。検出面から底までの深さは30㎝である。の掘形平面は径37㎝程度の円形に近い。柱穴底には礫を置いて礎石としていた。掘形埋土からは奈良時代と思われる土師器甕口縁部の小片（17）が出土している。

２．中央部調査区の土層と遺構

概　要（図版５、巻頭写真図版４・５、写真図版１・２）

中央部調査区は、北部調査区の南側斜面下の溝と、南部調査区北側の調査区幅が狭まった部分との間の平面長方形に近い調査部分で、掘削前の現況では更地となって雑草が生えていた。表土は厚さ10㎝程度と薄いものの、耕作土であったことから、畑地として利用されていたと思われる。また、調査の結果、掘り込みの便槽を検出したことから、かつて便所が中央部調査区南端に建っていたことが判明している。

掘削前の調査区上面は平坦であったが、東側に向かって若干傾斜しており、西端と東端での高低差は15～20㎝程度であった。ただし、北端と南端での高低差はほとんどなかった。この傾斜は下層遺構面でも認められ、西端と東端での比高差は最大30㎝弱であり、北端と南端では北端が約20㎝低くなっていた。なお、北西隅部分では礫が散乱しており、広範囲の攪乱が認められたが、掘削はしなかった。

本調査区では、遺構面が最も深い東端部で、表土から約50㎝下面と約70㎝下面で上下２層にわたって遺構面が認められた。上層遺構面はクロボク層（第10層）の上に、いわゆる「タタキ」面を形成してほぼ水平・平坦な面となっていた。下層遺構面は、やや砂質で、にぶい黄褐色の自然堆積層上面となっていたため、わずかに傾斜面となっていた。また、本調査区のような地形では通常、山際が高く山から離れると低くなるのであるが、上下の遺構面ともに東西での高低差は少なくなっていることから、下層遺構面が水平に近くなるように造成されていたものと判断できよう。したがって、上層遺構面と下層遺構面との約20㎝という高低差は、本調査区西端と東端では変化が非常に少ない。そして、下層遺構面はそのままの高さで南部調査区へと続いている。

ただし、上層遺構面と現況面ではやはり水平度が異なることから、東端部では表土下約50㎝、西部では耕作土直下に近い深さで遺構面が存在して、上層遺構面が同一面でつながるようになっていた。なお、東端部で確認できた、耕作土から遺構面までの堆積層は、畑地表面を水平にするために客土されたものが大半である。

上述のように、上層遺構面は西側が高く東側が低い地形となっていたが、西端で138.4ｍ、約12ｍ離れた東端では138.2ｍで、その高低差は約20㎝にすぎない。上層面で検出した遺構には柱穴・土壙などがある。柱穴はＰ28・35・37・59・63・70～74など合計17基検出し、中央部調査区の北西部と中央東部を除いた全体に疎らに存在していた。柱穴にはＰ59のように陶器片が埋土から出土したものや、埋土に焼土が認められたＰ71のほか、礫が入ったＰ74が認められたが、大半はＰ70（写真図版７－③）のように土器小片や細片が出土したにすぎない。これらの柱穴は検出面および出土遺物から、中世末～近世初頭のものと思われる。なお、番号を付した柱穴は、埋土から遺物が出土したものである。

上層遺構面で検出した土壙は、ＳＫ８・９など平面円形のものが大半で、南東部に偏って５基認められた。直径は1.4～1.7ｍで、1.0ｍ程度の小規模なものも認められた。これらは内壁を漆喰で固めているものが多く、肥溜めあるいは溜め井戸と思われ中世末～近世以降のものであろう。また、長方形のＳＫ７では多数の古銭と黒色小礫が埋土から出土している。なお、南東隅部分で検出した、礫が入った平面長方形の土壙は、近代以降の便槽である。

下層遺構面は標高137.9ｍ～138.2ｍで、その差は約30㎝であるが、138.1ｍの部分が多く、感覚的には水平な面に近い。下層面では多数の柱穴を検出し、小規模な土壙も少数認められた。検出した柱穴は103基で、中央から東部にかけて集中して検出され、西部や北部では疎らとなっている。多くの柱穴が

検出されたことから、掘立柱建物跡が存在していたことは確実であるが、建物として組み合うものは確認できなかった。それらのうちＰ05 ～ 27・29 ～ 34・36・38 ～ 44・54 ～ 58・60・61・75 ～ 79・81 ～ 84の53基といった約半数から遺物が出土した。しかし、出土した土器のうち大半は細片で、図示できたのはＰ07・10・12・14・18・21・25・26・33・34・36・39・43・54・55・57・60・81の18基から出土した土器に限られる。ただし、完形品や完形に近い須恵器・土師器が出土したＰ12・43・57・60があり、Ｐ60・81からの出土土器には製塩土器がある。

中央部調査区の下層面で検出した柱穴は、出土土器から、奈良～平安時代の遺構と判断している。

また、遺物包含層からは奈良時代～平安時代、中世末～近世の土器類が多数出土しているが、柱穴や包含層から弥生時代中～後期の土器が出土していることから、南調査区とあわせて、付近に弥生時代の遺跡が存在していたと思われる。

なお、中央部調査区と北部調査区の境にある現水路から、水車杵の錘である石製品が出土した。

層　序　（図版９、巻頭写真図版６）

中央部調査区は畑地のほぼ一筆分で、水平な面であったことから土層関係は調査区東壁で確認した。東西方向の土層観察用畔も残すべきであったが、機械掘削時に残せず、上層遺構面以下に東西方向の土層観察用畔を残したものの、調査区東壁と同様の堆積であったことから記録は残さなかった。

調査区東側壁での土層は、最上層が厚さ10㎝程度の畑の耕作土層（第１層）で、その下層（第２～第８層）は畑地にするためと、東に下がった畑地面を水平にするための嵩上げ土で、黒褐色系の色調を呈していた。この層は東端で40㎝程度の厚さがあり、奈良～平安時代の須恵器片（68）や土師器片（84）のほか、中世末～近世初頭の土師器・須恵器（87・89）と丹波焼の破片が出土している。

第２～８層の下面には、にぶい黄褐色で固く締まった砂質土（第９層）があり、クロボクの再堆積層（第10層）の上に、厚さ５㎝程度で水平に叩き締められた、いわゆる「タタキ」面となっていた。この面が上層遺構面である。

下層遺構面は、上層遺構面下層の第10層の下面であり、にぶい黄褐色でやや砂質の自然堆積層（第11層）上面である。第９・10層の厚さは20 ～ 25㎝である。下層遺構面は小さな起伏が多く認められ、あまり大がかりな面形成はおこなわれなかったようである。第９層からは平安時代の土師器（81・86）が出土し、第10層からは完形に近い奈良時代の須恵器（65）をはじめ、奈良～平安時代の須恵器（51・54・57 ～ 61・66・67・69・72・73）や土師器（76・80・82・83）の破片など多数が出土しており、この中には転用硯（51）や土師器の大形破片（76）も含まれる。なお、弥生土器片（50・77）も少量ながら出土しているが、第11層からは遺物は出土しなかった。

土　壙

中央部調査区では攪乱壙や小規模のものも含めて13基の土壙を検出したが、遺物が出土したのはＳＫ７に限られる。

ＳＫ07　（図版５、写真図版６）

中央南部で検出した。上層遺構面で検出していたが、調査の都合により下層遺構面まで掘削した後に再検出したものである。北西部は近世以降の掘り込みと重複し、本遺構が切られている。

本来の平面形はほぼ南北に主軸をもつ長方形を呈し、長さ2.4m、幅1.8mを測る。検出面からの深さ

は10cm程度であるが、本来は上層遺構面から掘り込まれているため、さらに20～30cmの深さがあったとみられる。断面形は逆台形を呈するが、底部は基盤層に礫が多く混じる部分は浅くなり凹凸がある。

埋土は褐灰色シルト質細砂～中砂の単層であり、部分的に炭が混じる。

出土遺物は土器、礫、銅銭がある。土器は土師器を中心に少量の青磁・白磁があるものの全て細片である。礫は95点、銅銭は28点出土した。いずれも埋土内からであり、土壙内ほぼ全ての部分から出土しているが、底部に接しているものはなかった。

柱　穴　（図版５、巻頭写真図版４・５・７、写真図版２・６・７）

総数120基検出した柱穴のうち、遺物が出土したＰ07・10・12・14・18・21・25・26・33・34・36・39・43・54・55・57・59・60・70・81の20基について述べる。なお、これらのうち、Ｐ59・70の２基は上層遺構面で検出したものである。

Ｐ07　北東部に位置し、直径37cm程度の平面円形に近い掘形を有する。柱痕は平面円形で、径18cmを測る。検出面から底までの深さは32cmである。柱痕埋土から９世紀後半代の篠窯産須恵器埦（20）と土師器埦（21）･甕（22）の破片が出土し、掘形埋土からは奈良時代の土師器甕片（23）が出土している。柱穴の時期は平安時代の前期頃と推定している。

Ｐ10　北東部に位置し、掘形は直径52cmとやや大きめの平面円形である。柱痕は径17cmの平面円形である。検出面から底までの深さは38cmで、柱痕埋土から平安時代後半の土師器埦の口縁部片（24）が出土している。

Ｐ12　（写真図版７－①）　調査区北東部の南寄りで検出した。掘形は径37～41cmで、円形に近い平面形である。柱痕も平面円形で、直径17cmである。検出面から掘形底までの深さは38cmである。柱痕から須恵器瓶の破片と土師器埦または坏の口縁部小片が出土し、掘形からは完形品に近い土師器坏（25）が出土しており、柱穴の時期も土器が示す平安時代後半期と判断している。

Ｐ14　調査区中央部東端付近で検出した、径24cmと小規模な平面円形の掘形を有する。柱痕も径９cmと小さな円形で、検出面から掘形底までの深さは21cmである。埋土から須恵器坏片（26）、掘形からは須恵器坏または埦の底部片（27）が出土しているが、柱穴の詳細な時期は不明である。

Ｐ18　調査区中央部の東に偏った位置に存在している。長径39cm、短径35cmのやや楕円形の掘形で、柱痕は径15cmの平面円形である。検出面から掘形底までの深さは35cmである。柱痕から奈良時代の須恵器坏Ｂの小片（７）が出土している。

Ｐ21　調査区中央部東端付近で検出した、長径30cm、短径26cmのやや楕円形の掘形である。柱痕は径13cmと小規模な円形である。検出面から底までの深さは13cmである。柱痕から小片の須恵器坏または埦の口縁部（28）と土師器埦の口縁部（29）が出土している。柱穴の時期を限定することは難しい。

Ｐ25　調査区中部南寄りの東部で検出した。南北40cm、東西36cmの平面三角形に近い掘形である。柱痕平面は径17cmの円形で、検出面から掘形底までの深さは28cmを測る。柱痕から土師器埦の口縁部（30）が出土している。土器は平安時代後半期と思われる。

Ｐ26　（巻頭写真図版７－①）　調査区中部南寄りの東部で検出した。柱痕は径17cmの平面円形であるが、掘形は平面方形に近く、一辺37cmを測る。検出面からの深さは30cmで、弥生時代後期末～古墳時代初頭の甕片（５）が柱痕埋土上部から出土している。混入品と思われる。

Ｐ33　（写真図版７－④）　調査区中央部南東寄りで検出した。掘形平面は東西64cm、南北48cmの楕円

形を呈し、柱痕は径25cmの平面円形である。検出面から掘形底までの深さは24cmと規模に比べて浅い。柱痕埋土上部から平安時代の須恵器埦の破片２点（32・33）と土師器埦の破片３点（31・34・35）および黒色土器埦の破片（36）といった多くの土器が出土したが、柱穴の時期は限定できない。

Ｐ34　調査区南東部の中央寄りに位置し、柱痕は径18cmの平面円形で、掘形は東西34cm、南北40cmの楕円形平面に近い。検出面からの深さは21cmで、柱痕から土師器埦の口縁部片（37）が出土した。

Ｐ36　調査区南東部で検出した。上層面で検出していたが、下層面の遺構である。柱痕は径14cmの平面円形で、径28cmの掘形も円形平面である。検出面からの深さは13cmで、柱痕埋土から土師器甕口縁部片（38）、掘形埋土から土師器埦または坏の底部片（39）が出土している。

Ｐ39　調査区中央部の南西寄りで検出した。長径60cm、短径48cmの楕円形平面の掘形であるが、柱痕は検出できなかった。検出面からの深さは27cmで、奈良時代の須恵器坏小片（８）が出土した。

Ｐ43　（巻頭写真図版７－②）　調査区南西隅で検出した。掘形平面は南北40cm、東西28cmの楕円形で、柱痕も長径18cm、短径16cmとやや楕円形を呈する。検出面から掘形底までの深さは20cmで、掘形底から約３cm上を下端として、奈良時代の土師器小型壺の完形品（９）が横倒し状態で出土した。

Ｐ54　（写真図版７－②）　調査区東端北寄りに位置し、約半分が調査区外に続いている。最大径48cmで、検出面からの深さは３cm程度であるが、柱痕と思われる部分から奈良時代の須恵器坏片（10）が出土した。

Ｐ55　（巻頭写真図版７－⑦）　調査区中央部東端で検出した。平面形は南北32cm、東西25cmの楕円で、検出面からの深さは19cmである。柱痕と思われる部分の上面から平安時代の須恵器埦片(40)が出土した。

Ｐ57　（巻頭写真図版７－③）　調査区中央部西寄りに位置している。検出面からの深さ38cmの掘形は、東西56cm、南北46cmの平面楕円形で、柱痕は径24cmの平面円形である。この柱痕のほぼ中央の底でほぼ完形の奈良時代須恵器坏（11）が成立状態で検出された。この土器が柱の底に入れられたか、柱の抜き取り後に入れられたかどうかは不明であるが、意識的に入れられたことは間違いなく、祭祀的意味があったものと思われる。遺構の時期と合致するものである。

Ｐ59　（巻頭写真図版７－⑧、写真図版７－⑦）　調査区のほぼ中央の上層面で検出した。掘形は東西64cm、南北38cmの楕円形で、検出面からの深さは60cmである。柱痕は径18cmの平面円形である。柱痕埋土上部から唐津焼皿片（45）、丹波焼壺片（46）が柱穴底の礎石の斜め下から出土した。

Ｐ60　（写真図版６－⑦・⑧）　調査区中央の北東部に位置する。土壙の可能性があるが、ここでは柱穴としておく。掘形は長径104cm、短径59cmの楕円形で、検出面からの深さは６cmである。柱痕は明確ではない。土器Ｃとした完形に近い奈良時代須恵器坏Ａ（12）が上部から出土しており、奈良時代の製塩土器片（14）や奈良時代の転用硯と思われる須恵器坏蓋片（13）が出土している。

Ｐ70　（写真図版７－③）　調査区南東部の上層面で検出した。柱痕は径16cmの平面円形で、検出面からの深さ25cmの掘形平面は径37cm程度の円形に近い。柱穴底には礫を置いて礎石としていた。

Ｐ81　調査区中央北西部に位置する。東西80cm、南北65cm前後の平面長方形に近い楕円形の掘形で、柱痕は径20cmの円形である。検出面からの深さは32cmで、掘形埋土から奈良時代の製塩土器（18）が出土している。

３．南部調査区の土層と遺構

概　要（図版３、巻頭写真図版４、写真図版３）

南部調査区では、耕作土も含めて0.8 ～ 1.1mの厚さの堆積層の下で、上下２層に分かれて遺構を検出した。上下遺構面ともに南部調査区中央北寄りに存在した、室町時代頃と思われる自然流路により分断され、北群と南群に分かれて分布していたが、同一遺構面である。

上層遺構面は下層遺構面より20 ～ 50cm程度高い。遺構面がほぼ水平であることから、下層遺構面上に、客土により整地して形成されたものと思われる。また、平面図を見ると、北群は帯状の高まりの上に存在しているように見えるが、南側の流路と北側の土石流によって南北両側が削り込まれたためであり、調査区南端での上層遺構面の標高は138.7m、北群での標高は138.8mで、高低差は若干である。

上層で検出した遺構には、南群で掘立柱建物跡や柱穴があり、北群では列状になった柱穴７基のほか、直径60cm程度の円形土壙２基がある。掘立柱建物跡出土土器から10世紀頃の遺構面と判断している。ただし、円形土壙については、流路上面から掘り込まれているため、室町時代以降と思われる。

下層遺構面は表土上面から1.1 ～ 1.6m下で、上層遺構面とは20 ～ 55cmの高低差がある。中央部に少し高まりがあるものの、ほぼ水平である。高まり部以外の遺構面の標高は138.4mで、ほぼ水平である。遺構には北群で検出した柱穴16基があり、列状のものも認められる。奈良時代頃と思われる。

なお、包含層からは飛鳥～奈良時代と平安時代（９～ 11世紀）、中世土器、弥生土器が出土した。

層　序（図版４、巻頭写真図版６、写真図版４）

南部調査区の大半は畑地の東端部で、残りは高低差１ｍ程度の法面部分である。

調査区西側壁での土層は、最上層が厚さ20cm前後の畑の耕作土層で、その下層（第２～第４層）は畑地を水平にするための嵩上げ土で、40 ～ 50cm程度の厚さがあり、近世瓦や焼土塊を含んでいた。調査区南端ではこの嵩上げ土が特に厚くなっている。また、南部調査区北部ではこの嵩上げ土を切り込む小規模な土石流が認められる。

畑地嵩上げ土の下層（第５層）は西側斜面上方からの自然流入と思われる堆積土で、第４～５層から10世紀頃の輪花須恵器埦（79）、第５層下面から15世紀頃の土師器皿片（85）が出土している。また、この層上面から切り込むかたちで、南部調査区北部では土石流、中央北寄りでは自然流路が認められた。この流路は幅約7.5mで、深さ約１ｍのところまで掘削したが、遺物が出土しないため、途中で掘削を放棄した。流路の埋土は灰色ぎみの軟質層で、砂層や50cm程度の亜角礫も多く含んでいた。

第５層下面の第６層は、黄褐色を呈する厚さ10cm程度の薄く締まった土層で、第７層の黒褐色土も含めて整地層と思われ、第６層は化粧土の可能性がある。第６層上面が上層遺構面で、掘立柱建物跡を検出していることや、第７層から飛鳥～奈良時代の須恵器（52・53・56・62・64）や転用硯（63）が出土していることから、10世紀頃に整地が行われた可能性がある。なお、柱穴埋土の色調は暗褐色～黒褐色である。なお、第７層下の第８層は、下層遺構面上に堆積した自然流入層と判断しており、奈良時代の須恵器（55・70）や土師器（74・75）、弥生土器（48・49）、刀子（Ｆ３）が出土している。

第９層は灰黄褐色を呈する。暗褐色の第10層も含めて下層遺構面である。流路の南側では若干、北側では多くの柱穴を検出した。奈良時代頃の遺構面と推定している。

掘立柱建物跡　（図版３　巻頭写真図版６・７－④～⑥、写真図版３・７－⑤・⑥）

検出状況　南部調査区の南端付近の上層面で検出した。掘立柱建物跡の東端部である可能性が高く、建物跡の西部は調査区外にのびている。

形状・規模　南北方向で３基の柱穴、東西方向では２基の柱穴を検出したことから、南北２間以上、東西１間以上の建物跡である。南北方向の柱穴のうち、北東端のものはＰ48、その南はＰ47であるが、検出部分の南端のものはＰ46とＰ45の２基がある。仮にＰ46とした場合、Ｐ62とＰ48を結ぶ建物の北側東西ラインと建物の東側南北ラインとの内角は鈍角となるうえに、Ｐ48とＰ47との柱間は1.84ｍであるのに対し、Ｐ46とＰ47との柱間は1.26ｍと0.58ｍもの差が生じることになる。ただし、柱穴の規模は径40㎝前後、検出面からの深さ40㎝弱、柱痕径20㎝前後でほぼ揃うことになる。一方、Ｐ45とした場合には、Ｐ45の柱穴規模が径24㎝、柱痕径15㎝と小さく、深さも19㎝と浅いが、建物北側ラインと東側ラインの内角は直角に近くなり、Ｐ47との柱間も1.85ｍでほぼ揃うこととなる。ここでは、Ｐ45を建物の主柱穴としておきたい。なお、Ｐ45の南側に仮に柱穴が存在したとすれば、距離的には調査区西側壁下の側溝部分にあたるが、そこでは柱穴は検出できなかったことから、建物の南北規模は２間で、4.74ｍであった可能性が高い。

一方、建物の東西はＰ48とＰ62との柱間が1.82ｍで、南北柱間との差はほとんど無い。地形的に考えて、建物の棟方向は南北であった可能性が高く、その方向はＮ13°Ｅである。なお、検出した東西規模は3.1ｍ以上となる。

出土遺物　北西のＰ62の柱穴からは須恵器埦の下半（41）、掘形からは土師器埦のほぼ完形品（43）と別個体の口縁部片（42）および黒色土器片（44）が出土している。東側のＰ47では掘形から篠窯産と思われる緑釉陶器皿（19）が出土し、付近からは輪花状の口縁部を有する須恵器埦（79）が包含層から出土している。なお、Ｐ47の南東部に存在したピットらしきものをＰ67と呼称して掘削した際、柱痕から須恵器口縁部片（15）が出土したが、完掘の結果、遺構でないと判断した。ただし、遺物は遺構出土遺物のなかで報告している。

出土土器から、この建物の時期は10世紀頃と推定している。

柱　穴　（図版３、巻頭写真図版４、写真図版３）

南部調査区で検出した柱穴は、南半部の掘立柱建物跡およびその周辺で検出した南群と、土石流を挟んだ北部で上下２層に分かれて検出した北群があり、北群は東西方向に列状に認められた。

北群で検出した柱穴のうち、上層検出のものはＰ49～Ｐ53およびＰ53西側の２基で、Ｐ52から出土した遺物を図示した。下層検出の柱穴はＰ72およびその周辺の柱穴とＰ68、北群北部のＰ69およびその周辺で検出した。下層柱穴のうち、Ｐ69から出土した遺物を図示している。

なお、番号を付した柱穴から土器片が出土しているが、出土遺物を図示した柱穴について述べる。

Ｐ52　北群中央部に位置し、上層で検出した。平面形は東側に張り出した三角形に近く、掘形は南北69㎝、東西57㎝の規模である。柱痕は径22㎝の円形で、検出面から掘形底までの深さは41㎝である。柱痕埋土から弥生土器底部片（６）が出土したが、柱穴の時期を示すものではない。

Ｐ69　北群北部の下層で検出し、土壙と一部重複する。掘形は長径37㎝、短径30㎝で平面形はやや南北に長い卵形である。柱痕は径17㎝の円形で、検出面から掘形底までは20㎝の深さである。掘形埋土から奈良時代と思われる須恵器坏蓋片（16）が出土しており、奈良時代以降の時期が与えられる。

第３節　出土遺物

今回の調査によって出土した遺物には須恵器・土師器が最も多く、弥生土器・製塩土器・緑釉陶器・国産陶器・鉄製品・古銭などがあり、時期的に飛鳥～平安時代と中世末～近世初頭および近世末～近代の３時期に大別できる。

飛鳥・奈良～平安時代の遺物

飛鳥～平安時代の遺物は、南部調査区と中央部調査区のほぼ全域で、遺構内および下層遺構面より上層の包含層から出土し、一部北部調査区の東斜面からも出土している。

須恵器と土師器が大半を占め、平安時代の篠窯産の緑釉皿や篠窯産須恵器埦などが柱穴や各地区の包含層から出土している。また、柱穴２基からそれぞれ奈良時代の製塩土器片（14・18)、包含層と柱穴Ｐ60から稜埦（62）や転用硯（13・63）が出土している。また、奈良時代土師器の完形品（９）がＰ43、須恵器坏の完形品（11）がＰ57、完形に近い須恵器坏が柱穴上面あるいは包含層から出土しており（12・65)、甕または堝の大型破片（76）も出土している。

金属器では中央部調査区のＰ15とＰ74の掘形から角釘が出土しており、南部調査区下層包含層と北部調査区クロボク層から刀子状の製品が出土している。

中世末～近世初頭の遺物

概ね15世紀～ 17世紀を中世末～近世初頭ととらえている。当該時期に所属すると判断される遺構には南部調査区と中央部調査区の柱穴群と土壙がある。

中世末～近世初頭の遺物の出土場所は飛鳥～平安時代とほぼ同じであるが、包含層は上層遺構面よりも上層からの出土に限られる。

遺物には上層遺構面より上層で備前焼、瓦質の須恵器鉢または堝のほか、擂鉢・土師器皿・丹波焼・甕（攪乱）が出土している。また、柱穴からも唐津焼や丹波焼がＰ59から出土している。土壙（ＳＫ７）からは北宋銭を中心とした多数の古銭と黒色の小礫が数多く出土している。

近世末～近代の遺物

近世末～近代の遺物の出土場所は北部調査区に限られ、主として土壙や柱穴といった遺構から出土している。

肥前系染付皿や瀬戸・肥前系の磁器や炮烙片が土壙より出土し、土師器小皿が柱穴（Ｐ01）から出土している。

その他の遺物

少量の弥生中期・後期土器が南部調査区と中央部調査区の柱穴や包含層から出土している。また、北部調査区と中央部調査区間の現代溝から水車杵の錘（Ｓ１）が出土している。

１．遺構出土遺物（図版６・10・11、巻頭写真図版８、写真図版９～12・17・18）

土壙出土遺物

ＳＫ２

本土壙の遺物は、南半埋土から出土した肥前系陶胎染付皿片１点（１）である。口径は13.8cmで、底部を欠失する小片である。全面に釉がかけられ、内面には呉須で草花文を描く。胎土は2.5Y6/1黄灰色を呈する。19世紀前半頃と思われる。

ＳＫ５

本土壙の上面からは碗と思われる磁器（２）と土師器炮烙（３）が出土している。

（２）は口径11.3cmで、底部を欠失するが、割れ口には焼き継ぎの痕跡が認められる。外面には呉須で芙蓉手文を描いている。瀬戸の製品で、19世紀前半と思われる。

（３）の炮烙は小片で、口径29.0cmを測る。口縁部は内傾し、体部最大径は31.9cmとなる。外面全面に煤が付着している。硬質で胎土にクサリ礫を含む。器高が浅くなるもので、江戸時代以降と思われる。

ＳＫ６

（４）の磁器皿が本土壙埋土から出土している。口径10.0cm、器高2.4cmで、畳付き以外の前面に釉を施し、内面にベロ藍の呉須で山水楼閣文を描いている。外面には唐草のような文様を描いている。内面には目跡が４箇所認められる。肥前系で19世紀の中頃（幕末～明治時代）と思われる。

ＳＫ７

土器（114 ～ 116）

３点を図化した。114・115は土師器皿である。115は口縁端部が水平に屈曲し「て」字状を呈する。116は瓦質香炉である。体部は直立し端部は外傾する面をもつ。外面に菊花文を押印する。

礫（Ｓ１）

１点のみ図化し、出土した全てを写真で掲載した。円形または楕円形を呈する扁平な円礫で径は1.2cm～ 2.5cmを測る。色調は緑灰～暗緑灰色を呈する。形状から碁石とみられる。

銅銭（Ｃ２～ 23）

28点出土した。判読不明が６点ある他はすべて中国銭である。銭文が判読できたものは、唐銭と明銭が各１種の他は全て北宋銭である。

柱穴等出土遺物

柱穴および柱穴状遺構（ピット）から出土した遺物について、遺構別に以下に述べる。

Ｐ01（北部調査区）

土師器皿の小片（47）が柱痕から出土している。口径は推定で12.6cm、器高は2.0cmとやや大きめの皿である。外面には強いヨコナデを施し、下部の調整境は稜線状となる。口縁端部にのみ煤が付着していることから、燈明皿として使用されていたと推定できる。近世頃の所産と考えられる。

Ｐ07（中央部部調査区）

Ｐ07では柱痕から（20）の須恵器、（21・22）の土師器が出土し、掘形からは（23）が出土している。

第２表　ＳＫ７出土古銭一覧表

報告番号	銭貨名	銭文				初鋳年	備　　考	処理番号
		上	右	下	左			
C 2	永楽通寶	永	通	楽	寶	1408 年		20
C 3		永	通	楽	寶			5
C 4		永	通	楽	寶			7
C 5		永	通	楽	寶			16
C 6		永	通	楽	寶			17
C 7		永	通	楽	寶			26
C 8		永	通	楽	寶			27
C 9	淳化元寶カ	淳			寶	990 年	行書か	10
C 10	至道元寶カ	至	道		寶	995 年	行書	15
C 11	祥符通寶カ 祥符元寶カ	祥	符		寶	1009 年	真書	4
C 12	皇宋通寶カ			宋	寶	1038 年	同一個体か	11
C 13		皇						13
C 14	元豊通寶	元	豊	通	寶	1078 年	行書	28
C 15		元	豊	通	寶		篆書	19
C 16	元祐通寶	元	祐	通	寶	1086 年	行書	22
C 17		元	祐	通	寶		行書	12
C 18	聖宋元寶カ	聖	宋	元	寶	1101 年	篆書	9
C 19	元符通寶カ	元		通	寶	1098 年	篆書	6
C 20	政和通寶	政	通	和	寶	1111 年	分楷	8
C 21		政	通	和	寶		分楷	2
C 22		政	通				分楷	21
C 23	開元通寶	開	通	元	寶	621 年		18
	不明							1
	不明							3
	不明							14
	不明							23
	不明							24
	不明							25

（20）は須恵器埦の破片で、口径は12.7㎝を測る。底部は欠失するが、口縁端部をわずかに外反させ、体部が丸みをもつことから、京都府亀岡市の篠窯跡群の製品と思われ、西長尾３号窯の製品の可能性がある。平安時代の９世紀後半の年代が与えられている（石井清司2001）。N4/ 灰色を呈し、焼成良好である。外面口縁端部付近には重ね焼きの痕跡が認められる。

（22）は土師器甕の口縁部片で、端部には面をもつ。直立に近い体部となる見込みで、奈良時代～平安時代前半のものであろう。胎土には金雲母を若干含む。

（21）は土師器埦の底部小片で、回転糸切りの高台径は6.8㎝である。平安時代後半期と思われる。

掘形から出土した土師器甕の口縁部片（23）は、推定口径19.9㎝で、外面全面に煤が付着している。口縁端部はやや内傾する面をもつが、歪みが認められる。奈良時代のものと判断している。

Ｐ10（中央部調査区）

柱痕から出土した（24）は、土師器埦の口縁部小片で、推定口径は12.2㎝である。平安時代後半と思われる。重ね焼きの痕跡があり、須恵器と同様の形態を示すことから、いわゆる「須恵器の生焼け」かもしれない。

Ｐ12（中央部調査区）

掘形から土師器坏、柱痕からは土師器埦または坏の小片が出土している。

（25）の坏は、完形品に近く遺存し、器高4.0㎝、口径12.1㎝である。径6.5㎝の糸切りの平底から外上方に直線的にのびる形態で、外面にはロクロ目が顕著に認められる。平安時代後半期の所産と推定している。

Ｐ14（中央部調査区）

（26）は推定口径13.8㎝で、口縁端部内側を小さな玉縁状につくっている。奈良時代の坏の可能性がある。

掘形から出土した（27）は、坏または埦と思われる底部付近の小片で、底径7.3㎝を測る。底部外面は静止糸切りのようである。その他部分の調整はヨコナデである。平安時代後半期から中世と思われるが、時期の限定が難しい。胎土に含まれる砂粒の量は少ない。

Ｐ18（中央部調査区）

（７）は柱痕から出土した須恵器坏Ｂの小片で、口縁部を欠失する。高台径は9.7㎝で、体部外周のやや内側に貼り付けている。胎土は緻密で堅緻であるが、断面は（10YR6.5/4にぶい黄橙色）を呈している。奈良時代の前半期と思われる。

Ｐ21（中央部調査区）

柱痕から土師器埦口縁部と須恵器の坏または埦と思われる口縁部片が出土している。どちらも小片である。

（28）は推定口径12.7㎝で、口縁端部は短く外反させている。その特徴から京都府篠窯の製品と思われ、10世紀前半とされている黒岩１号窯出土土器に似ている。

（29）は推定口径14.8㎝で、内外面にはロクロ目が残る。平安時代後半期以降と思われる。

Ｐ25（中央部調査区）

土師器埦の口縁部片が柱痕から出土している。（30）は推定口径14.0㎝で、表面は灰色に近く、2.5Y6/1黄灰色を呈している。平安時代後半期の所産と判断している。

Ｐ26（中央部調査区）

弥生後期末～古墳時代初頭と思われる甕（５）が掘形から出土している。比較的大きめの破片で、口径17.9㎝、口縁端部は外上方にひきのばしたようになっている。頸部外面と体部外面の境界には稜線状の段差があり、それ以下はタテハケ調整を残している。内面は頸部付近をヨコナデ後、体部は右斜め上方向のヘラケズリを施す。庄内式併行期の弥生時代後期末～古墳時代初頭の所産と判断している。

Ｐ33（中央部調査区）

柱痕から数多くの土器が出土している。図示したのは須恵器埦２点、土師器埦３点、黒色土器２点である。

須恵器埦（33）は口径14.8㎝で、口縁端部を小さな玉縁状につくっており、体部は丸みがあることから、篠窯跡群の小柳４号窯の製品に似ている。平安時代の10世紀前半の実年代が与えられている。

もう１点の須恵器埦（32）の体部は（33）に較べて直線的で、口縁端部は短く外反させている。外面にはロクロ目が認められ、口径は19.3㎝を測る。篠窯跡群の前山３号窯か小柳４号窯の製品の可能性があり、平安時代の10世紀前後の時期が与えられている。内表面は平滑になっており、使用痕跡と思われる。外表面にはミガキを加えているようである。

土師器埦は（31・34・35）の３点であるが、（31・35）は底部糸切りの平高台のもので、（35）は高台部分のみの破片である。（31）は高台径8.2㎝、器高5.3㎝、口径14.9㎝で、全体の1/5ほどの破片である。

器表が磨滅しているが、体部内外面はヨコナデ調整で、胎土にはクサリ礫を含み、7.5YR8/3浅黄橙色を呈している。高台部側面などには5YR6/6の橙色を呈する部分があり、全体にスリップをかけていた可能性がある。平安時代後期の11世紀頃のものと思われる。底部外面には、回転糸切り後の乾燥時と思われる板状圧痕が付着している。(34)の高台径は7.0cmで、(31)や(35)の7.8cmよりもかなり小ぶりである。

黒色土器（36）は２点の破片を図上復元したもので、口縁部と底部付近の２点の破片である。内面は全体がN2/1黒色を呈しているが、外面は口縁部のみ同色で、外面のその他の部分は5YR6/6橙色を呈する、いわゆる「内黒」のものである。口径14.7cm、器高4.7cm、断面三角形の輪高台の径は7.8cmと思われる。口縁端部は内面側を窪ませている。体部内面には横方向の暗文を密に施し、見込部分にはジグザグ状に密に施しているようである。また、体部外表面にはケズリを加えている。平安時代後期頃のものと思われる。

Ｐ34（中央部調査区）

柱痕から(37)の土師器埦の口縁部片が出土している。口径は14.0cmで、砂粒を比較的多く含んでいる。

Ｐ36（中央部調査区）

柱痕からは（38)、掘形からは（39）の土師器が出土している。

(38）は外反する甕口縁部片で、口径23.6cmと思われる。平安時代頃の可能性がある。

(39）は埦もしくは坏と思われる底部片で、径7.1cmの平底はヘラ切りのようである。

Ｐ39（中央部調査区）

（８）は柱痕から出土した須恵器坏の小片である。口径は12.3cmを測り、底部は欠失する。奈良時代前半期のものと思われ、坏Ｂと想定している。

Ｐ43（中央部調査区）

（９）は、柱痕に入っていた土師器小型壺の完形品である。形態的には須恵器の短頸壺に似ている。須恵器で輪高台を有する同形のものが平城宮などで出土しているが、土師器で無高台のものは珍しい。底部外面はヘラ切り後、その痕跡をほとんどナデ消している。径約8.8cmの平底から外上方に短く内弯する体部となり、口縁部は外上方に短く外反させている。口縁端部は丸くおさめる。口径10.0cm、器高4.2cm、体部最大径10.8cmを測る。奈良時代前半期の所産と推定している。柱痕内に意識的に収めた土器である可能性が高い。

Ｐ47（南部調査区　掘立柱建物跡）

(19）は掘形から出土した緑釉陶器皿で、須恵質であることと地域的な点から篠窯の製品と推定しているが、同形態のものは確認できなかった。口径11.5cm、器高2.3cmで、底部は回転糸切り後に径6.4cmの輪高台を貼り付けている。体部は外上方に大きく開いた後、外反して横外方に短くのびる口縁部となる。体部内面の底部との境付近には１条の沈線をめぐらす。

釉はほぼ全面に施しているが、高台底部より内側は淡いものとなっている。また、口縁端部付近は釉が禿げており、底部内面の釉表面の光沢が失われている部分が認められるのと同様に、使用によるものと判断できる。なお、内面底部には目跡が３箇所認められる。篠窯の編年では西長尾３号窯の時期と推定しており、平安時代初期の９世紀後半に比定できよう。

Ｐ52（南部調査区）

柱痕から出土した（６）は、弥生時代中期末～後期の底部破片で、器種は壺と思われる。径7.0cmの平底から外上方にのびる体部をもつ。体部外面は縦方向のヘラミガキを施す。

P54（中央部調査区）

柱痕部分の上面から出土した須恵器坏Ａ（10）は、口縁部を欠失する破片で、底径は9.9cmとなる。底部外面はヘラ切り不調整で、奈良時代のものと思われる。

P55（中央部調査区）

（40）は柱痕から出土した須恵器埦で、半分弱の破片である。高さ約５㎜の平高台から丸みをもちながら外上方にのびる体部で、口縁部は少し外反させる。体部内外面にはロクロ目を顕著に残す。側面調整を施した回転糸切りの底部径は6.3cm、口径15.0cm、器高6.7cmで、見込部分に段を残し、深みのある体部となっている。砂粒を多く含むが焼成は良好である。篠・前山３号窯の時期と推定され、９世紀末頃の年代が与えられている。

P57（中央部調査区）

柱痕の最下部から出土した（11）は須恵器坏Ｇまたは坏Ａで、口径13.6cm、器高4.5cmの径高指数33のほぼ完形品である。体部と底部の境は丸みがあり、底部外面は回転ヘラ切りで不調整である。全体に器壁が厚く底部内面には粘土紐の凹凸が目立つ。焼成は良好である。奈良時代前半の平城宮Ⅰ～Ⅱ期のものであろう。なお、この土器が意識的に入れられたものであることは、その出土状況からみて確実であろう。

P59（中央部調査区）

柱痕上部から（45）が出土し、（46）が柱穴底の礎石と思われる礫の斜め下から出土した。

（45）は唐津焼施釉陶器皿の約1/3の破片で、内面全体と外面の約半分に緑がかった白色の灰釉を施す。底部はごく僅かに遺存しているのみであるが、輪高台と思われる。口径は11.0cm、器高3.0cmで、胎土は5YR5/4にぶい赤褐色を呈している。江戸時代初期（17世紀前半）のものと思われる。

（46）は陶器壺で、いわゆる「備丹もの」と呼ばれる丹波焼である。口縁端部は玉縁状に外方に膨らませ、内外面全体は5YR3/3暗赤褐色、外面肩部は2.5YR4/3にぶい赤褐色を呈している。底部を欠失するが、残存高は17.4cm、体部最大径18.8cm、口径10.8cmとなる。焼成は良好で非常に堅緻である。体部の内外面にはロクロ目が目立っている。（45）と同様の17世紀前半のものであろう。

P60（中央部調査区　土器Ｃ）

掘形部分の上面から出土した（12）は、調査時に土器Ｃと呼称したものである。須恵器坏Ａの完形に近い破片で、口径12.9cm、器高3.8cmを測る。底部は回転ヘラ切り後回転ナデを加えている。体部は小さな屈曲部分があり、窪んだようになっている。体部外面下端の表面と底部内表面が平滑になっており、使用痕と思われる。径高指数29で、奈良時代前半の平城宮Ⅱ～Ⅲの時期と判断できよう。なお、内外面には火襷が認められる。

（14）も掘形出土である。砲弾形製塩土器の口縁部付近の小片で、器厚は最大で1.55cmと厚い。口径は不明で、残存高は5.2cmである。胎土には砂粒を多く含む。奈良時代の所産であろう。

柱痕から出土した（13）は須恵器坏蓋の破片で、口径は15.9cm、残存高は1.7cmである。内面の中央に近い部分が平滑になっており、天地逆にして他の用途に転用されていた可能性がある。平城宮Ⅱの時期と思われる。

P62（南部調査区　掘立柱建物跡）

本柱穴からは１点の須恵器と２点の土師器および黒色土器が１点出土している。

柱痕から出土した（41）は須恵器の埦で、体部上半を欠失している。回転糸切りで、径7.0cm、高さ0.7

cmの平高台は側面調整が行われている。底部内面には平滑になっている部分があり、使用痕と判断できる。篠窯の製品の可能性が高いが、口縁部を欠失しているため、詳細時期は不明である。

掘形出土土師器のうち、(43) の埦は比較的下層から出土したもので、ほぼ完形品である。径6.6cm、高さ0.85cmで回転糸切りの平高台から、直線的に外上方にのびる体部となり、口縁端部は若干外反させている。体部内外面にはロクロ目が目立つ。口径12.7cm、器高4.6cmで、胎土には砂粒を多く含む。平安時代の10世紀前後のものと思われる。

(42)は土師器埦の口縁部であるが、(43)とは別個体の器壁が薄い小片である。口径は14.2cmと思われ、比較的硬質の焼成となっている。P10出土の (24) 同様、須恵器の形態に近いものである。平安時代と思われる。

黒色土器の (44) も掘形から出土したもので、口縁部から体部にかけての破片である。器壁は比較的厚い。内面全体と外面口縁部付近のみ黒色を呈する、いわゆる「内黒」のもので、口縁部は少し外反させて内面に沈線状の凹部を有している。体部外面は粗くヘラミガキを施すが、内面はイタナデのようであり、工具の当たり痕跡が遺存している。平安時代の10 ～ 11世紀頃のものであろう。口径は14.8cmを測る。

P67（南部調査区）

(15) は須恵器の盤あるいはⅢのような器形と思われる口縁部片である。柱痕から出土したもので、大きく外反する口縁部の径は13.6cmと推定している。奈良時代の所産と判断している。

P69（南部調査区）

掘形から出土した須恵器坏蓋の (16) は小片である。口径15.2cm、残存高2.6cmで、天井部の器壁は厚い。平城宮Ⅰ～Ⅲの奈良時代前半期と想定している。

P74（北部調査区）

(17) は掘形から出土した土師器甕の口縁部小片で、体部から大きく外反して、口縁端部にほぼ垂直な面をもつものである。体部内面は横方向のヘラケズリで、口縁部との境は鋭い稜となっている。体部外面はハケ調整である。奈良時代頃のものであろう。口径は24.4cmである。

P81（中央部調査区）

掘形出土の (18) は砲弾形製塩土器の破片で、かろうじて端部が遺存している。器表の凹凸が多く、胎土には大きめの砂粒を非常に多く含んでいる。奈良時代頃のものと推定している。

石井清司2001「篠窯の実年代」『京都府埋蔵文化財論集 第４集－創立20周年記念誌－』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター。以下、篠窯製品の実年代についてはこの文献による。

２．包含層出土遺物（巻頭写真図版４）

①　南部調査区出土土器（図版11、写真図版11 ～ 13）

南部調査区　第４・５層出土土器

（79）は須恵器埦の破片である。口縁端部には外側から押さえることによって窪みを設けており、全体には輪花状になるものと思われる。体部は深く丸みがあるタイプで、底部は欠失するが、突出する平高台になるものと思われる。口径は17.7㎝、残存高は5.6㎝で、平安時代の10世紀前後とされている、前山２・３号窯か小柳４号窯の製品と判断している。胎土はやや精良である。

南部調査区　第５層下面出土土器

（85）は土師器の皿片で、口径14.3㎝と大きなものである。精良な胎土が使用されており、焼成もほぼ良好で、内面の仕上げも丁寧である。所属時期については不明な部分が多い。15世紀頃の中世の可能性が高い。

南部調査区　第７層出土土器

（52）は須恵器蓋または皿の破片である。口径は21.8㎝になるものと思われる。口縁部は下外方にのびた後丸くおさめ、屈曲しない。奈良時代末頃の時期と思われる。

（53・56）は須恵器坏蓋の破片である。

（56）は胎土に砂粒を非常に多く含み、焼成もややあまい。口縁端部は下方に垂下するもので、口径は14.8㎝。宝珠つまみが貼り付けられていた痕跡が残る。天井部外面のヘラケズリは粗く、内面の仕上げナデも雑である。平城宮Ⅱ頃の時期と思われる。

（53）の胎土は精良で、焼成も良好である。口縁端部は下方に若干ひきのばしている。口径は14.2㎝と思われる。平城宮Ⅲの時期であろう。

（62）は須恵器稜埦の破片である。輪高台の径は10.7㎝で、口縁部を欠失し、残存高は4.8㎝である。飛鳥Ⅱ頃の可能性がある。胎土は砂粒少なく緻密で焼成も良好である。

（63）は須恵器坏Ｂである。口径13.7㎝、器高3.9㎝、高台径9.9㎝で、径高指数は28であることから、平城宮Ⅲ頃の時期と思われる。全体に焼成があまく、暗灰色を呈し、胎土には砂粒を多く含んでいる。内面底部が平滑になっており、使用痕と思われ、外面高台内も平滑になっていることから、口縁部の折損後に転用して使用されていた可能性が高い。

（64）は須恵器坏Ｂの破片である。口径13.4㎝、器高3.6㎝で、高台径は10.2㎝である。体部は底部からにぶい稜をもって短く立ち上がる。断面はセピア色を呈するが、焼成は良好で、胎土も比較的精良である。径高指数が27であることから、奈良時代前半の平城宮Ⅱ頃の時期と思われる。

（78）は弥生土器甕の口縁部片である。口縁端部を上方にひきのばしていることから、南但馬地域弥生時代後期後葉の第７期（岸本2009）である可能性が高いが、全体に器壁が厚くやや疑問が残るものの、体部内面にヘラケズリが認められることは、その時代の土器の特徴を表している。口径は19.7㎝であろう。

南部調査区　第８層出土土器

（48・49）は弥生土器口縁部の小片である。

（49）は外反する口縁部の広口壺片で、口縁端部は上下に小さく拡張している。文様については、全体にローリングを受けていることから、不明となっている。弥生中期後半の時期である。

（48）も広口壺の口縁部小片で、口縁端部を上下に拡張して、端面に３条以上の凹線文を施す。内面の口縁端付近には蓋などとの緊縛をするための紐かけ穴が遺存している。弥生中期後半の時期であろう。

（55）は須恵器坏蓋であるが、つまみの痕跡が微かに観取できる。現高1.7㎝、口径は14.9㎝と思われる。天井部外面は回転ヘラ切り後、ヨコナデを密に加えている。丁寧な作りで、焼成は普通である。平城宮Ⅱ～Ⅲの時期と思われる。

（70）は須恵器坏Ａで、口径14.6㎝、器高3.5㎝、径高指数は24である。底部外面は回転糸切りで、カキ目を残している。底部と体部の境は稜線をもって識別でき、底径は11.3㎝となる。焼成が悪く軟質である。平城宮Ⅱ頃の時期と推定している。

（74･75）は奈良時代の土師器堝または甕の口縁部小片である。２点とも（76）と同一個体かもしれない。内外面の調整はヨコナデが残るのみである。口縁端部は若干拡張し、ほぼ垂直な面としている。奈良時代前半期の平城宮Ⅱ～Ⅲの可能性がある。

②　中央部調査区出土土器（図版12、写真図版11 ～ 14）

中央部調査区　第２～８層出土土器

（68）は須恵器坏Ｂの底部破片である。胎土は精良で焼成も堅緻である。高台径は9.1㎝である。底部内面には仕上げナデを施しており、中央付近が平滑になっており、使用痕跡と判断できる。

（84）は土師器の托形土器の底部であろう。高さ1.3㎝の突出した平底は、径4.0㎝と小さく、回転糸切りである。体部は横外方に大きく開くものと思われる。平安時代後半期の所産であろう。

（87）は土師器小皿のほぼ完形品で、口径6.8㎝、器高1.2㎝である。底径は5.5㎝で、回転糸切りとなっている。口縁端部の一部分が黒く煤けていることから、燈明皿として使用されていたと判断できる。中世末～近世以降の所産と思われ、17世紀前半の可能性を残す。

（89）は須恵器で瓦質の口縁部で、鉢と思われるが、堝である可能性も捨てきれない。残存部分では直線的で、口縁端部の外側を玉縁状につくりあげている。内面はヨコハケ調整である。口径は23.6㎝と思われるが、小片のため不正確である。室町時代以降の所産と考えられるが、（88）と同様の16世紀後半～ 17世紀前半の可能性もある。

（90）は丹波焼で鉢または盤と思われる破片である。口径は20.0㎝で、内面は10YR4/3にぶい黄褐色を呈し、外面は全面に5Y5/4オリーブ色の釉がかかっている。17世紀前半のものであろうか。

（91）は丹波焼の陶器擂鉢の破片である。外表面は5YR6/4にぶい橙色を呈し、口縁端部は面をもち、内面口縁端部下に凹線状の窪みを設けている。その下部には６条の櫛で擂目を２㎝程度の間隔をあけて疎らに施している。口径は28.3㎝で、17世紀前半の所産（大平1992）と思われる。

中央部調査区　第９層出土土器

（81）・（86）はクロボクの上層である黄褐色シルト質層から出土した土師器で、（81）は坏あるいは埦

で、推定口径10.0cmと小型のものである。器高は3.5cmで、体部外面にはロクロ目が目立つ。回転糸切りの底部は径5.5cmで、平高台のようにみえる。平安時代後期の所産と推定している。(86) は皿の破片で、口径12.9cm、器高2.1cmである。いわゆる「手づくね」の土器である。

中央部調査区　第10層クロボク層出土土器

(50) は弥生土器の底部である。径8.1cm程度の平底で、体部外面には縦方向のヘラミガキを施している。中期後半の壺または甕であろう。内面はヘラケズリのようであるが、全面にローリングを受けているために極めて不鮮明である。

(51・57) は須恵器坏蓋片である。

(51) は口縁部を欠失し、天井部が遺存するのみである。つまみは中央部が尖らない。胎土は精良で焼成も良好・堅緻である。天井部内面に平滑な部分があり、転用された可能性が高い。

(57) は天井部中央を欠失する破片である。全体に器壁が厚く、胎土に砂粒を多く含んでいる。焼成もあまり良好とはいえない。口径は15.8cmで、奈良時代前半の時期と思われる。

(54・58 ～ 61) は須恵器坏蓋である。

(54) は器高の低い蓋で、端部の垂下もわずかである。口径は14.8cmと思われる。焼成は良好で、胎土もほぼ精良である。平城宮Ⅲの可能性がある。

(58) も (54) と同様に器高が低い。口径は18.0cmであろう。胎土には砂粒を少量含むがほぼ精良で、焼成は良好である。平城宮Ⅱ～Ⅲの時期と思われる。

(59) は須恵器蓋の天井部の破片である。外径3.5cmの環状つまみを有している。胎土はやや粗となっている。

(60) は、天井部と口縁部の境に稜を有する点で、(61) と形態的に類似しており、(59) のような環状のつまみがつくものと思われる。(60) は小片であるが、残存高2.2cmで、口径は14.8cmと推定している。篠窯跡群の製品である可能性があり、平安時代の９世紀後半～ 10世紀前半とされている前山２・３号窯の時期と思われる。焼成は良好で、胎土もやや精良である。

(61) は残存高2.3cmで、口径は17.5cmであろう。天井部の外端には２条の沈線とも思える線がめぐっている。シャープな作りで焼成は良好であるが、胎土に含まれる砂粒が目立っている。10世紀を前後する時期の可能性がある。

(66) は須恵器坏Ｂの破片で、高台径は9.2cmである。焼成は良好であるが、胎土に砂粒を少し含む。奈良時代中頃の平城宮Ⅲ～Ⅳと思われる。

(67) は須恵器坏Ｂの底部片で、高台径は8.5cmとやや小ぶりである。胎土に砂粒を多く含んでいる。

(69) は須恵器坏Ｂの底部片で、高台径9.5cmを測る。胎土には砂粒少なく、焼成・胎土・形態的特徴から（７）と類似する点が多く、同一個体の可能性がある。

(72) は須恵器の埦と思われる口縁部片である。口径は16.3cmで、口縁端部は、丸みのある体部から外反して短く外上方にのびる。胎土・焼成とも良好で、非常に堅緻である。平安時代の篠窯跡群の西長尾３号窯跡か小柳４号窯の製品の可能性があり、10世紀前後の時期が与えられている。

(73) は須恵器坏の破片で、高台の有無は不明である。口径12.8cmと思われ、口縁端部内面に１条の沈線状凹部を有する。焼成良好で堅緻である。奈良時代前半頃の所産と想定している。確認調査時に出土したものである。

（77）は弥生土器甕の口縁部である。体部から大きく外反し、端部は面をもち、若干肥厚させている。体部外面はタテハケ、内面は斜め方向のヘラケズリである。但馬地域弥生後期後葉の第７期（岸本2009）のものと思われる。口径は21.7cmである。

（80）は土師器坏または埦の約1/3の破片である。口径12.7cm、器高4.3cm、底径5.7cmで、底部は回転ヘラ切りのようであるが、ナデが加えられているため確認が難しい。体部はやや丸みをもち、口縁端部は外反する。平安時代の所産の可能性がある。

（82）は土師器埦の口縁部の小片である。外面にはロクロ目が目立つ。（24・42）と同様に須恵器埦の形態に近いものである。平安時代後期の所産であろう。口径は15.8cmと思われる。

（83）は土師器埦または坏の口縁部片である。外面にはロクロ目が目立つが、須恵器とは形態を異にする。比較的精緻な胎土で、ヨコナデ調整も丁寧に施している。口径は13.8cmで、平安時代後半期の所産と推定している。

中央部調査区　遺構面上　土器Ａ

（76）は奈良時代の土師器堝の破片で、口径は45.9cmの大型になるものと思われる。やや内湾する体部から外反しながら上外方にのびる口縁部で、端部は若干肥厚させてほぼ垂直な面をもつ。外面はタテハケ調整、体部内面は横方向のヘラケズリ、口縁部内面は斜め方向のハケで仕上げている。5YR6/6橙色を呈し、焼成は良好で、外面には煤が若干遺存している。内面は5YR6/4にぶい橙色を呈している。奈良時代前半期の可能性がある。

中央部調査区　遺構面上　土器Ｂ

（65）は中央部調査区で土器Ｂとして取り上げたものである。須恵器坏Ｂで、口径12.9cm、器高3.4cmで、高台径は9.1cmである。体部は底部から稜をもって上外方に直線的にやや短く立ち上がり、口縁端部は内側から厚みを減じてやや尖り気味におさめる。胎土には砂粒を含み、調整もやや雑ではあるが、焼成はほぼ良好である。径高指数が26であることから、奈良時代前半の平城宮Ⅱ頃と判断できる。

中央部調査区　北東端攪乱部分出土土器

（71）は須恵器坏Ａの破片で、口径13.8cm、器高3.6cmで、回転ヘラ切りの底面には１条のヘラ記号が認められる。底部と体部の境は丸みがあり、体部外面下半にはロクロ目が認められる。比較的丁寧な作りで、焼成も良好である。内面に褐灰色の付着物が認められる。口径指数が26であることから、平城宮Ⅲの時期と思われる。

（92）は丹波焼大甕の口縁部小片である。口径は37.3cmを測る。体部から外反した口縁部の端部はほぼ丸くおさめる。内外面は5YR5/6明赤褐色を呈している。（91）の丹波焼擂鉢と同じく17世紀前半の所産である可能性が高い。

③　北部調査区出土土器（図版13、写真図版12・14・15）

北部調査区　クロボク上層出土土器

（88）は擂鉢の口縁部片である。陶器に近い土師質で、外面口縁部下に鍔状の突起を有している。体部内面は強いヨコハケの後、縦方向の櫛目を疎らに浅く施している。16世紀後半～17世紀前半の所産

と思われる。口径は20.7㎝である。

北部の東部斜面で機械掘削時にクロボク層の上側で出土した（113）は備前焼甕で、口縁端部を玉縁状に整形している。玉縁の形状から備前Ⅲ期の14世紀前半を考えている。外面はN3/暗灰色に7.5Y5/2灰オリーブ色の釉がかかり、内面は10YR4/2灰褐色を呈している。口径は48.2㎝程度と思われる。

北部調査区　クロボク層出土土器

北部のクロボク上面から出土した（93）は、須恵器坏蓋の破片で、口縁部を欠失する。つまみは扁平な宝珠形で、天井部内面には仕上げナデを施している。

（94 ～ 96・99・102・105・107・109・110）は北部中央の東斜面のクロボク層から出土した土器である。

（94）は須恵器坏蓋の破片で、口径13.2㎝、現高2.0㎝である。口縁部は天井部から下外方に曲折して外反気味にのびた後、下方に短くのび、端部は丸くおさめる。奈良時代末～平安時代初期の頃と思われる。

（95）は須恵器坏Ａで、口径12.6㎝、器高3.3㎝で、底部外面は磨滅が著しい。底部と体部の境は丸みがあり、口縁部は直立気味で、径高指数が26であることから、奈良時代でも前半の平城宮Ⅲの時期と思われる。全体的に器壁が厚く、胎土に砂粒を多く含んでいる。

（96）も須恵器坏Ａの小片であるが、焼成が悪く土師器状を呈している。器表剥離が著しく、器高3.0㎝、口径13.9㎝、底径11.0㎝であるが、やや不正確である。底部外面はヘラ切りとなっている。

（99）は須恵器の鉢または盤の口縁部片である。口径は27.6㎝と思われる。奈良時代の所産である。

（102）は土師器甕の口縁部で、口径は27.2㎝ほどと思われるが、小片のため不正確である。体部は内外面ともハケ調整で、外面は二次的被熱により2.5YR5/4にぶい赤褐色を呈している。奈良時代の可能性を考えている。

（105）は平底の土師器坏で、口径10.3㎝、器高2.7㎝を測り、径6.8㎝の底部は糸切りである。

（107・109・110）は土師器の埦または鉢の底部片である。（109）は突出した平底で、底部外面はヘラ切りのようである。底径は6.9㎝を測る。（107）の底径は7.5㎝で、あまり突出しない。軟質で、器表の遺存状況が悪く、外面の状況が不明であるが、内面はヨコナデで仕上げている。（110）は径4.6㎝と小さな突出した平底で、回転糸切りとなっている。

（97）は北部東斜面のクロボク層から出土した須恵器坏Ｂの底部である。高台径は10.5㎝で、底部内面には仕上げナデを施している。高台底面には板状圧痕が観取できる。

（98・103・112）は北部の東側斜面のクロボク上面で出土した土器である。

（98）は須恵器坏Ｂでの破片で、高台径は9.2㎝、底部と体部の境は丸みがある。奈良時代である。

（103）は土師器甕または堝の口縁部片である。口径はかなり大きくなるが、小片のため正確な数値は不明である。外面はタテハケ、内面はヨコナデで仕上げている。12世紀頃のものであろうか。

（112）は須恵器捏鉢の破片で、口径は24.6㎝、口縁部には重ね焼きの痕跡がある。形態的には東播系須恵器に近く、その編年観では13世紀頃のものと思われる。

（101）は北部東端のクロボク層から出土した須恵器甕の破片である。タタキ目は綾杉状のもので、内面の青海波文はナデ消している。胎土は比較的緻密で、焼成は良好である。平安時代後半期の所産と思われる。

（104）は北部の東側斜面のクロボク層から出土した、須恵器の小型埦の破片で、楕円形にやや歪んでいるが、器高3.2㎝、口径は9.4㎝と判断している。回転糸切りの平底の径は5.0㎝で、体部は丸みをもっており、口縁部は少し外反する。口縁部および体部内面には自然釉がはじけた状態で付着している。平安時代の10世紀前後に比定されている、篠・前山２・３号窯跡の製品である可能性がある。

北部調査区　トレンチ内　クロボク層出土土器

（100・106・108）は、北部トレンチ内のクロボク層から出土した土器である。

（100）は緑釉陶器埦または皿の底部付近の破片である。釉はすべて剥がれ落ちている。径7.2㎝の輪高台は回転糸切り後貼り付けられている。軟質で、有段輪高台であることから、近江産と思われる。

（106）口径10.0㎝の土師器皿の破片で、回転糸切りで径5.9㎝の底部から外上方に直線的にのびる体部・口縁部となる。器高は2.9㎝である。体部外面にはロクロ目が目立つ。

（108）は径7.4㎝、高さ0.9㎝の平高台を有する土師器埦の底部付近の破片である。底部は回転糸切りである。平安時代後期の所産であると思われる。底面には乾燥時と思われる板圧痕が認められる。

北部調査区　その他出土土器

北部上段の東半部で遺構検出時に出土した（111）は、須恵器の鉢と推定しており、奈良時代の可能性を考えている。口径は14.4㎝と想定している。

大平　茂 1992「近世丹波焼擂鉢の型式分類とその編年」『下相野窯址』兵庫県文化財調査報告 第107冊　兵庫県教育委員会
岸本一宏 2009「若水遺跡出土弥生土器の編年的位置－但馬地域弥生後期土器編年」『若水古墳群・城跡』兵庫県文化財調査報告 第364冊　兵庫県教育委員会

３．出土金属製品・石製品 （図版14、写真図版15・16）

今回の調査で出土した金属製品には、柱穴から出土した角釘や包含層から出土した鉄刀子状の製品のほか、ＳＫ７出土で既述の古銭がある。また、石製品には現代溝から出土した水車杵の錘がある。

金属器

遺構出土遺物

柱穴

Ｆ１は中央部調査区のＰ15の掘形から出土した皆折角釘である。全長3.5cmで折損は認められない。柱穴は下層遺構面で検出した。

Ｆ２も皆折角釘で、中央部調査区の下層遺構面のＰ74の掘形から出土したものである。先端を欠失しており、残存長3.45cmで、曲がっている。横断面は長方形である。

包含層出土遺物

Ｆ３は南部調査区の南寄りの第７層から出土した。刀子状の製品が「Ｕ」字形に折れ曲がっていると判断している。刃部はかなり減っており、幅８mm程度になっている。茎部分も断面三角形で、幅は約1.2cm、長さ約3.0cmで、関は刃部側にのみ認められる。全長は14cm程度の長さになるものと思われる。層位的には飛鳥～奈良時代に属する可能性が高い。

Ｆ４は北部調査区の東斜面部のクロボク層から出土した刀子状の製品である。層位的には奈良～平安時代にあたる。断面三角で関の位置が一方にずれたようになっている。かなり使用されており、茎の方が幅広くなるものと思われる。茎端を欠失し、残存長は7.1cmを測る。

Ｃ１は寛永通宝である。残存状態が良好で、光沢がある。直径2.3cmである。調査時に残土置き場で採集したものである。

石製品

Ｓ１は中央部調査区と北部調査区の間に存在した、現代水路から出土した。

直方体で中央部に長辺9.6cm、短辺3.3 ～ 3.5cmの長方形の孔を貫通させた、水車杵の錘である。長辺26.9cm、短辺16.0cm、高さ8.6cm、現重量7.75kgの玄武岩製のものである。側面および孔には漆喰のような白い付着物が線状に遺存し、上面にも点在するかたちで遺存している。杵に装着する際の接着剤と思われる。時期的には近世末～近代以降と思われる。

第３章　総　括

第１節　篠窯跡生産須恵器について

はじめに

今回の喜多垣遺跡の発掘調査の結果、飛鳥～平安時代の遺構内や包含層から多くの土器類が出土した。それらのうち、平安時代の９世紀～ 10世紀の遺物のなかには、京都府篠窯で製作・焼成された緑釉陶器１点のほか埦を中心とした須恵器が少なからず認められた。

篠窯の製品については、かなり研究が進んでおり、細かい編年案も提出されている（第２図、石井2001）ことから、それらに照らし合わせ、喜多垣遺跡における篠窯製品の流入状況や、朝来市山東町域を中心とした地域における篠窯製品の導入状況についても調べてみることとする。

山東町域における篠窯製品の類例

管見によれば、朝来市山東町域を中心とした地域で出土した緑釉陶器・須恵器のうち、緑釉陶器については篠窯製品と判断されている場合が多いものの、須恵器については、報告書において明確に篠窯製品と位置付けられている場合はそう多くない（第２図）。

山東町域で緑釉陶器が出土している遺跡は、今回調査の喜多垣遺跡をはじめ、柴遺跡（鈴木ほか2009）・方谷遺跡（吉識編2008）・梅ヶ作遺跡（藤田2008）・梶原遺跡（藤田2008）・筒江大垣遺跡（別府ほか2008）の計６遺跡（第３図）である。これらのうち、柴遺跡は「驛子」と記された木簡が出土したことから、粟鹿駅家の一角とされ、すぐ北東側裏に存在する方谷遺跡も駅家との関係でとらえられている。また、梶原遺跡と梅ヶ作遺跡も近接して存在しており、一連の遺跡としてとらえることができることから、柴遺跡・方谷遺跡、梅ヶ作遺跡・梶原遺跡、筒江大垣遺跡、そして喜多垣遺跡の４つの単位としてとらえることができよう。

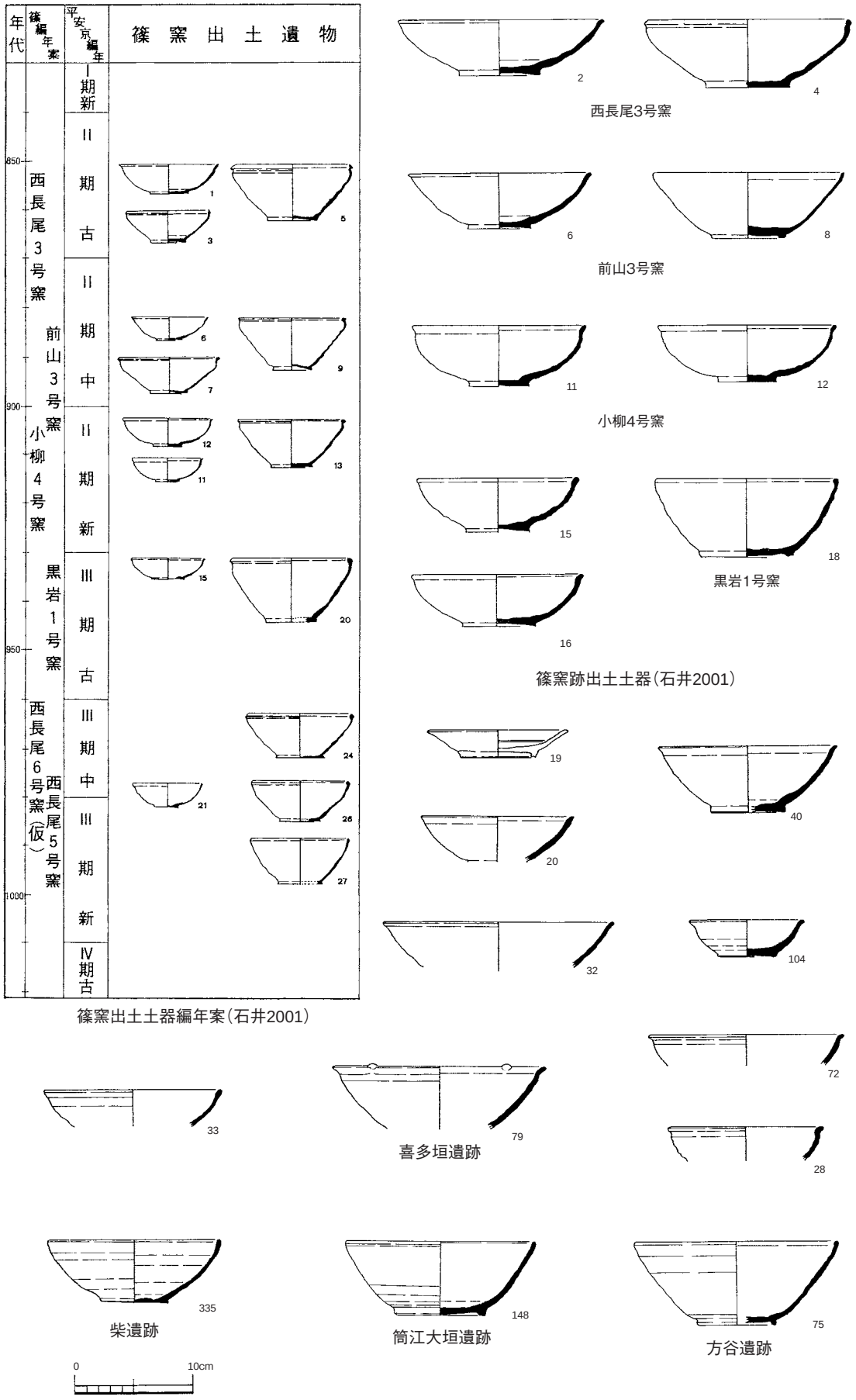
一方、出土須恵器が篠窯製品と判断された遺跡は、今回調査の喜多垣遺跡以外には方谷遺跡・筒江大垣遺跡の２遺跡をあげうるにすぎない。しかし、柴遺跡において篠窯製と推定できる形態のものが存在していることから、もう１遺跡を加えて４遺跡となる。ただし、柴遺跡と方谷遺跡は先にみたように一連の遺跡ととらえられることから、３単位の遺跡とすべきである。

喜多垣遺跡では緑釉陶器皿（19）・須恵器埦（20）の篠・西長尾３号窯と推定される９世紀後半に位置づけられるものが最も古く、次いで篠・前山３号窯と思われる須恵器埦の（40）や、前山３号窯か小柳４号窯と判断した須恵器埦(32)と小型埦の(104)があげられる。須恵器埦(33)や輪花の須恵器埦(79)および須恵器埦の（72）も含めて篠・小柳４号窯製と推定している。10世紀中頃の篠・黒岩１号窯のものは須恵器の埦と思われる(28)があり、これが最も新しい。なお、須恵器坏蓋の(59 ～ 61)も篠窯製で、10世紀前後のものと推定しており、須恵器埦（41）も篠窯製であろう。

柴遺跡出土の（第２図335）は鉢に近い形態で、篠・前山３号窯か小柳４号窯製の可能性があり、９世紀末～ 10世紀前葉のものであろう。

筒江大垣遺跡から出土した（第２図148）は、篠・前山３号窯と思われ、９世紀末頃とされている。

方谷遺跡出土須恵器埦の（第２図75）は篠・西長尾３号窯か前山３号窯製と思われ、９世紀後半であろう。



第２図　篠窯出土土器と山東町出土篠窯製土器類

まとめ

以上のように、山東町域を中心とした地域で出土した篠窯製須恵器をみてきたが、明確に篠・西長尾３号窯製と判断できるものは認められず、９世紀中葉ではまだ篠窯製須恵器は導入されておらず、９世紀後半以降であることがわかった。

一方、篠窯製緑釉陶器は、小片のため製作地や時期が不明の梶原遺跡や梅ヶ作遺跡例を除いて、柴遺跡や筒江大垣遺跡で多量の出土が認められる。柴遺跡や方谷遺跡では駅家という遺跡の性格上、早い段階から緑釉陶器が使用可能であるにもかかわらず、その導入は10世紀以降であり、筒江大垣遺跡においても10世紀前半からの導入となっている。これらのことから、山東町域を中心とした地域では、篠窯産緑釉陶器の導入にさきだって、その直前には篠窯産須恵器が導入されていることが判明した。また、山東町域を中心とした地域では、篠窯製須恵器が確認されている遺跡は多くは認められなかった。なお、筒江大垣遺跡で多量の緑釉陶器が使用されていることは注意に値する。

ところで、柴遺跡・方谷遺跡ではほかに灰釉陶器や多量の墨書土器・転用硯・稜埦に加えて製塩土器が出土しており駅家としての充分な遺物が出土している。一方、梶原遺跡・梅ヶ作遺跡においても灰釉陶器・稜埦・製塩土器が出土しており、筒江大垣遺跡にいたっては灰釉陶器のほか墨書土器・稜埦・円面硯・転用硯・製塩土器が出土している。梶原遺跡・梅ヶ作遺跡・筒江大垣遺跡の性格の特殊性が窺えよう。また、今回調査の喜多垣遺跡と、筒江大垣遺跡や梶原・梅ヶ作両遺跡の立地が似ていることが注意されよう。すなわち、山東盆地内の中央部ではなく、縁辺部に存在している点である。しかも、喜多垣遺跡北部調査区の東側斜面下で検出した、柱穴群の山側を溝で囲んだ遺構、すなわち雨落ち溝を有する掘立柱建物跡と推定されるものは、梶原遺跡においても斜面下で発見されている。

次に、筒江大垣遺跡や梶原遺跡・梅ヶ作遺跡が宝珠峠を越える街道沿いに位置していることが注意される。すなわち、その街道が、西に存在したと推定（岸本2012）される加都遺跡付近の円山川の河津（川津）と、古墳時代中期の首長居館である柿坪遺跡を結ぶ街道であることから、古墳時代中期にまでさかのぼることができると思われ、街道沿いに位置する茶すり山古墳の存在もそのことを示していると思われる。このように古くからの街道沿いの峠付近に位置する筒江大垣遺跡や梶原遺跡・梅ヶ作遺跡は、平安時代においては関所的な意味合いがあった遺跡である可能性があろう。このことは、喜多垣遺跡においても、その位置が、朝来市和田山町竹田と山東盆地を結ぶ街道が、山東盆地に入った部分であることと無関係ではないものと思われる。なお、この街道は古墳時代後期までさかのぼると推定される。

このように、本遺跡も含めた、緑釉陶器・稜埦・転用硯・製塩土器が出土したこれらの遺跡は、山東盆地の出入口に位置し、役所的な遺物を出土することから、関所的な性格を有していたと推定しておきたい。そして、そういった遺跡には篠窯製の須恵器も導入されたものと思われる。

石井清司2001「篠窯の実年代」『京都府埋蔵文化財論集 第４集－創立20周年記念誌－』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
岸本一宏 2012「交通と伝達①湊・駅」『古墳時代の考古学』５　時代を支えた生産と技術　同成社
鈴木敬二ほか 2009『柴遺跡』兵庫県文化財調査報告 第360冊　兵庫県教育委員会
藤田　淳2008a「梶原遺跡 梅ヶ作遺跡」『梶原遺跡 梅ヶ作遺跡 北山遺跡 大月北山古墳群』兵庫県文化財調査報告第344冊　兵庫県教育委員会
別府洋二ほか 2008『筒江大垣遺跡』兵庫県文化財調査報告書 第335冊　兵庫県教育委員会
吉識雅仁編 2008『方谷遺跡』兵庫県文化財調査報告 第344冊　兵庫県教育委員会

第２節　押坂神社について

はじめに

喜多垣遺跡の性格を考える際に、山東盆地の出入口という遺跡の位置や、緑釉陶器・稜埦・転用硯・製塩土器といった遺物以外にも重要な点がある。それは、今回調査した喜多垣遺跡の北西約300mの位置に押坂神社が存在しており、喜多垣集落がかつては「押坂」という名称であった点である。

「正倉院文書」におさめられた奈良時代の「但馬国正税帳」（天平９年：737年）に、

朝来郡押坂　神戸租代四十九束九把

朝来郡押坂　神戸調絁三疋一丈五尺　直稲百九十五束

と記載されており、押坂神社の神田を耕作していた封戸である神戸がおさめた租や調が押坂神社に支給されたことが記されている。同時に、粟鹿神社の記載もあり、

朝来郡粟鹿　神戸租代六十六束二把

朝来郡粟鹿　神戸調絁二匹疋丈五尺　直稲百六十五束

とある。

その後、奈良時代後期の『続日本紀』や平安時代（845年・874年）の『続日本後紀』や『日本三代実録』および『延喜式』には、朝来郡内では粟鹿神社のみ記載され、押坂神社の名称は姿を消し、鎌倉時代後期の「但馬太田文」になって再登場している。

押坂神社と喜多垣遺跡について

「但馬国正税帳」に記載された押坂神社は、兵主神社のこととされることや、現在の場所ではなく、森集落に存在する八幡神社の場所にあったとされることが多い。八幡神社にあったとするのは、16世紀の天文年間に衣笠城主松岡盛祐が、八幡神社奉祭の適地であるとして、それまで祀られていた押坂神社を喜多垣の現在地へ移祭したとの伝えによるものであり、その証拠記録は現在見ることができないとのことであり、信憑性が疑われている（木村ほか1984）。

神社の創建については、「但馬国正税帳」に記載されていることから、奈良時代には存在していることがわかり、奈良時代初期あるいはそれ以前と推定することもできよう。なお、現在の社殿は、安永２（1773）年癸巳８月の再建になるものといわれている。

さて、前節でみたように、喜多垣遺跡から緑釉陶器や須恵器稜埦・転用硯・製塩土器といった一般集落ではほとんど使用しない遺物が出土している点と、竹田から迫間を抜けて山東盆地に入ったところに位置していることから、喜多垣遺跡を関所的な性格と考えた。

一方、粟鹿神社に目をむけてみると、粟鹿神社が元は別の場所にあったといわれることがなく、神社の北側には粟鹿遺跡が存在している。粟鹿遺跡の発掘調査の結果、奈良時代の掘立柱建物跡が並んで建っていたことが判明している。粟鹿遺跡からは奈良～平安時代の緑釉陶器や製塩土器は出土していないものの、奈良時代の「神マ」（みわべ）の墨書土器や円面硯が出土しており、神社関連の建物と推定されている（深井2007）。

ここで、押坂神社が元来この喜多垣の現在の地にあったことを前提にすれば、飛鳥～奈良時代の稜埦や転用硯・製塩土器といった、やや役所的な遺物の存在から、押坂神社関連の遺跡でもあったことを推定することができるであろう。すなわち、喜多垣遺跡は押坂神社やその神田を管理する性格も同時に担

第３図　山東町域を中心とした喜多垣遺跡関連の神社と遺跡

っていた可能性を指摘することができよう。このことは、喜多垣遺跡が特殊な性格である点により、押坂神社がもともと現在の地にあったことも彷彿させるものと思われる。

まとめ

押坂神社は元来現在の地に存在していた可能性を指摘したが、奈良時代前期の「但馬国正税帳」に記載された押坂神社が、その後、朝来郡内では粟鹿神社のみを残して文献の表舞台から遠ざかっている。このことは、喜多垣遺跡では飛鳥時代からの遺物が出土している一方、粟鹿遺跡では奈良時代の遺物・遺構に限られることと関連付けて考えた場合、奈良時代前期までは押坂神社と粟鹿神社が両立していたが、その後、朝来郡内の神社の粟鹿神社に統一されていったことを示しており、古墳時代からの中心地であった山東盆地西部が政治的に衰退していったと推定しておきたい。

木村丑郎ほか 1984『山東町誌』山東町
深井明比古 2007「古代・中世の粟鹿遺跡と粟鹿神社について」『粟鹿遺跡 第２分冊』兵庫県文化財調査報告 第323冊　兵庫県教育委員会

第３節　総　括

はじめに

以上のように、今回の調査で検出した遺構は、奈良時代～平安時代末にかけての掘立柱建物跡や建物跡の存在を示す多数の柱穴および溝・土壙である。また、中世末～近世初頭の遺構も少量であるが、柱穴・土壙を調査した。なお、北部調査区では近世末～近代頃と思われる柱穴・溝・土壙があり、ここにも近世末～近代の建物跡が存在していたことが窺える。

本遺跡から出土した遺物については、奈良時代の遺物に須恵器の稜埦や製塩土器、転用硯が含まれ、平安時代では緑釉陶器や輪花状になった須恵器埦といった、一般の集落からはあまり出土しない遺物が存在していることが特徴としてあげられると同時に、この遺物と遺跡の位置によって本遺跡の性格が関所的であったことに加えて、押坂神社やその神田を管理する性格も備えていた可能性を指摘した。

今回の発掘調査で検出した遺構の時期は、検出遺構と出土遺物から、飛鳥～平安時代と中世末～近世初頭および近世末～近代の３時期に分けることができる。このうち、最も古い飛鳥～平安時代の時期については、さらに細かく、少なくとも飛鳥～奈良時代と平安時代の２時期に細分する必要性を感じてはいたが、本報告では果たすことができなかった。以下、遺跡の変遷を飛鳥～平安時代と、中世末～近世初頭の２時期に大きく分けて（第４図）総括の記述をおこなう。

検出遺構の変遷

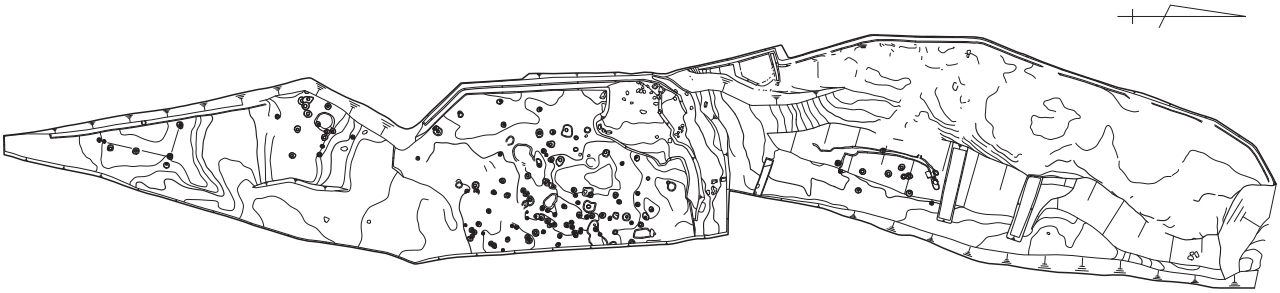
飛鳥～平安時代

北部調査区の北部を除いた、調査区のほぼ全域に遺構の分布が認められた。調査区南端では平安時代の10世紀頃の掘立柱建物跡の一部を検出し、その周辺から飛鳥～奈良時代の遺物も出土した。確認できた建物跡はこの１棟に限られる。中央部調査区では、ほぼ水平・平坦な面に非常に多くの柱穴を検出したが、掘立柱建物跡として組み合うものを抽出することができなかった。中央部調査区ではこの時期の遺構は東寄りでほぼ中央部分にに集中し、座標北から少し振った方向で柱穴の並びが認められるようである。なお、柱穴から鉄釘が出土している。北部調査区では南東部の斜面下に山側を削って平坦面を形成し、山側に溝を巡らせ、溝で囲まれた中に多くの柱穴を配した遺構を検出した。ここには掘立柱建物跡が建っていた可能性が高いが、建物跡として組み合う柱穴を確認することができなかった。この遺構の時期は平安時代(10世紀)頃と思われ、この部分の埋土であるクロボク層からは鉄刀子も出土している。

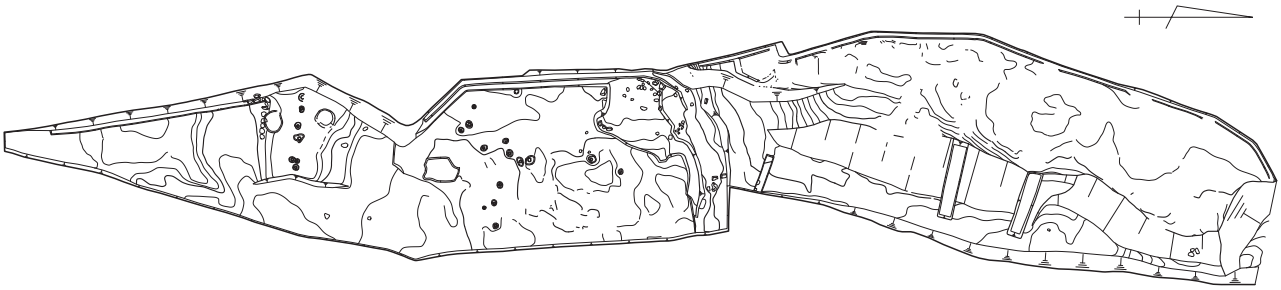
出土遺物には、飛鳥時代の稜埦片や奈良時代の転用硯が南部調査区の包含層から、奈良時代の製塩土器片が中央部調査区の柱穴埋土から、平安時代の緑釉陶器皿片や土師器埦のほぼ完形品などが南部調査区の掘立柱建物跡の柱穴から出土した。以上の特殊な遺物のほかに、調査区全体を通して平安時代の京都府・篠窯産の須恵器が多く出土し、それ以外には完形や完形に近い奈良時代の須恵器が中央部調査区から出土した。

中世末～近世初頭

この時期の遺構は、北部調査区以外で検出した。南部調査区では、自然流路跡と石列およびその北側では列状に並んだ柱穴を検出した。中央部調査区では西側にやや偏った状態で柱穴と土壙を検出した。柱穴は座標北からやや東に振った方向で並んでいるようにもみえるが、建物跡や柵といった柱穴が組み合わさった遺構は確認できなかった。なお、包含層や柱穴内より備前焼・丹波焼・唐津焼といった



飛鳥～平安時代



中世末～近世初頭

第４図　検出遺構変遷図

陶器などが出土している。土壙ではＳＫ７から北宋銭等と黒色小礫が多数出土した。遺構の性格は不明であるが、墓の可能性も含めて今後の課題としておきたい。

近世末～近代

この時期の遺構は北部調査区で検出したものが大半である。柱穴と土壙および溝があり、若干の遺物が出土した。中央部調査区では溜め井戸あるいは肥溜めと思われる円形土壙を検出した。中央部調査区のこの時期のものはほとんど調査しなかった。

まとめ

今回の発掘調査は、喜多垣遺跡の一部を調査したにすぎず、遺跡の範囲は今回の調査区から東側に広がっているものと思われる。また、遺跡の位置や一般集落ではほとんど使用しない遺物の存在および「但馬国正税帳」記載の押坂神社の存在から、押坂神社とその神田の管理も担った関所的性格であったと大胆に推定した。さらに想像をたくましくすれば、平安時代以降は、荘園の管理なども担っていたのかもしれない。

今後、本報告書が喜多垣遺跡の今後の調査や周辺遺跡を理解するうえで一助となれば幸いである。

報 告 書 抄 録

ふ り が な	きたがき いせき
書　　名	喜多垣 遺跡
副　書　名	道路改良事業 一般県道檜倉山東線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第 464 冊
編 著 者 名	岸本一宏・長濱誠司
編 集 機 関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
所　在　地	〒 675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号（兵庫県立考古博物館内）　TEL 079-437-5561
発 行 機 関	兵庫県教育委員会
所　在　地	〒 650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通５丁目 10 番１号　TEL 078-362-3784
発行年月日	平成 26（2014）年３月 28 日
資料保管機関	兵庫県立考古博物館
所　在　地	〒 675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号　TEL 079-437-5589

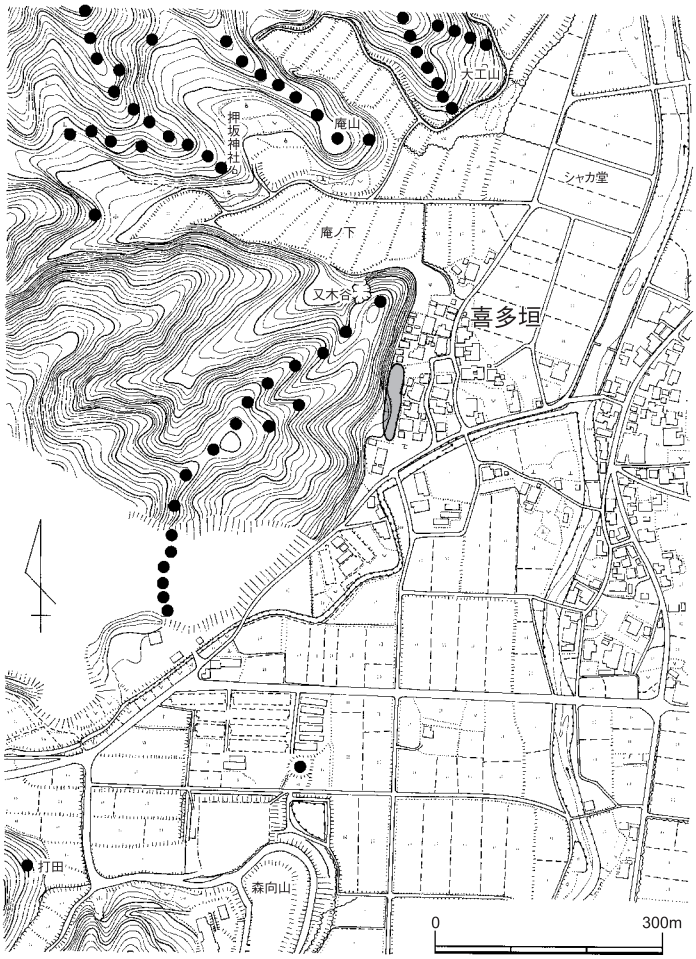
（ふりがな）所収遺跡名	（ふりがな）所在地	コード		北緯	東経	調査期間（遺跡調査番号）	調査面積（㎡）	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
きたがき いせき 喜多垣 遺跡	あさごし さんとうちょう きたがき 朝来市 山東町喜多垣	28225	740751	35° 17′ 34″	134° 52′ 25″	20120703 ～ 20120817 (2012001)	833㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
喜多垣 遺跡	集落	奈良～平安時代	土壙 柱穴	鉄刀子 土師器 須恵器	緑釉陶器 篠窯跡群生産須恵器
		室町時代	柱穴・土壙	土師器・陶器	土壙より古銭・碁石出土

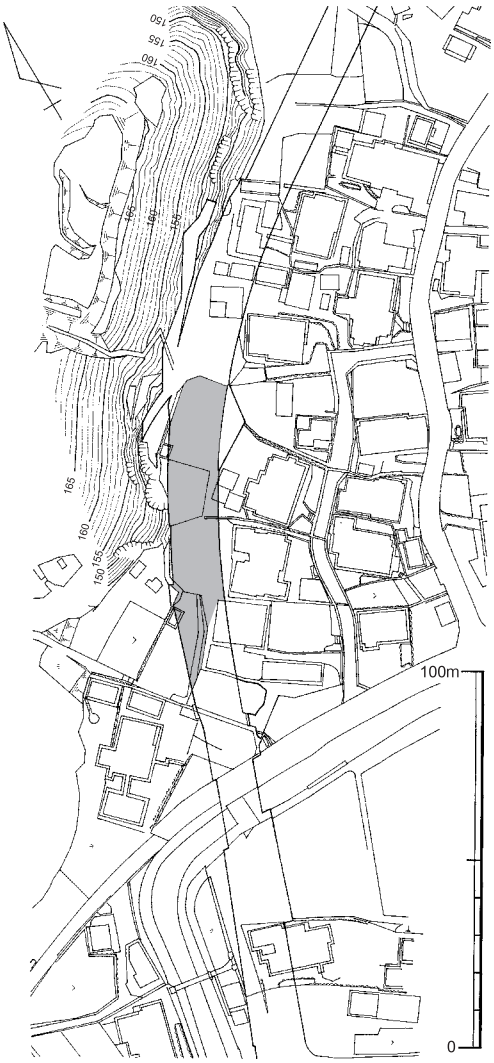
出土した遺物については、奈良時代の遺物に須恵器の稜埦や製塩土器、転用硯が含まれ、平安時代では緑釉陶器や輪花状になった須恵器埦といった、一般の集落からはあまり出土しない遺物が存在していることが特徴としてあげられると同時に、この遺物によって本遺跡の性格を示唆している可能性がある。また、調査区の北西側約 300 mの位置に押坂神社が存在しているが、その神社は「正倉院文書」におさめられた奈良時代の「但馬国正税帳」（天平９年：737 年）に記載されており、押坂神社の神田を耕作していた封戸である神戸がおさめた租や調が押坂神社に支給されたことが記されている。その後、奈良時代後期や平安時代の『続日本紀』や『延喜式』には朝来郡内では粟鹿神社のみ記載され、押坂神社の名称は姿を消し、鎌倉時代後期になって再登場している。

今回の調査によって検出された遺構の時期は奈良時代でも早い段階に属しているようで、先の「但馬国正税帳」の時期と合致している。このことと、喜多垣遺跡で検出した奈良時代の遺構と出土遺物の特徴をあわせて考えると、奈良時代の喜多垣遺跡が押坂神社の神田経営に関係する役所的遺跡であった可能性が出てこよう。

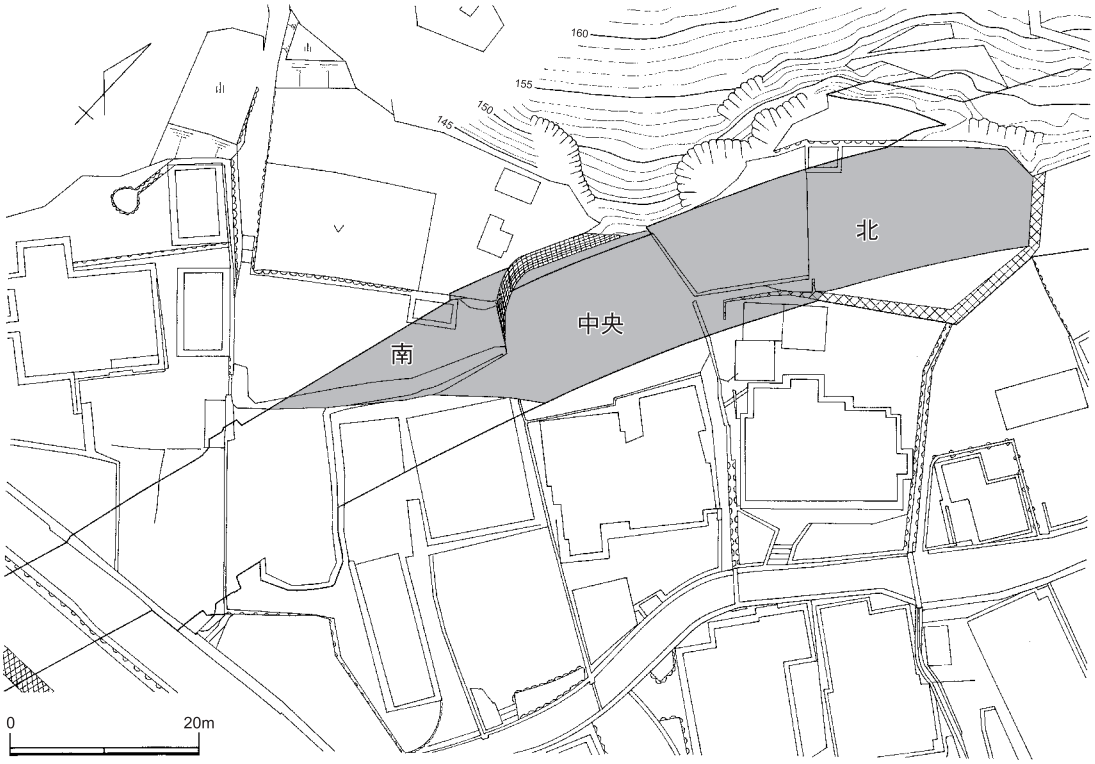
図　版



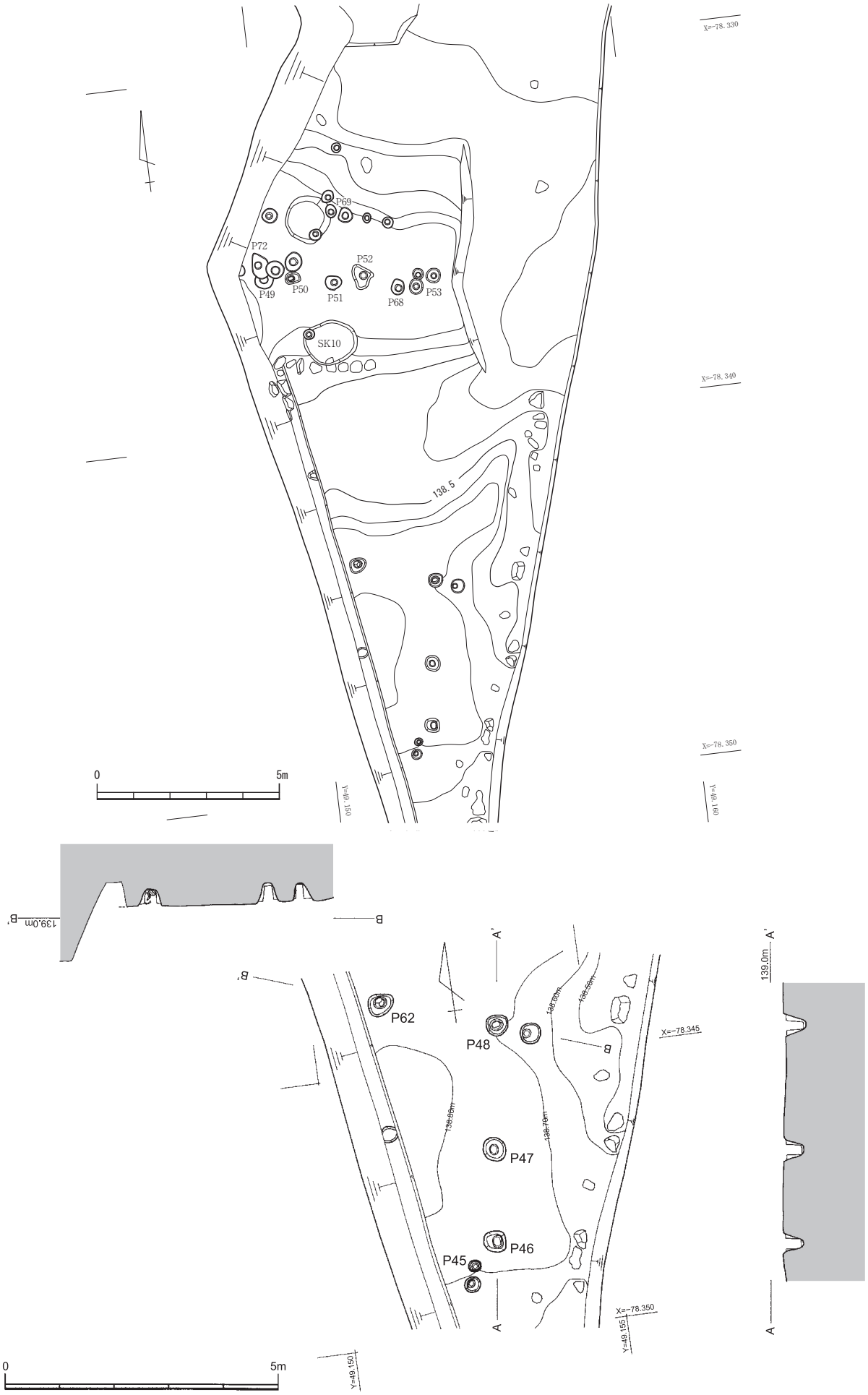
近隣の遺跡・古墳　分布模式図



調査区位置図

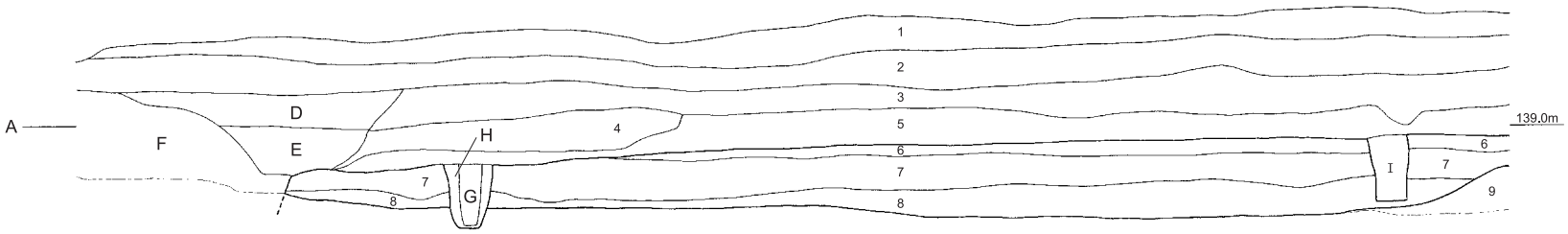


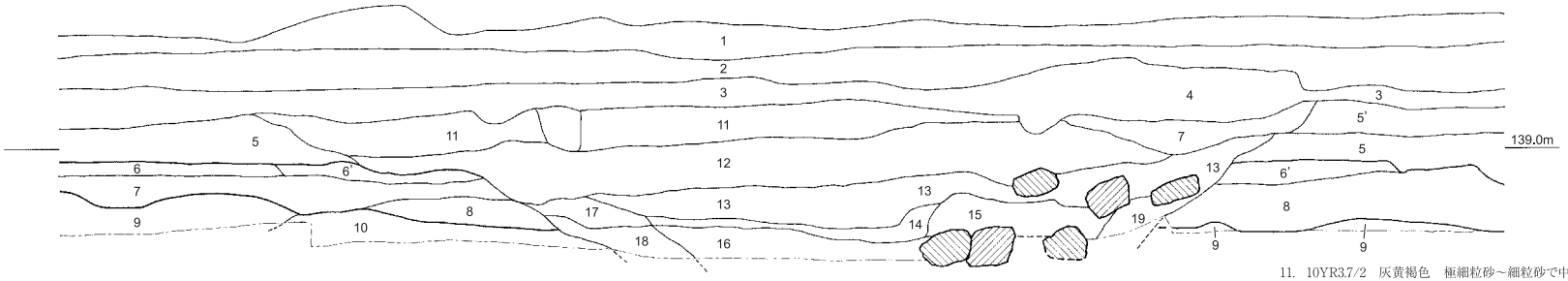
喜多垣遺跡位置図

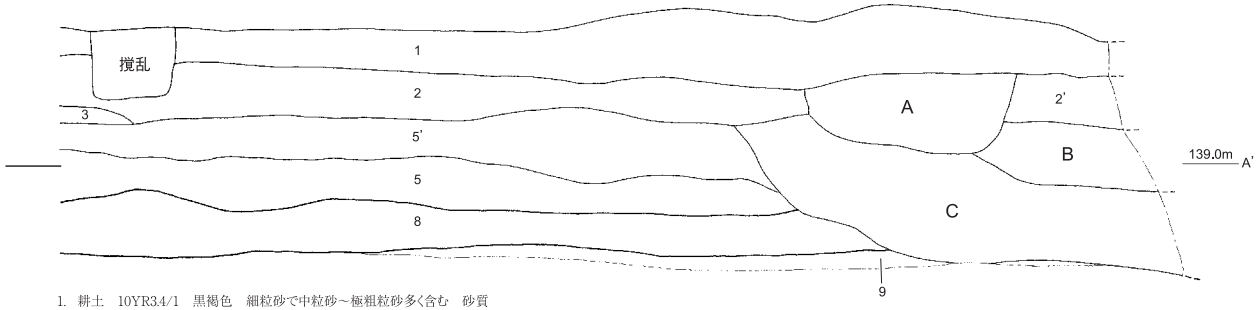


調査区南部の遺構・掘立柱建物跡

調査区南部西側壁土層断面図







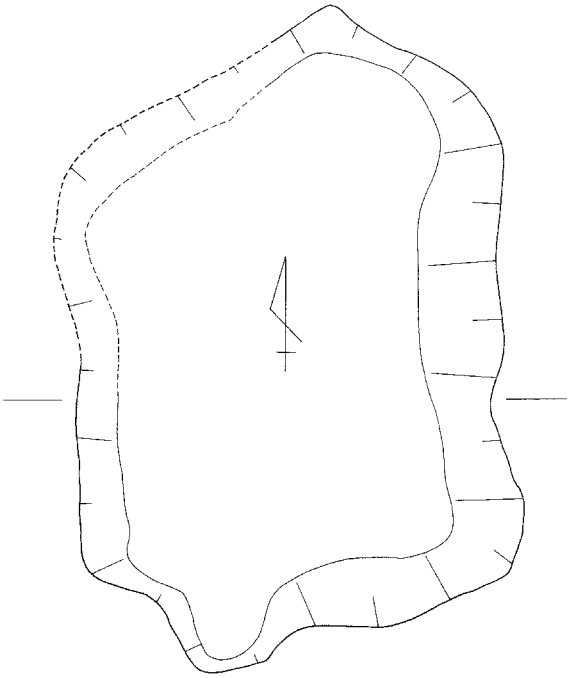
1. 耕土　10YR3.4/1　黒褐色　細粒砂で中粒砂～極粗粒砂多く含む　砂質
2. 10YR4/2　灰黄褐色　極細粒砂まじり細粒砂～粗粒砂　畑の嵩上げ土
2' 10YR5/4　にぶい黄褐色　中粒砂～細礫　砂質
3. 10YR3.8/2　灰黄褐色　細粒砂で中粒砂～極粗粒砂含む　炭化物含む　焼土塊や近世瓦含む　畑の嵩上げ土
4. 10YR3/2　黒褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂含む　畑の嵩上げ土
5. 10YR5/4　にぶい黄褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂少量含む　自然流入の堆積土か
5' 10YR4/2.3　灰黄褐色　極細粒砂まじり中粒砂～細礫　やや粘質
6. 9YR5/6　黄褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫含む　真砂土に似る　上面が平安末頃の遺構面　整地層の可能性あり
6' 6層と7層がまじりあった層　自然に削られて再堆積したものか
7. 7.5YR3/2　黒褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫含む　奈良から平安中期(10世紀頃)までの土器を含む包含層　やや粘質
8. 10YR5/3　にぶい黄褐色　極細粒砂まじり細粒砂で中粒砂～細礫含む　洪水堆積層または山からの流入土　シルトのラミナあり
9. 10YR4.5/2　灰黄褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫少量含む　上面が奈良頃の遺構面か
10. 10YR3/4　暗褐色　細粒砂で中粒砂～細礫含む　9層同様自然堆積層
11. 10YR3.7/2　灰黄褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫多く含む　やや軟質　室町時代頃の自然流路か
12. 10YR3.7/4　褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫多く含む　やや軟質　室町時代頃の自然流路か
13. 10YR4.4/4　褐色　極細粒砂まじり細粒砂～細礫　やや軟質　室町時代頃の自然流路か
14. 10YR4.5/2　灰黄褐色　極細粒砂で細粒砂～細礫多く含む　室町時代頃の自然流路か
15. 10YR5/2　灰黄褐色　砂層　細粒砂～細礫　φ10～50cm大の亜角礫含む　室町時代頃の自然流路か
16. 10YR3.4/1　黒褐色　極細粒砂で細粒砂～極粗粒砂多く含む　やや粘質　室町時代頃の自然流路か
17. 10YR4/2.4　灰黄褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂多く含む　室町時代頃の自然流路か
18. 10YR4/2.7　灰黄褐色　砂層　細粒砂～極粗粒砂　やや粘質　室町時代頃の自然流路か
19. 10YR5/3.5　にぶい黄褐色　砂層　中粒砂～細礫　軟質　室町時代頃の自然流路か

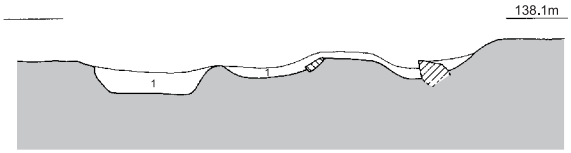
A. 土石流　10YR4/3　にぶい黄褐色　中粒砂で粗粒砂～細礫を多く含む　φ10～35cm大の亜円礫を含む
B. 10YR4/6　褐色　中粒砂～極粗粒砂　砂質
C. 土石流　10YR3.6/3　にぶい黄褐色　細粒砂まじり中粒砂～細礫　φ10～40cm大の亜円～亜角礫を下部に含む
D. 10YR4/1.6　灰黄褐色　細粒砂～細礫　軟質　畑の石垣裏込めか
E. 10YR4/2.6　にぶい黄褐色　細粒砂～細礫　軟質　畑の石垣裏込めか
F. E層と同じ　軟質　石垣の礫(30×50cmの亜角礫)および裏込め石含む
G. 柱穴柱痕　10YR3/2　黒褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂を含む　掘立柱建物跡の続きか?
H. 柱穴掘形　10YR3/3　暗褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂を含む　掘立柱建物跡の続きか?
I. 柱穴　10YR3/1.5　黒褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂含む　やや粘質

0　2m

SK7
SK8
SK9
P43
P71
P74
P75
P42
P79
P40
P78
P41
P37
P36
P38
P44
P70
P35
P31
P73
P58
P34
P72
P59
P39
P63
138.0
P30
P32
P28
P29
P33
土器A
P26
P27
P77
P57
X=-78.320
P25
P21
P22
P24
P23
P76
P55
P17
P20
P15
P61
P16
P18
P56
P81
P14
P13
P60
P82
土器C
P12
A
P54
P11
P84
P08
P09
P10
P07
P06
P83
土器B
P05
X=-78.310
Y=19.160
Y=19.120
0
5m

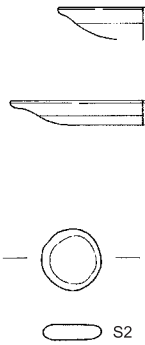
調査区中央部の遺構

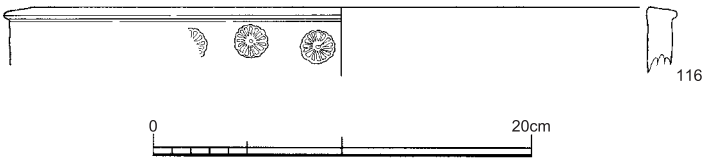




1. 7.5YR4/1　褐灰色　シルト質細～中砂

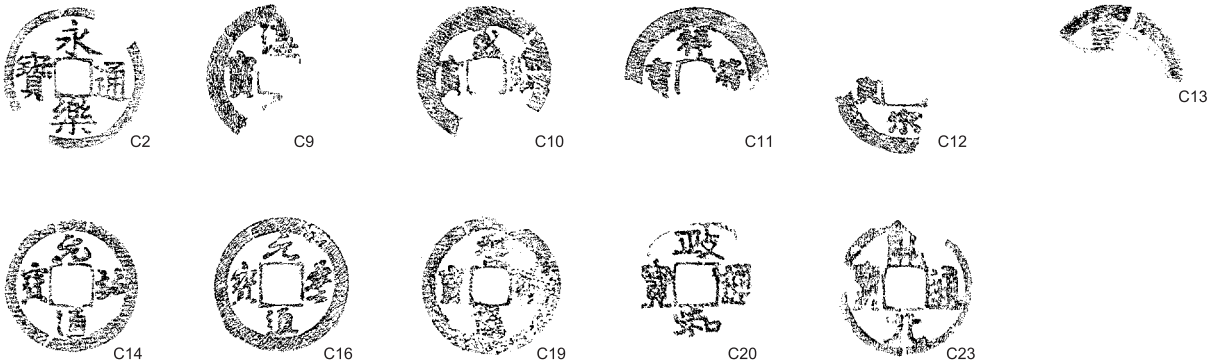
0　2m





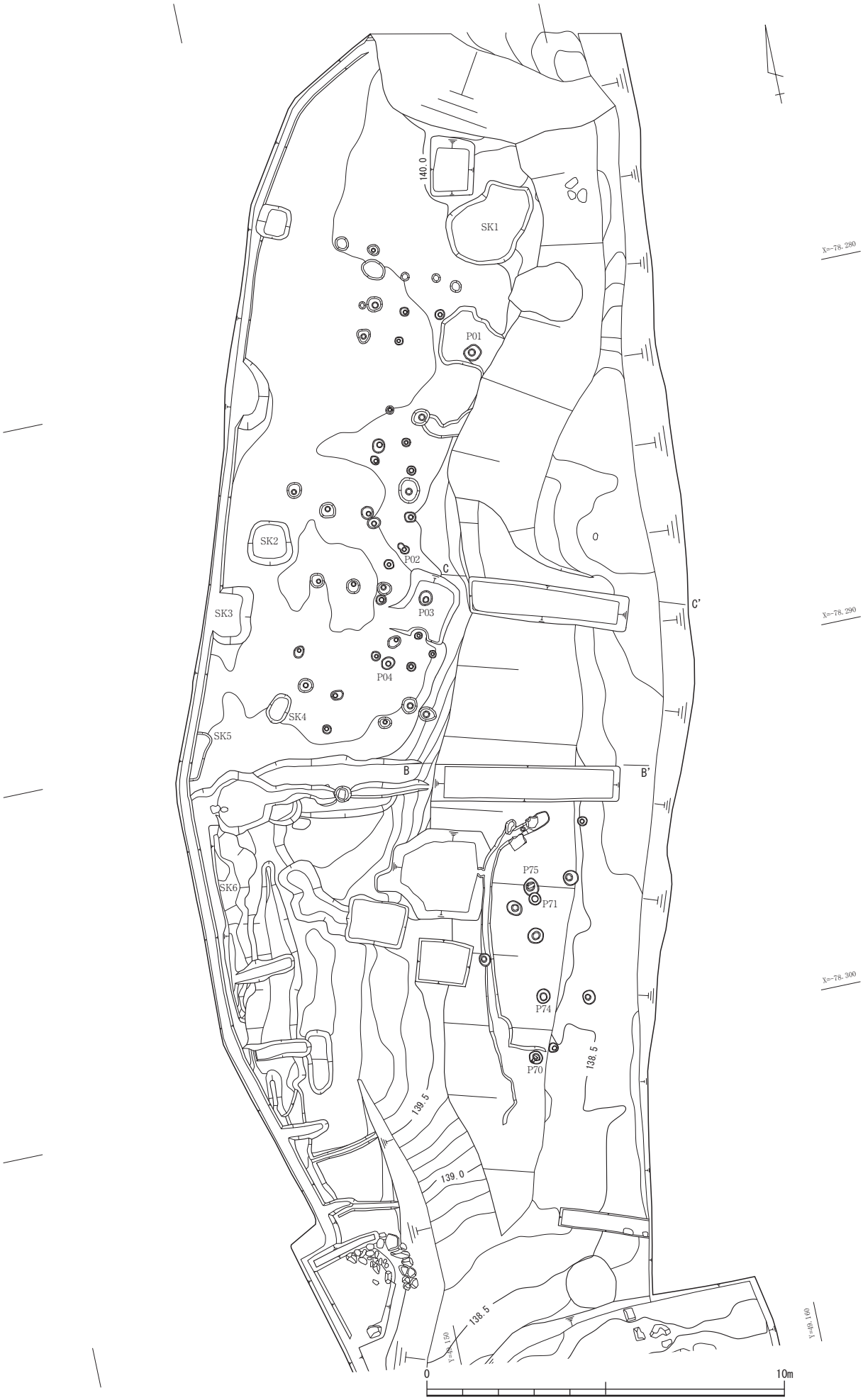
0　20cm

0　3cm

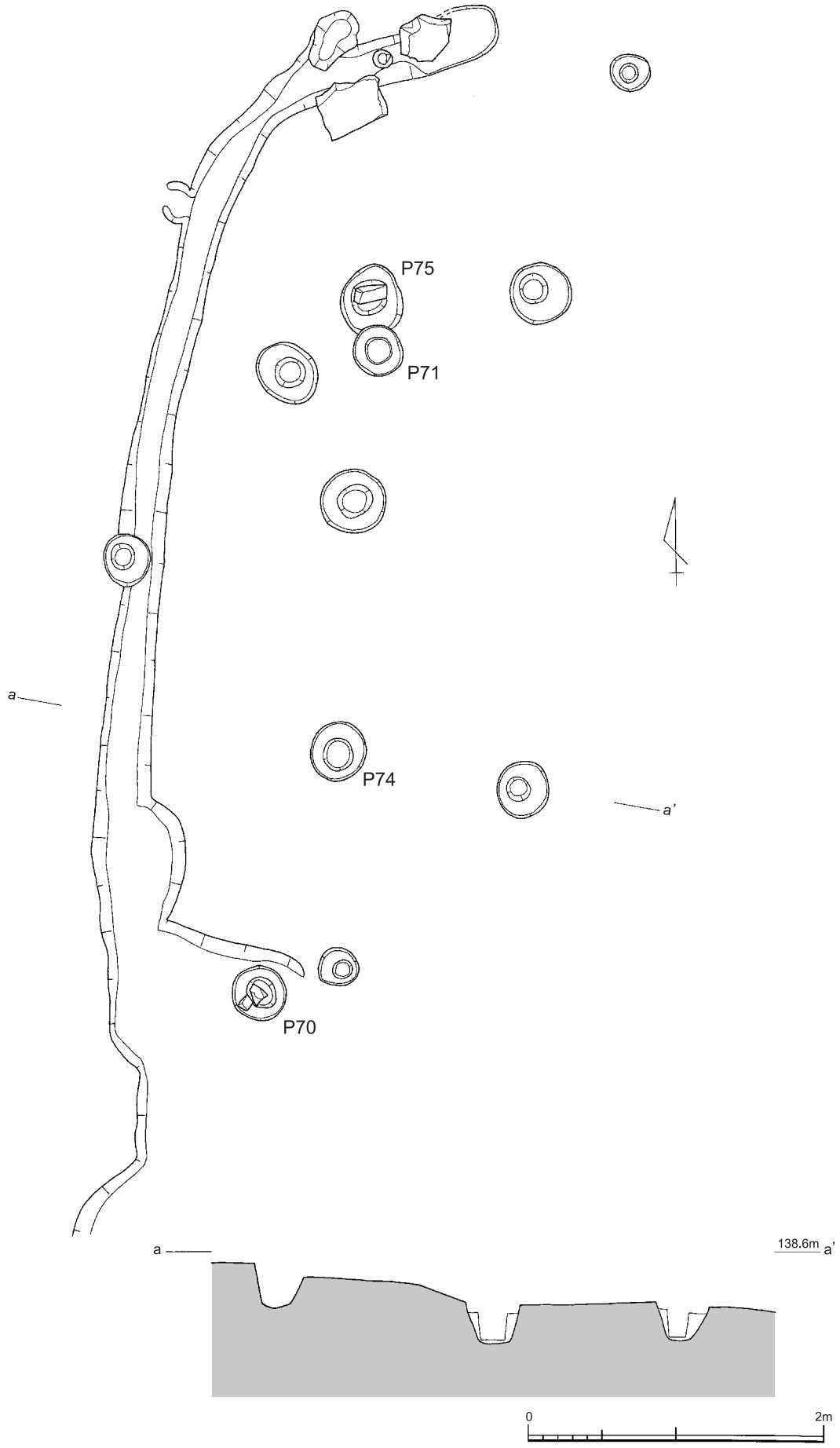


0　3cm

ＳＫ７と出土遺物

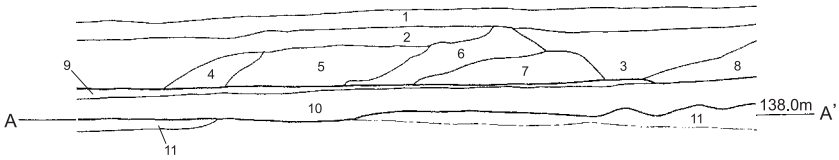

140.0
SK1
P01
SK2
P02
C
C'
SK3
P03
P04
SK4
SK5
B
B'
SK6
P75
P71
P74
P70
138.5
139.5
139.0
138.5
X=-78.280
X=-78.290
X=-78.300
Y=49.160
Y=49.150
0
10m

調査区北部の遺構



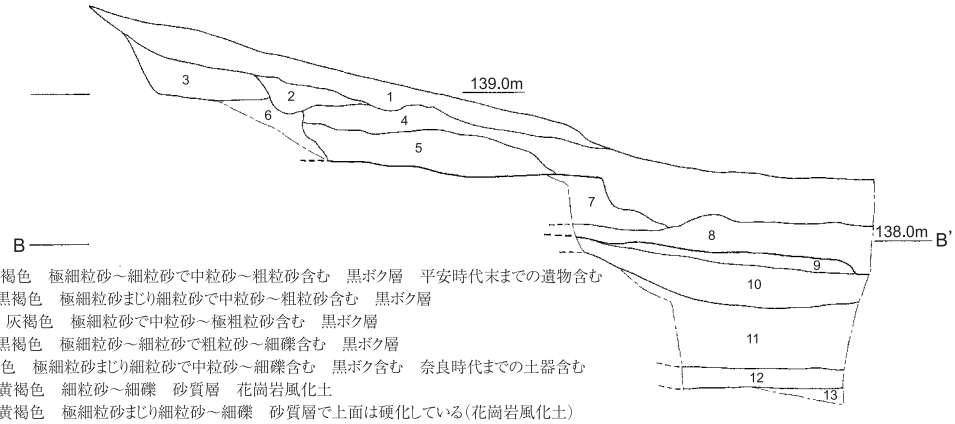
調査区北部東斜面部下層遺構

中央部



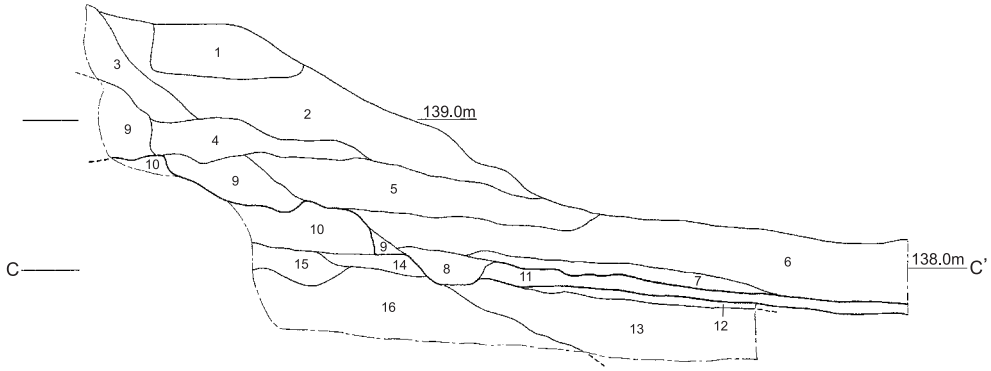
1. 耕土　10YR2/1　黒色　極細粒砂まじり細粒砂～細礫　やや砂質　畑の嵩上げ土
2. 10YR3/1.5　黒褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を非常に多く含む　畑の嵩上げ土
3. 10YR3/2　黒褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を非常に多く含む　φ3cm大の中礫および炭化物を微量含む　畑の嵩上げ土
4. 10YR4/2　灰黄褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を非常に多く含む　やや粘質　畑の嵩上げ土
5. 10YR3.4/1.8　黒褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫を非常に多く含む　φ3cm大の中礫～φ10cm大の大礫含む(軟質花崗岩)　畑の嵩上げ土
6. 10YR3/3　暗褐色　極細粒砂で細粒砂～細礫を非常に多く含む　やや締まる　畑の嵩上げ土
7. 10YR3.6/1.4　褐灰色　第5層とほぼ同じでφ15cm大の大礫(凝灰質砂岩)も含む　畑の嵩上げ土
8. 10YR3.4/1.4　黒褐色　第5層と同じ
9. タタキ層　10YR6/3.5　にぶい黄橙色　細粒砂～極粗粒砂で細礫少量含む　砂質だが非常に硬質で締まる　タタキ土間状
10. 黒ボク層　10YR3/1　黒褐色　極細粒砂～細粒砂で粗粒砂～極粗粒砂多く含む　細礫少量含む　やや粘質　奈良～平安時代の遺物包含層
11. 10YR5/2.6　にぶい黄褐色　極細粒砂まじり細粒砂～中粒砂で粗粒砂～細礫多く含む　やや砂質　奈良･平安時代の面　上面はやや凹凸　自然堆積層

北部
(南側)



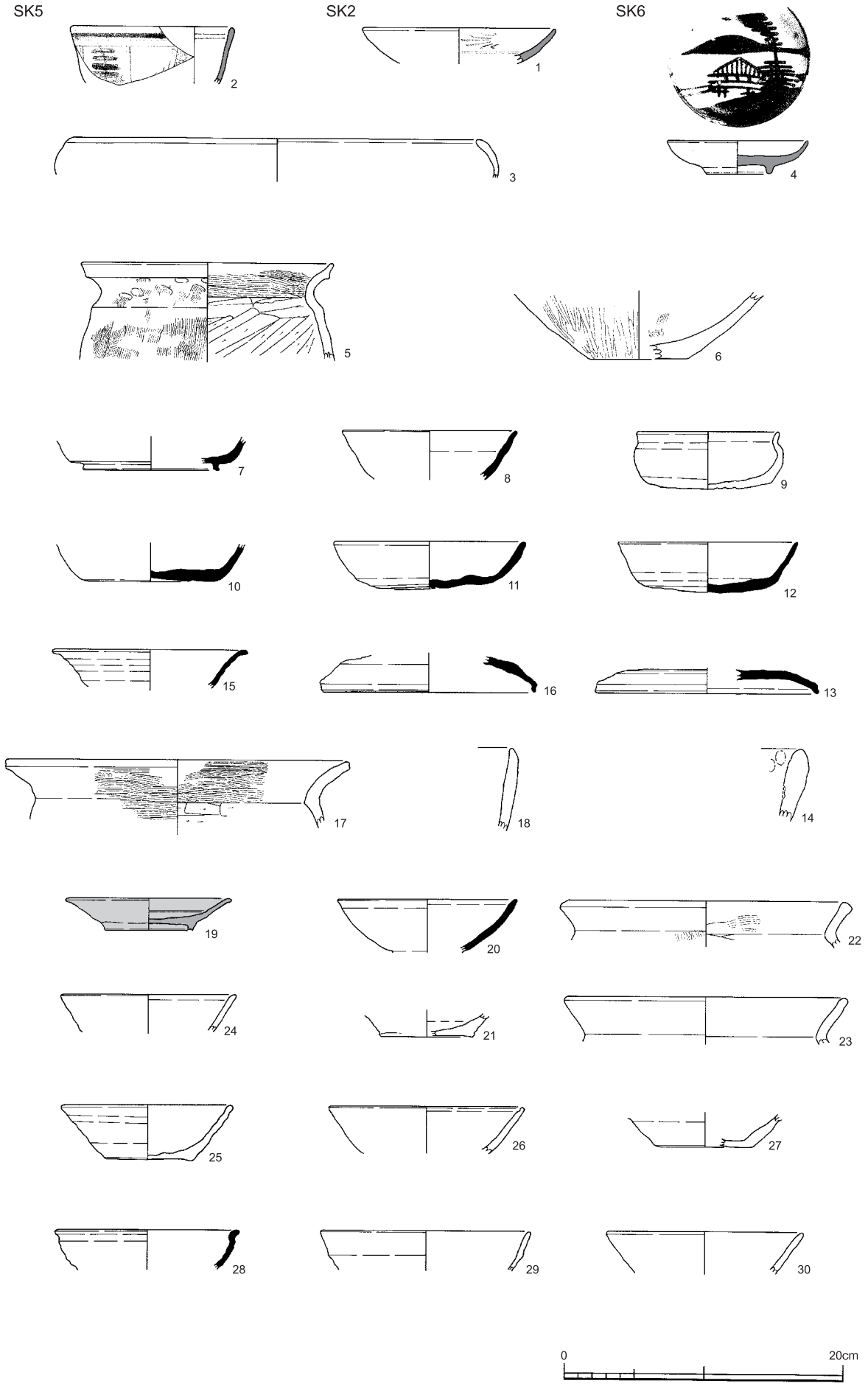
1. 7.5YR3/1　黒褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂含む　黒ボク層　平安時代末までの遺物含む
2. 7.5YR2.7/1　黒褐色　極細粒砂まじり細粒砂で中粒砂～粗粒砂含む　黒ボク層
3. 7.5YR3.8/1.7　灰褐色　極細粒砂で中粒砂～極粗粒砂含む　黒ボク層
4. 7.5YR3.2/2　黒褐色　極細粒砂～細粒砂で粗粒砂～細礫含む　黒ボク層
5. 7.5YR2/1　黒色　極細粒砂まじり細粒砂で中粒砂～細礫含む　黒ボク含む　奈良時代までの土器含む
6. 10YR6/6　明黄褐色　細粒砂～細礫　砂質層　花崗岩風化土
7. 10YR6/8　明黄褐色　極細粒砂まじり細粒砂～細礫　砂質層で上面は硬化している(花崗岩風化土)
8. 7.5YR3.4/1　黒褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫多く含む
9. 10YR5/4　にぶい黄褐色　極細粒砂で中粒砂～細礫含む
10. 7.5YR2.8/1　黒褐色　極細粒砂まじり細粒砂で中粒砂～細礫含む
11. 10YR4/2　灰黄褐色　(やや還元気味)　粗粒シルトと細粒砂～極粗粒砂含む
12. 10YR5/3　にぶい黄褐色　細粒砂～中粒砂で粗粒砂含む　軟質砂層
13. 10YR5.5/2　灰黄褐色　砂層　中粒砂～極粗粒砂　淘汰悪い　軟質

北部
(北側)

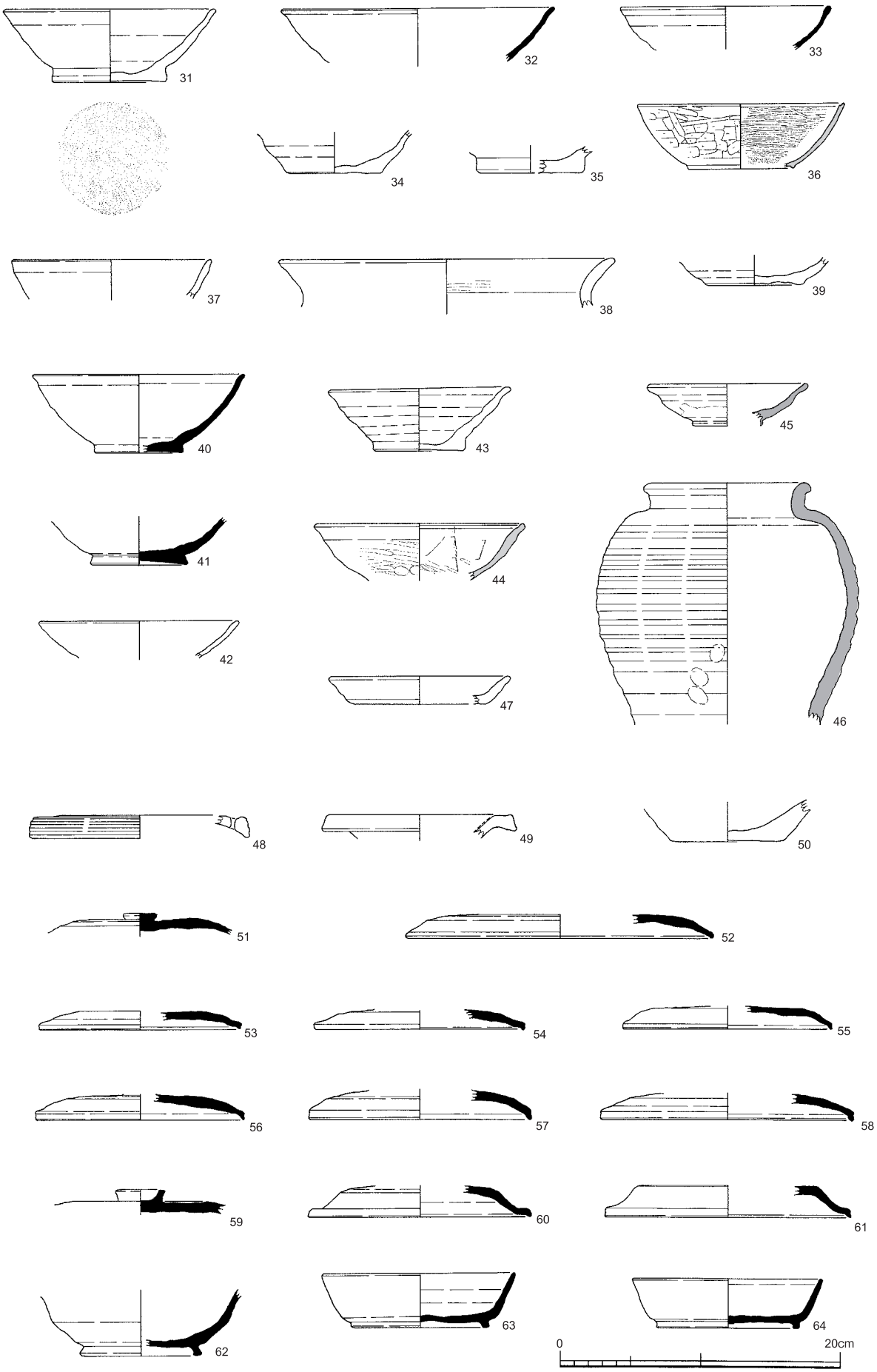


1. 10YR3/2　黒褐色　細粒砂まじり中粒砂～細礫　砂質
2. 7.5YR3/1　黒褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂含む　黒ボク層　平安時代末までの遺物含む
3. 7.5YR3/1　黒褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫含む
4. 10YR2/2　黒褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂含む
5. 7.5YR2/1　黒色　極細粒砂まじり細粒砂で中粒砂～細礫含む　黒ボク含む　奈良時代までの土器含む
6. 7.5YR3.2/2　黒褐色　極細粒砂～細粒砂で粗粒砂～細礫含む　黒ボク層
7. 7.5YR1.7/1　黒色　極細粒砂まじり細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫少量含む
8. 10YR1.9/1　黒色　シルト質極細粒砂で細粒砂～中粒砂含む
9. 10YR3/2　黒褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫含む
10. 10YR6/8　明黄褐色　極細粒砂まじり細粒砂～細礫　砂質層で上面は硬化している(花崗岩風化土)
11. 7.5YR3.4/1　黒褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫含む
12. 10YR5/4　にぶい黄褐色　極細粒砂で中粒砂～細礫多く含む
13. 7.5YR2.8/1　黒褐色　極細粒砂まじり細粒砂で中粒砂～細礫含む
14. 10YR2/1　黒色　極細粒砂で細粒砂～粗粒砂含む
15. 10YR4/2　灰黄褐色　極細粒砂～細粒砂で中粒砂～極粗粒砂含む
16. 10YR5/3　にぶい黄褐色　極細粒砂まじり細粒砂で中粒砂～細礫多く含む

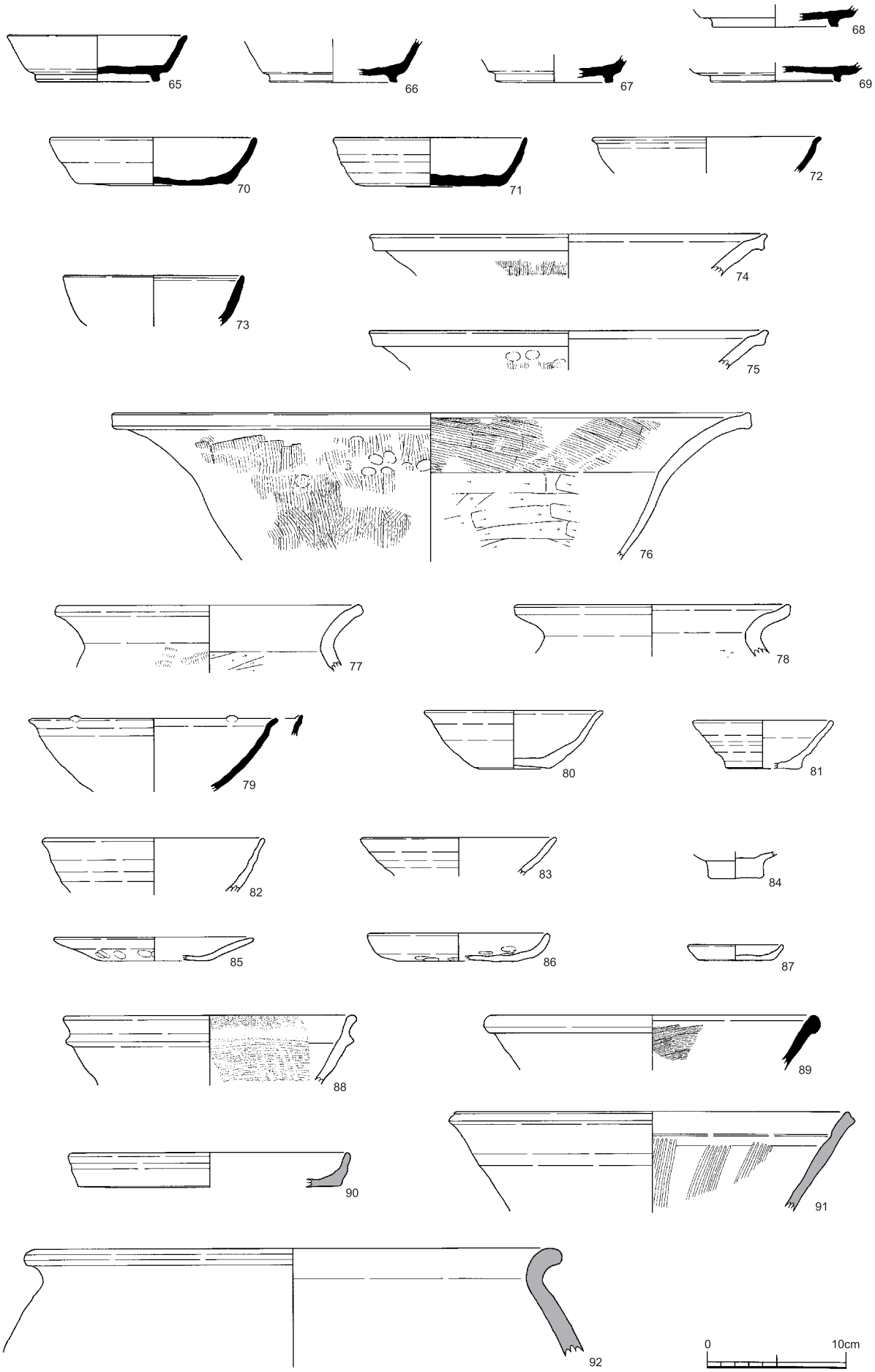
調査区中央部・北部土層断面図


SK5
SK2
SK6
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
15
16
13
17
18
14
19
20
22
24
21
23
25
26
27
28
29
30
0
20cm

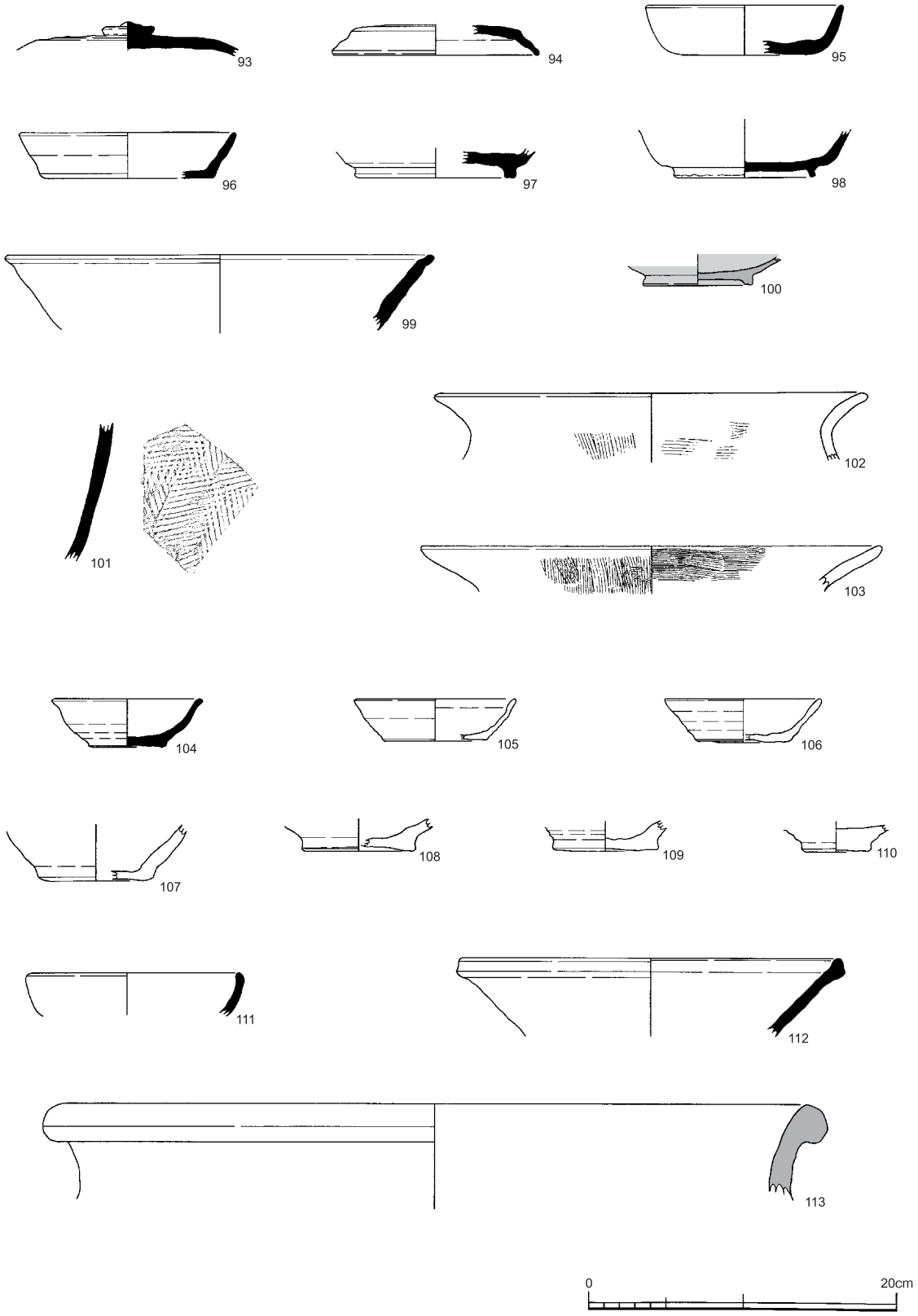
土壙・柱穴出土土器



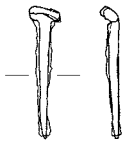
柱穴・調査区南部包含層出土土器



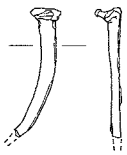
調査区中央部包含層出土土器



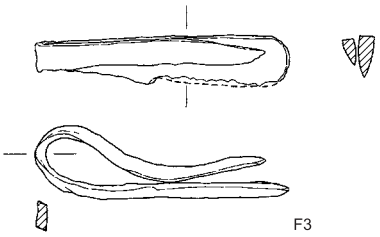
調査区北部包含層出土土器



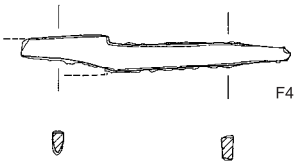
F1



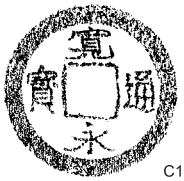
F2



F3



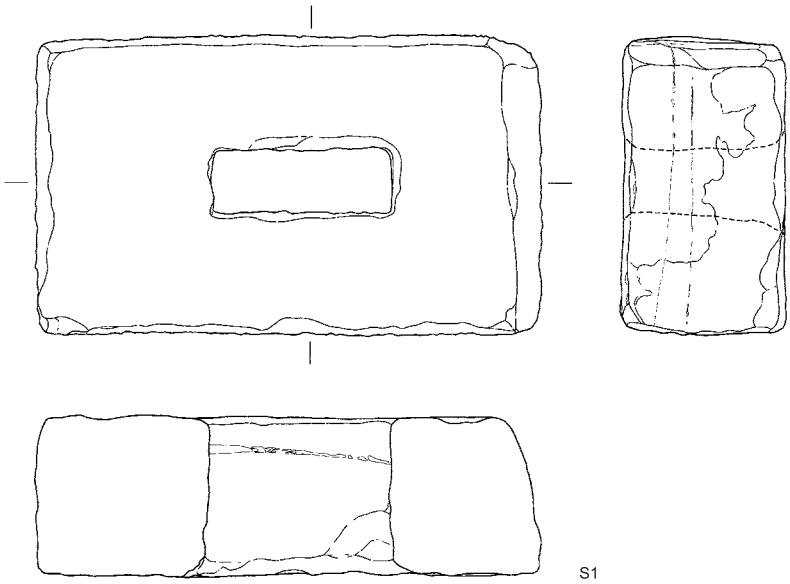
F4



C1

0 3cm

0 10cm



S1

0 20cm

出土金属器・石製品

写真図版

調査区北半部（南から）

調査区全景（北から）

調査区北部全景（北から）

調査区中央部全景（北から）

調査区南部　掘立柱建物跡（南から）

調査区南部北端　柱穴群全景（東から）

調査区南部西側壁土層断面（北から）

調査区北部南側トレンチ土層断面（南から）

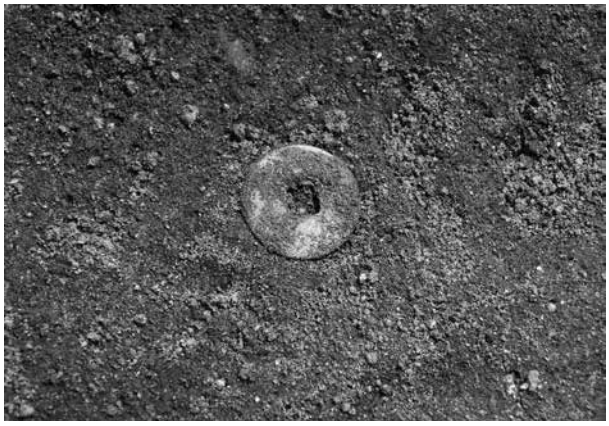
調査区北部喜多側トレンチ土層断面（南から）

調査区北部段状遺構（北から）

調査区北部段状遺構（南東から）

①ＳＫ７（西から）

②ＳＫ７完掘状況（西から）

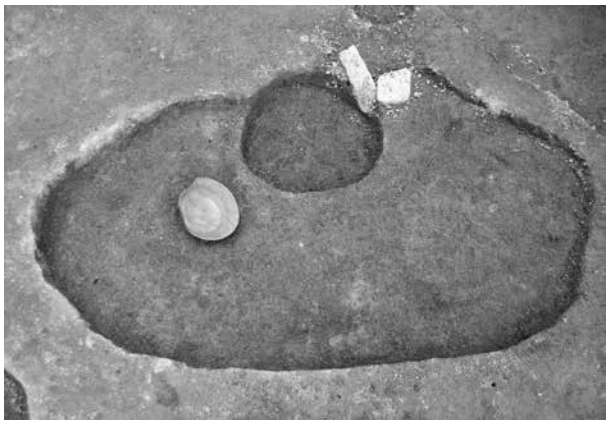


③ＳＫ７銭貨出土状況（西から）

④ＳＫ７銭貨出土状況（南から）

⑤ＳＫ７礫出土状況（南から）

⑥土器Ｂ出土状況（南から）

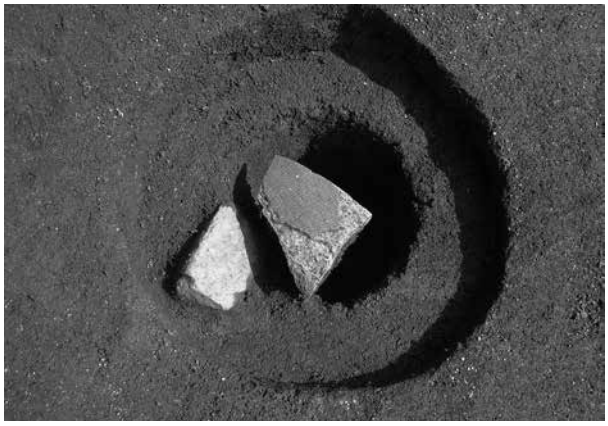


⑦土器Ｃ出土位置（南から）

⑧土器Ｃ出土状況

①P 12 土器出土状況（南東から）

②P 54 土器出土状況（西から）



③P 70 土器出土状況（南から）

④P 33 土器出土状況（北から）

⑤P 47 土器出土状況（西から）

⑥P 62 土器出土状況（北から）

⑦P 59 土器出土状況（北西から）

⑧P 74 礎石出土状況（東から）

①調査地遠景（南から）

②調査前全景（南から）

③調査前全景（北から）

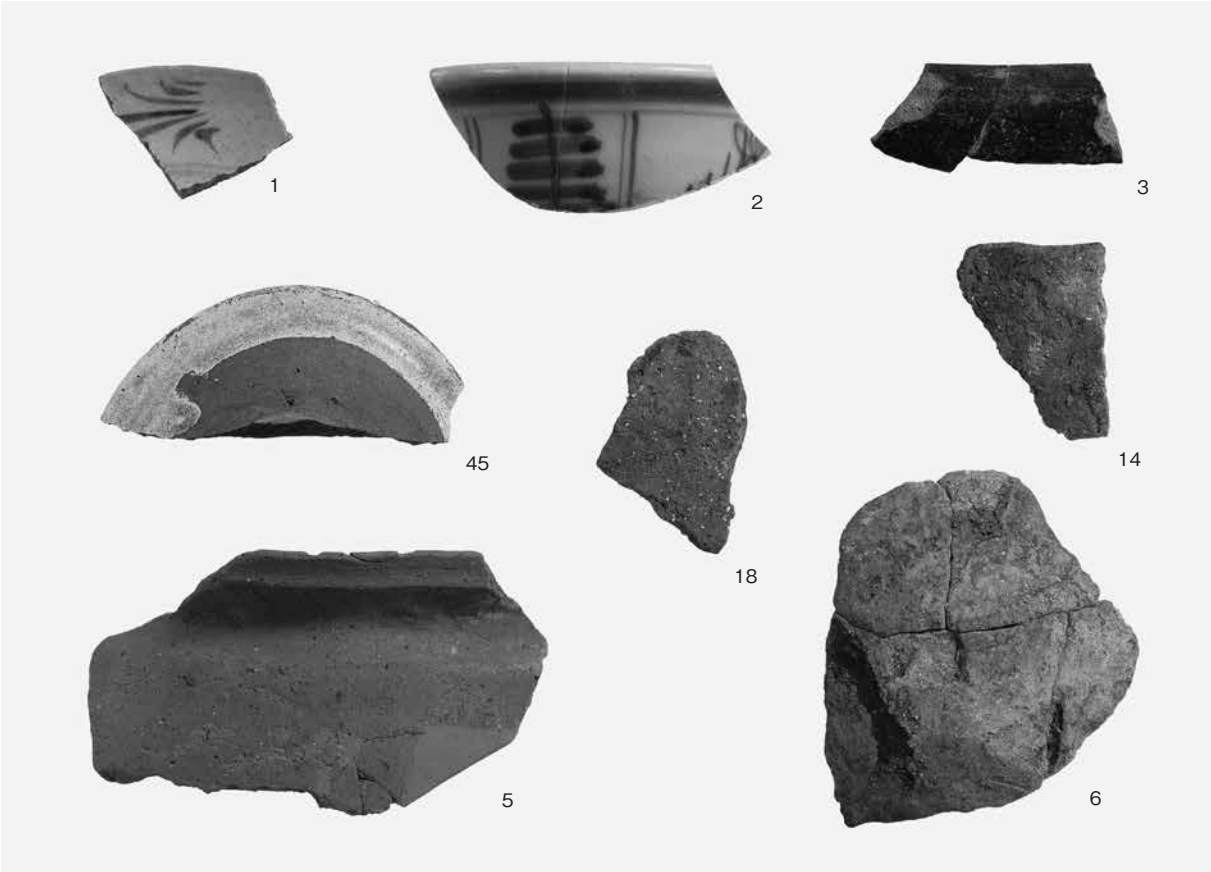
④機械掘削状況（南から）

⑤人力掘削状況（南から）

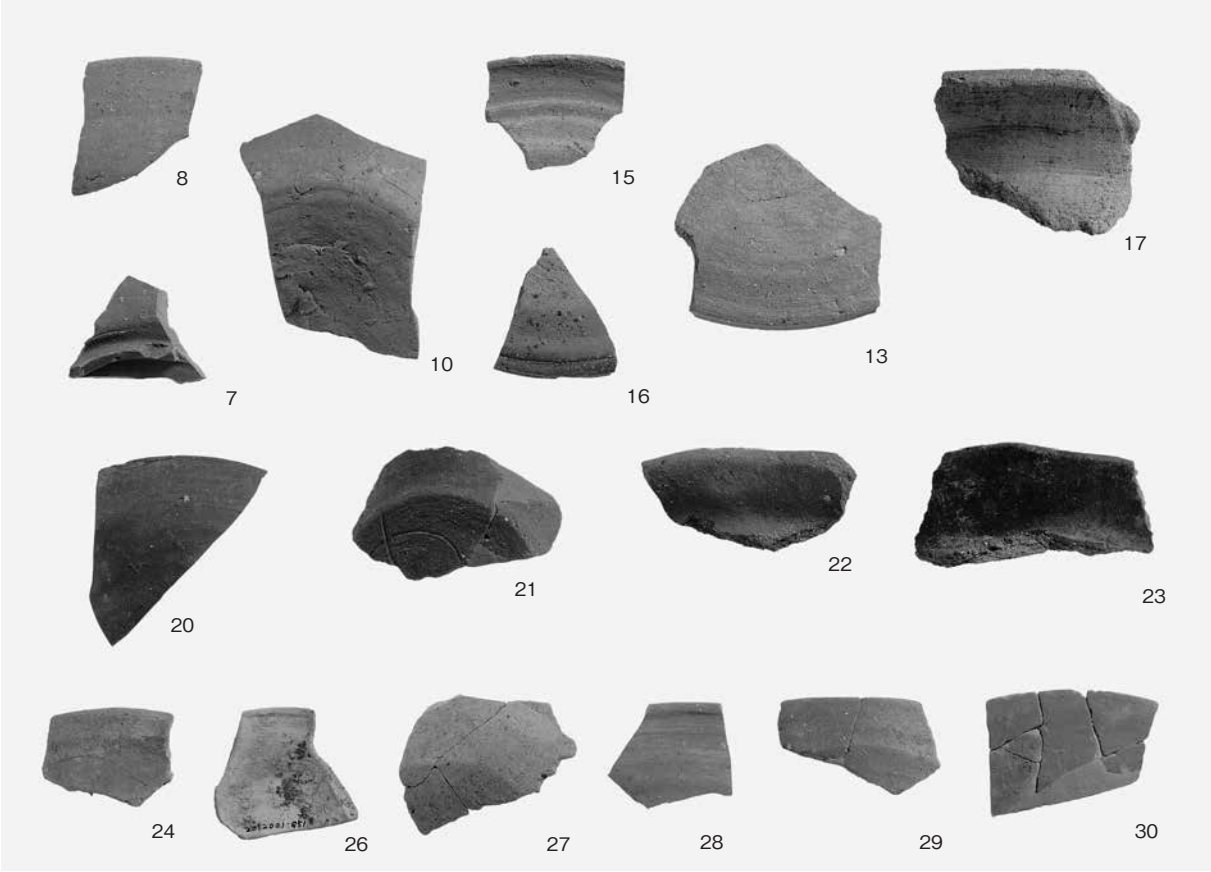
⑥遺構掘削状況（東から）

⑦地元説明会開催状況（北から）

⑧押坂神社（南から）



土壙出土土器（1）・柱穴出土土器（1）



柱穴出土土器（2）

4

9

11

12

19

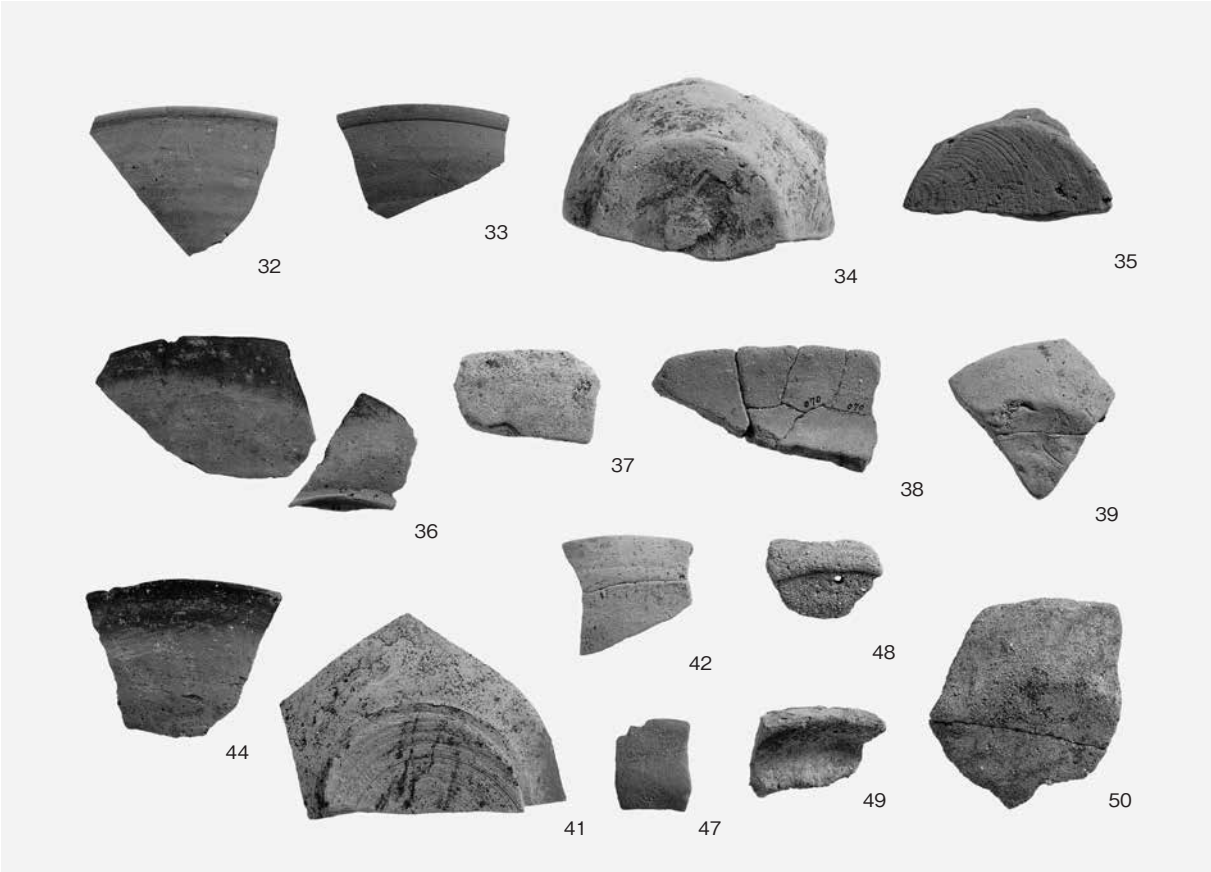
25

40

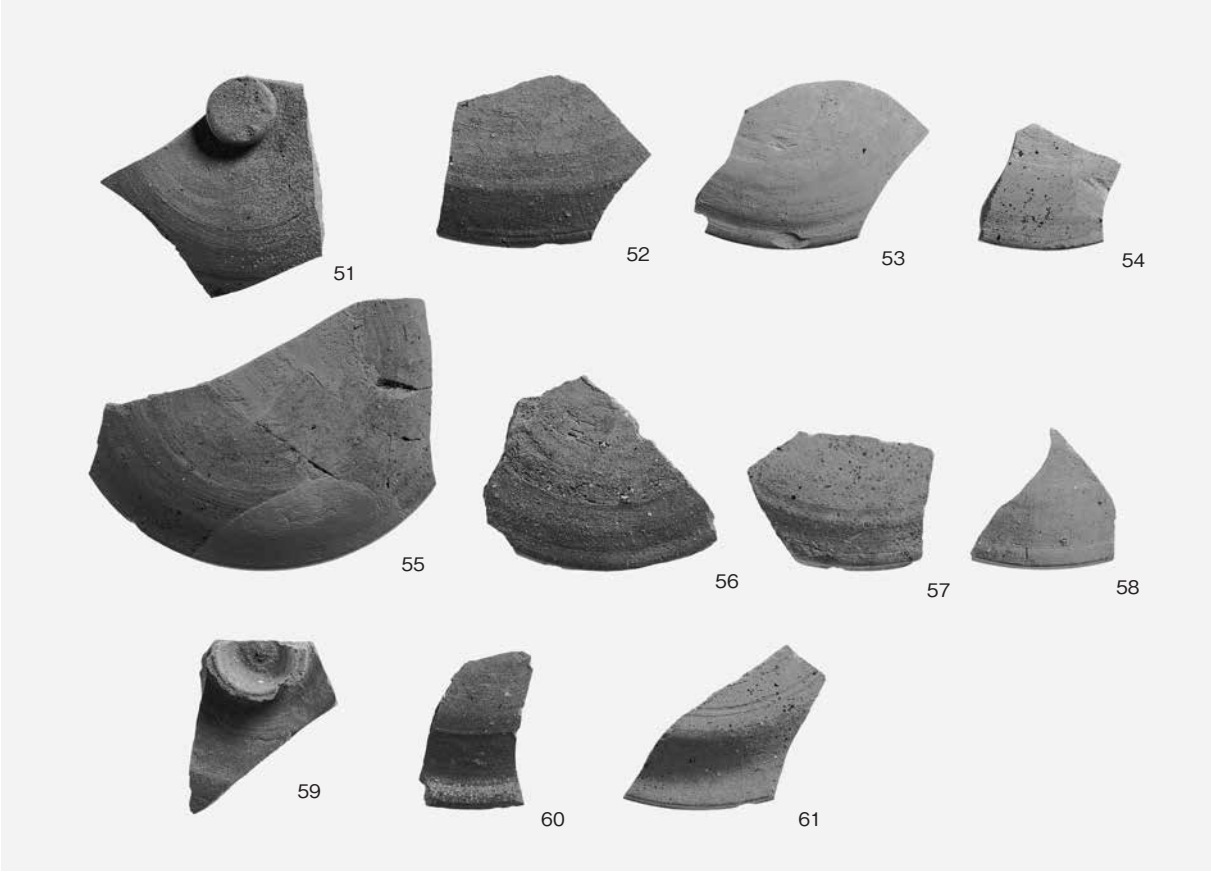
31

43

土壙出土土器（2）・柱穴出土土器（3）



柱穴出土土器（4）、南部・中央部包含層出出土土器（1）



南部・中央部包含層出土土器（2）

46

62

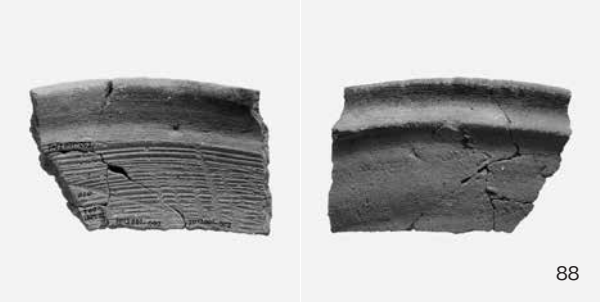
63

65

79

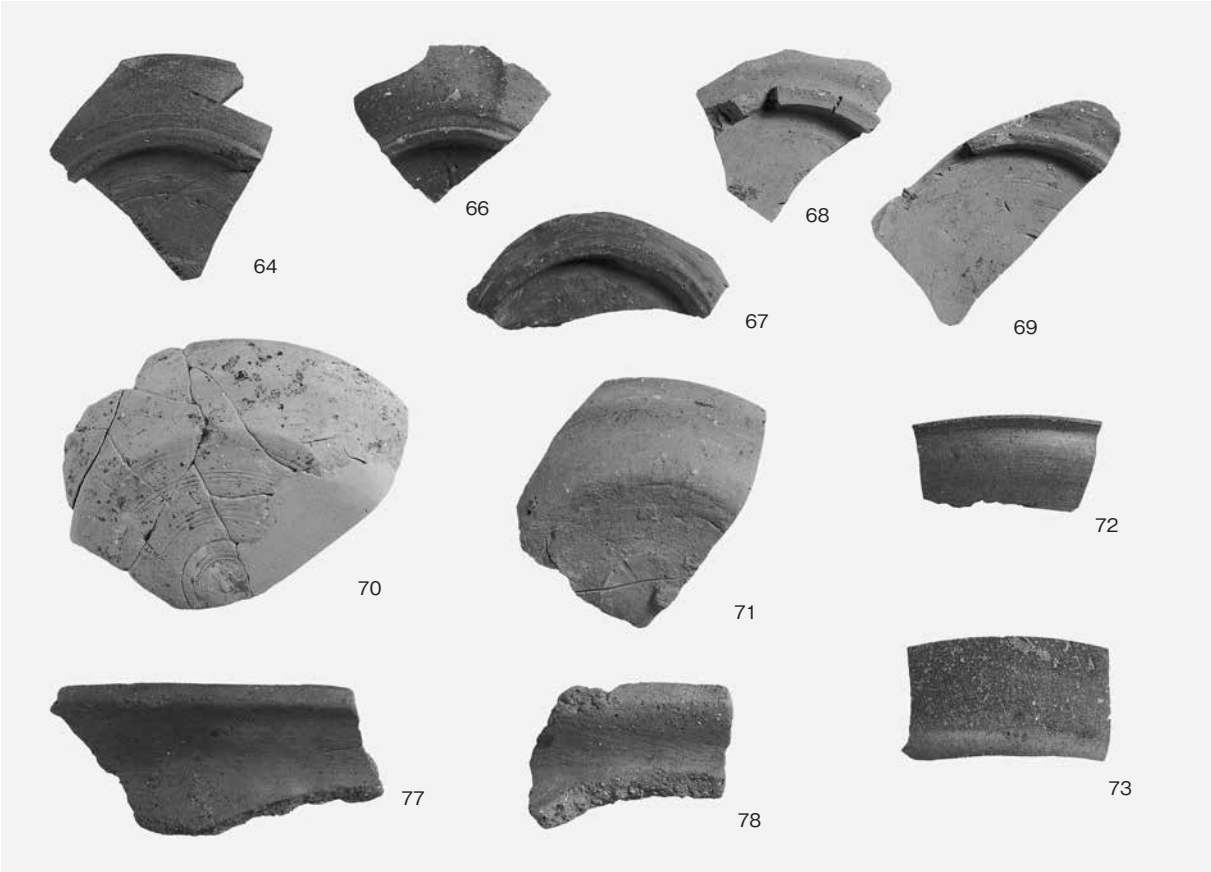
80

85


88

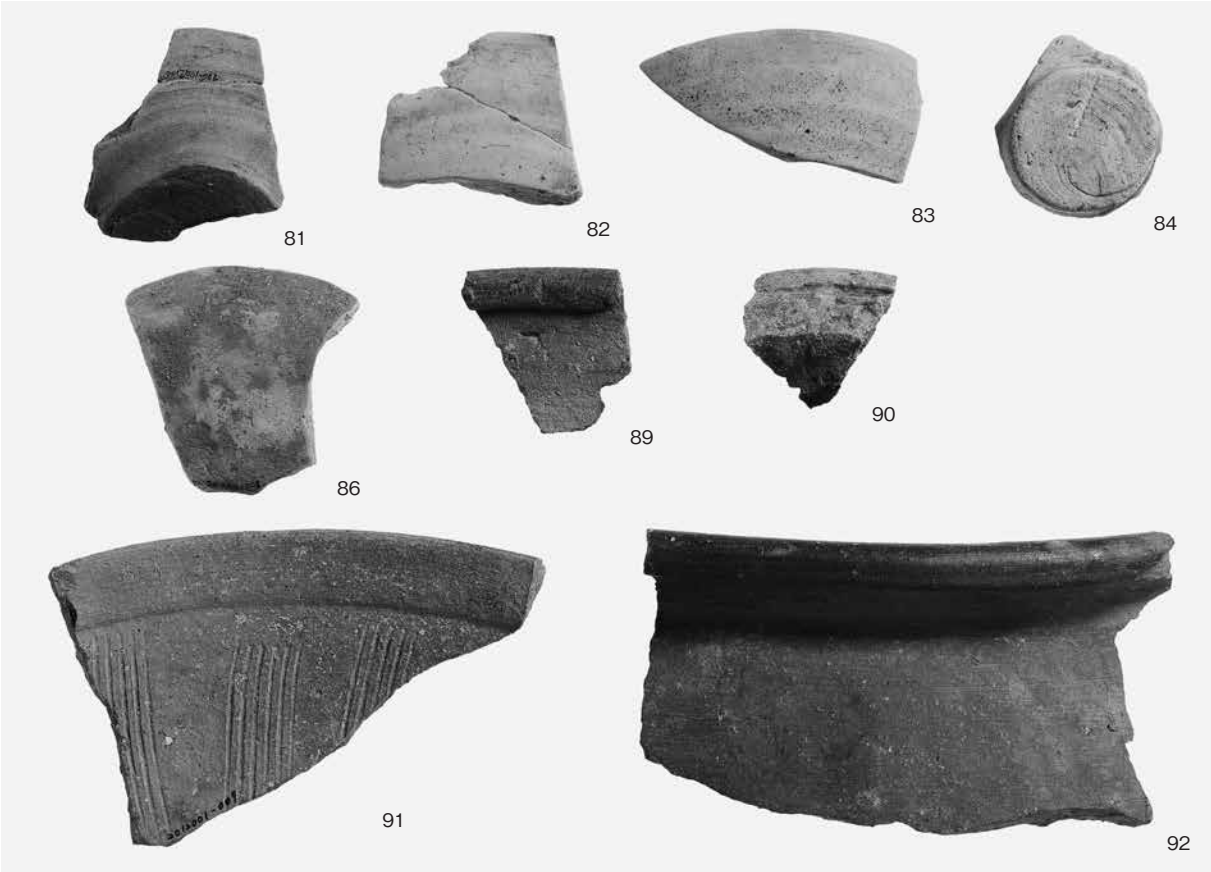
87

柱穴出土土器（5）、南部・中央部・北部包含層出土土器

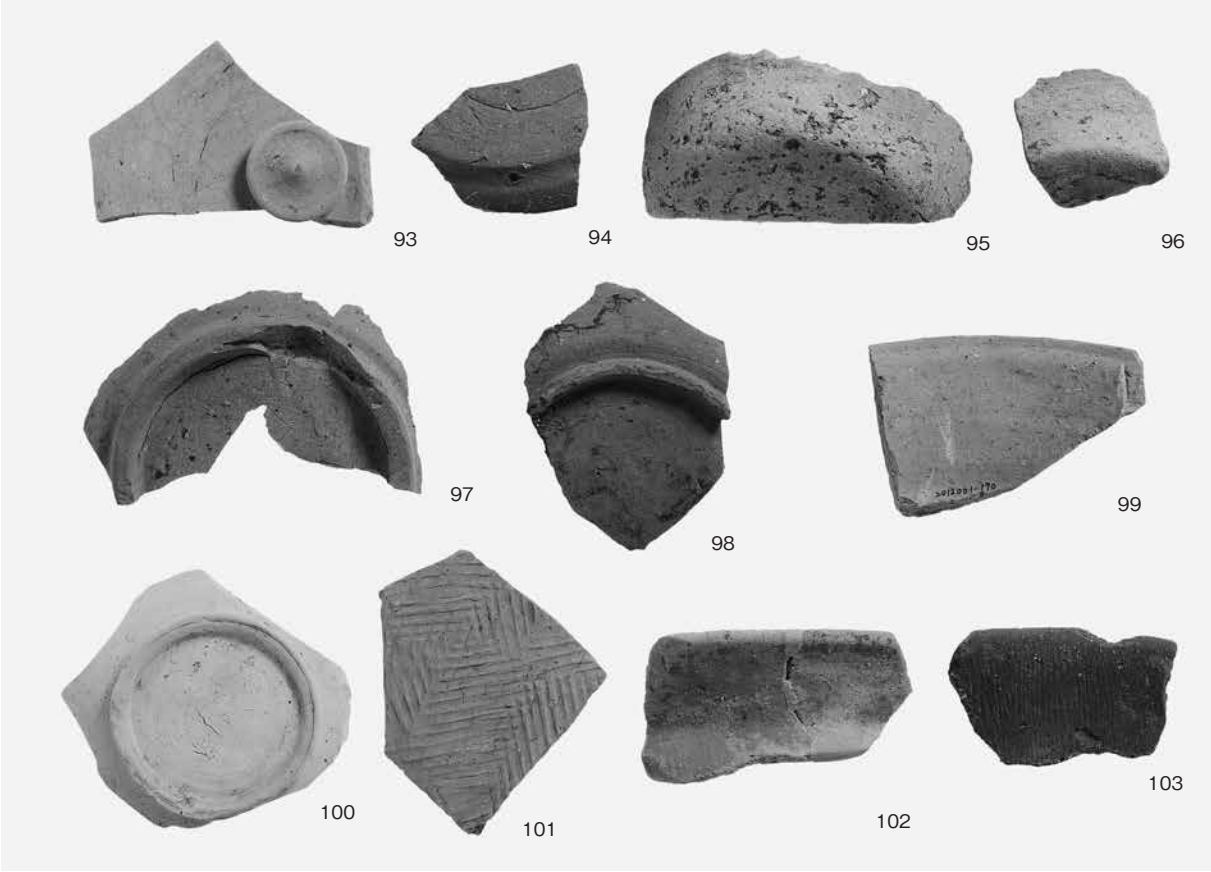


南部・中央部包含層出土土器（3）

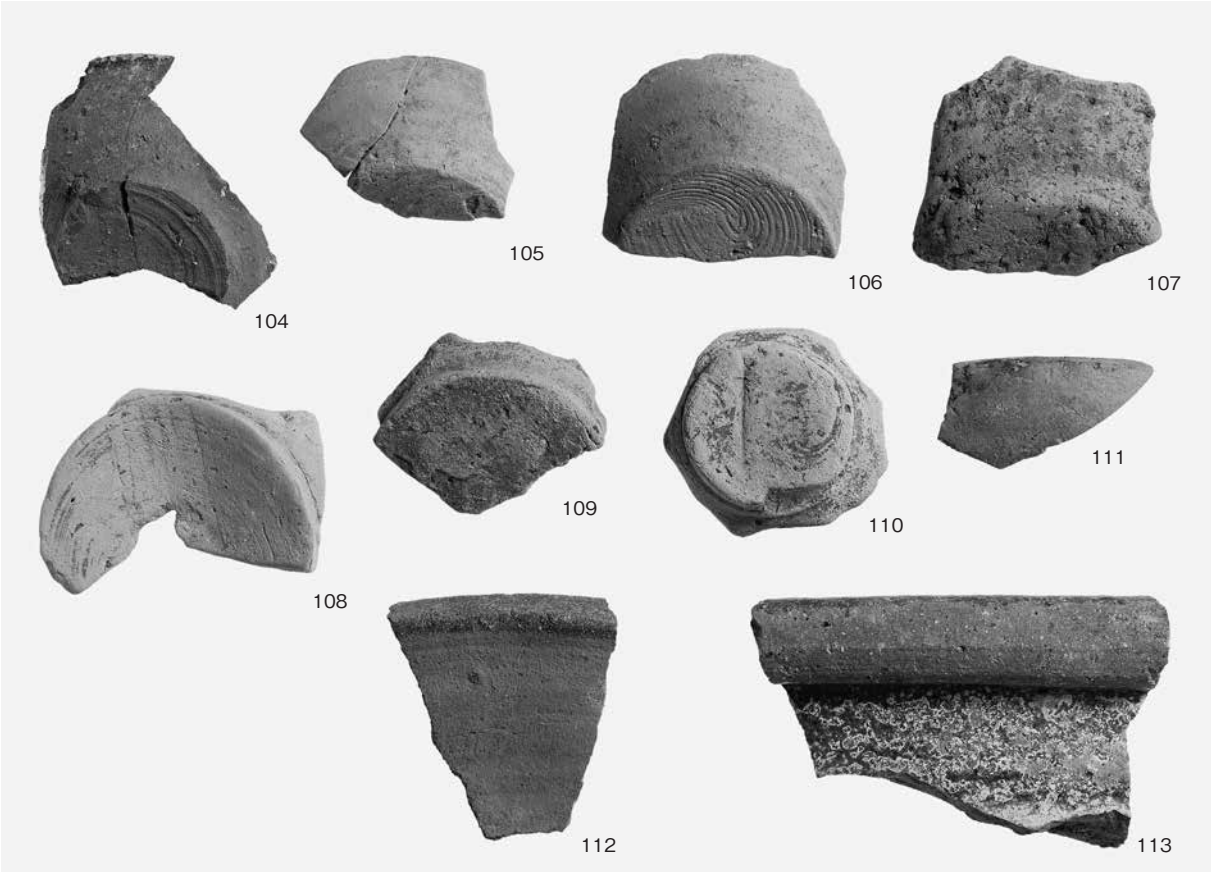
南部・中央部包含層出土土器（4）



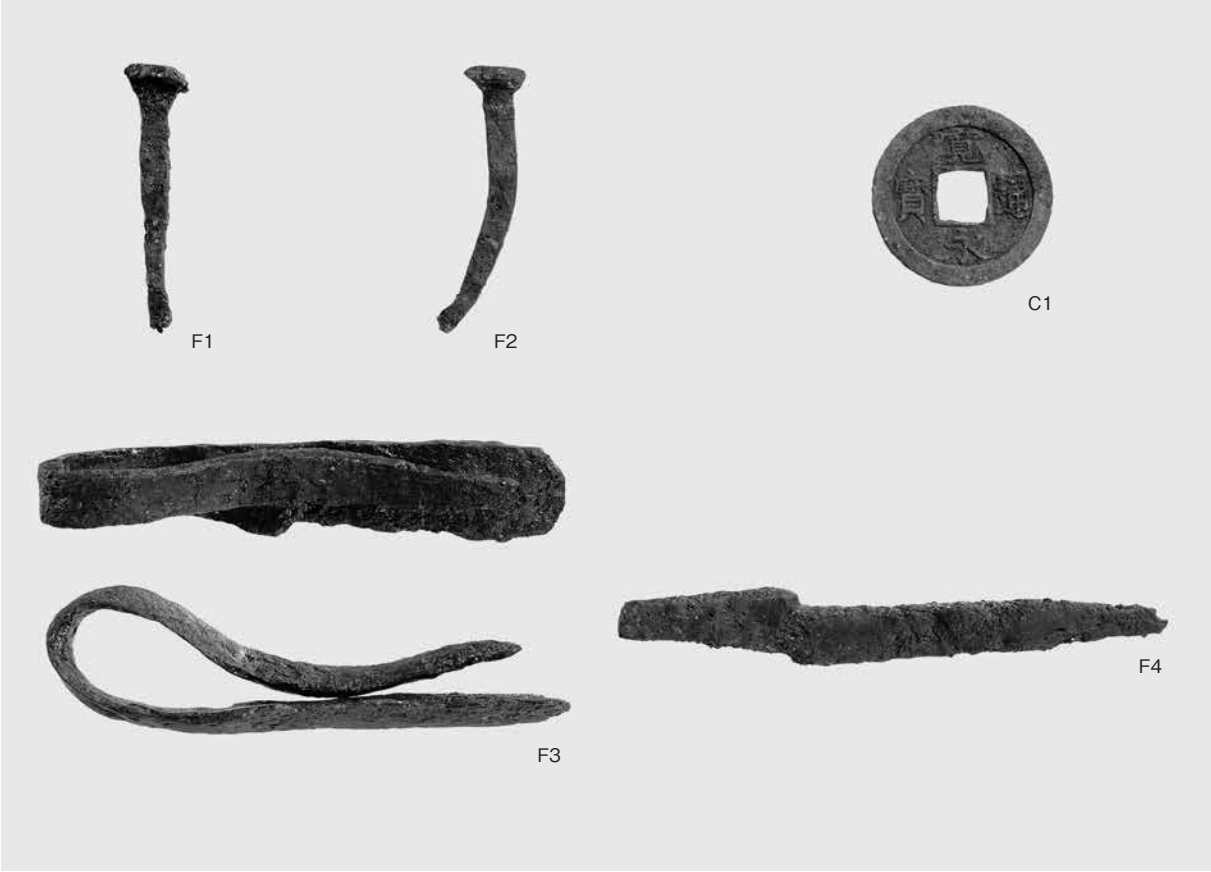
中央部包含層出土土器



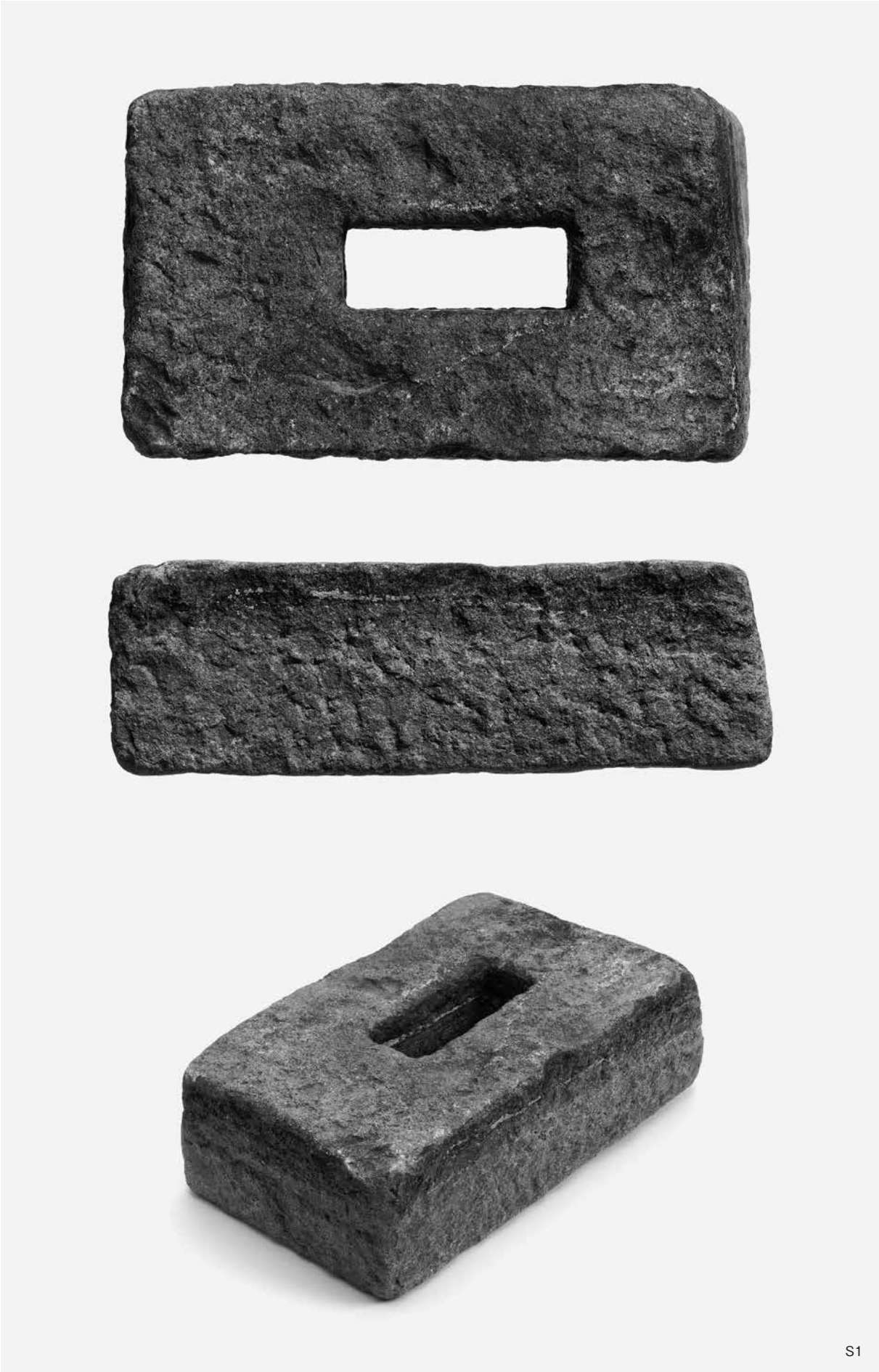
北部包含層出土土器（1）



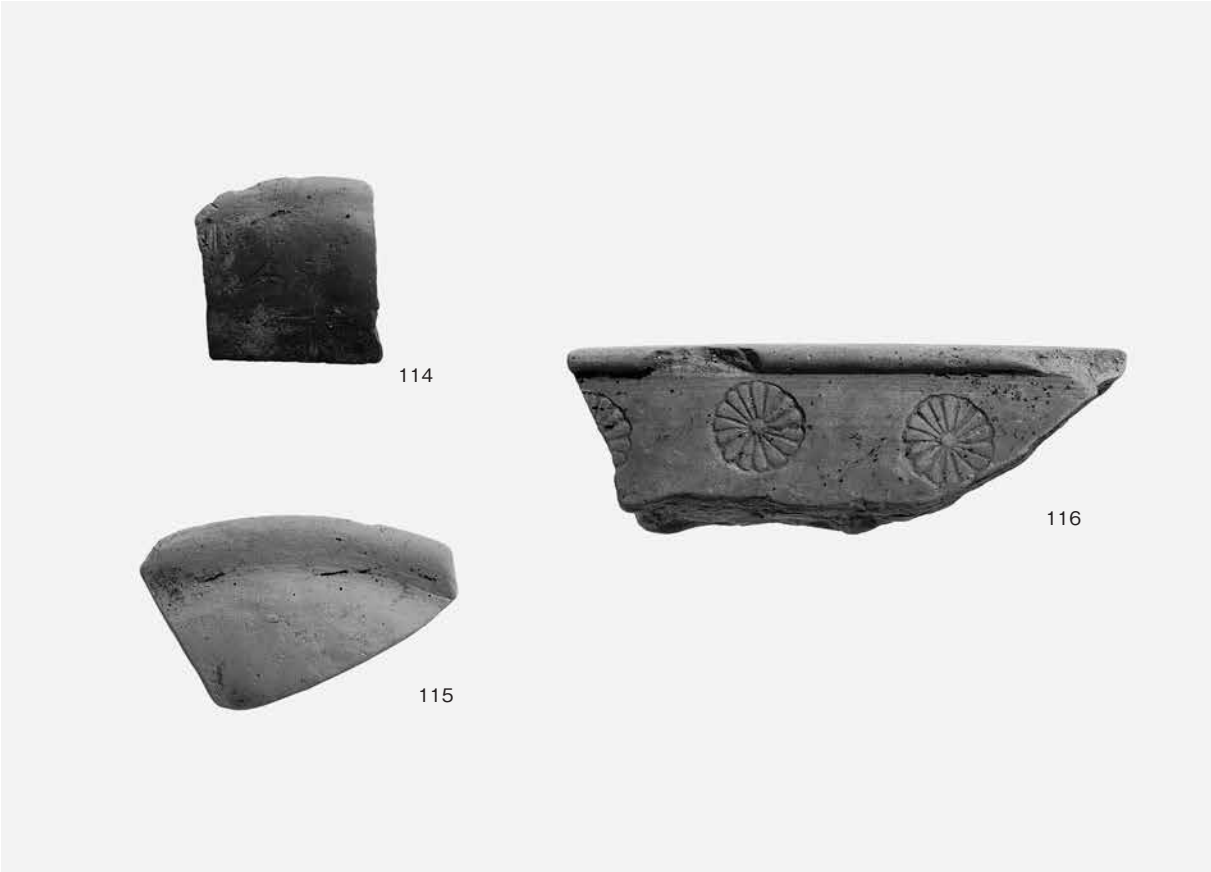
北部包含層出土土器（2）



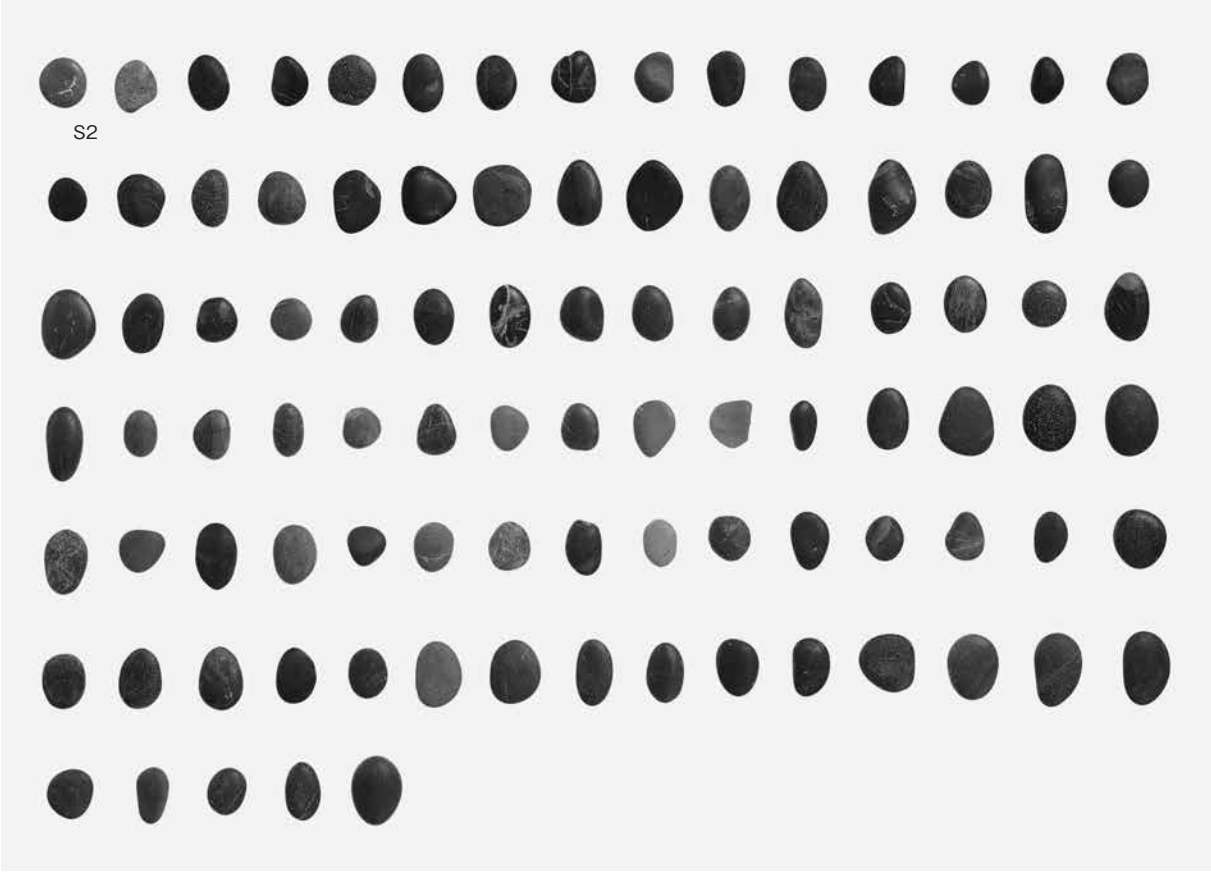
出土金属器



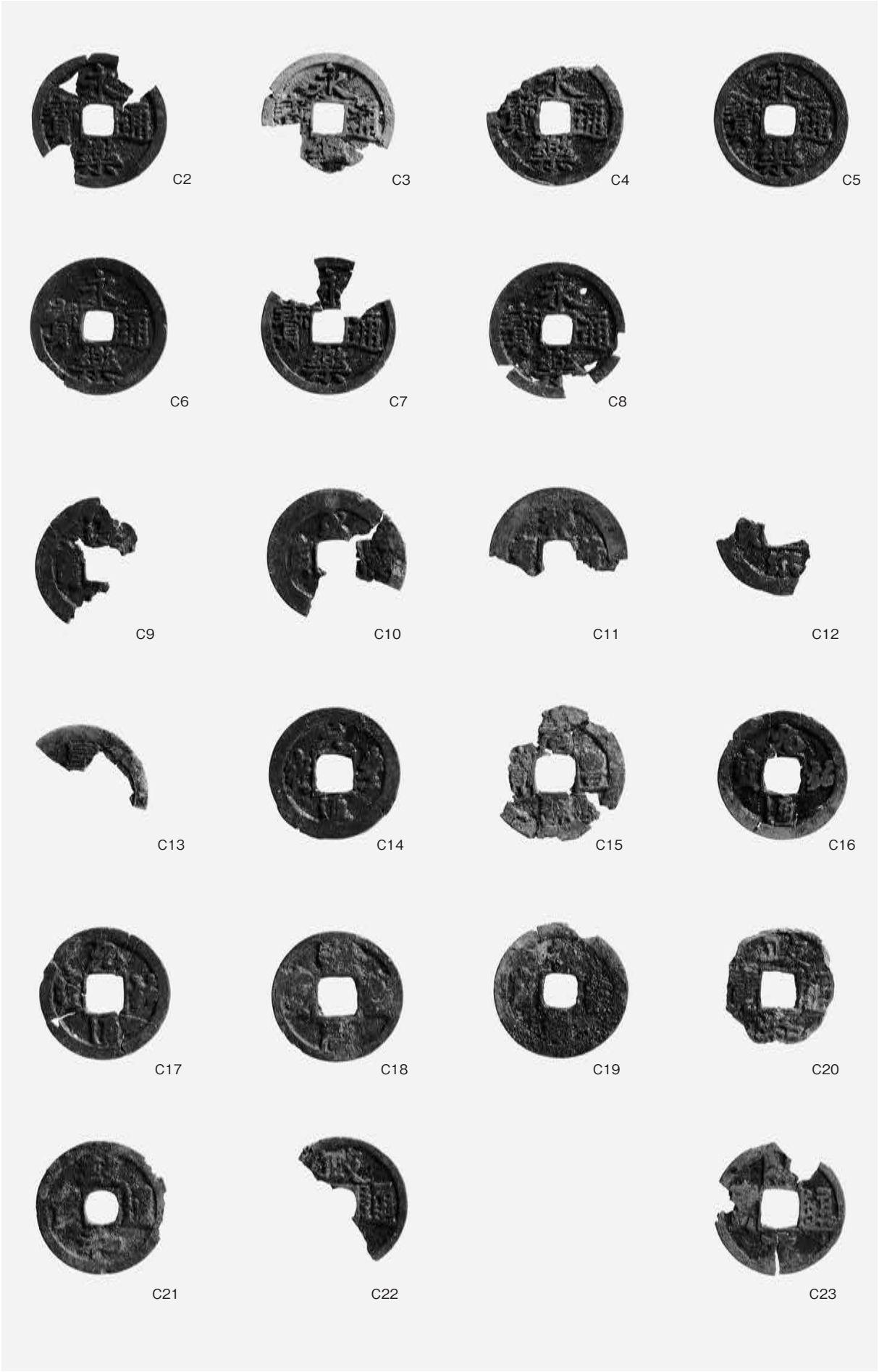
北部・中央部間水路出土石製品



ＳＫ７出土土器



ＳＫ７出土黒色小礫


C2
C3
C4
C5
C6
C7
C8
C9
C10
C11
C12
C13
C14
C15
C16
C17
C18
C19
C20
C21
C22
C23

ＳＫ７出土古銭

兵庫県文化財調査報告　第464冊

朝来市

喜　多　垣　遺　跡

道路改良事業　一般県道檜倉山東線に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書 Ⅲ

平成26（2014）年3月28日　発行

編　集　公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター
埋蔵文化財調査部
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
（兵庫県立考古博物館内）

発　行　兵　庫　県　教　育　委　員　会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印　刷　交　友　印　刷　株　式　会　社
〒650-0047　神戸市中央区港島南町5丁目4番5号